

# Oracle® Enterprise Performance Management System

Lifecycle Management Guide

リリース 11.1.2.3

Oracle および Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

#### U.S. GOVERNMENT RIGHTS:

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことにより起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

---

# 目次

---

ドキュメントのアクセシビリティについて .....	13
<b>第 1 章 ライフサイクル管理について .....</b>	<b>15</b>
ライフサイクル管理と移行 .....	15
ライフサイクル管理の機能 .....	15
ライフサイクル管理のコンポーネント .....	16
ライフサイクル管理をサポートする EPM System 製品とコンポーネント .....	17
<b>第 2 章 ライフサイクル管理の開始 .....</b>	<b>19</b>
ライフサイクル管理の要件 .....	19
使用の前提条件 .....	19
ソースと宛先に関する考慮事項 .....	19
ファイル・システムの考慮事項 .....	20
アプリケーションおよびアプリケーション・グループ .....	20
ライフサイクル管理での移行時の EPM System 環境の可用性 .....	20
その他の重要事項 .....	21
ライフサイクル管理のインストール .....	21
Shared Services 高可用性用のライフサイクル管理の構成 .....	22
ライフサイクル管理のクイック・スタート .....	22
バックアップおよびリカバリ .....	24
セキュリティ .....	24
<b>第 3 章 ライフサイクル管理の用途 .....</b>	<b>25</b>
Shared Services の用途 .....	25
ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行と一括のセキュリティ更新 .....	25
タスクフローの移行 .....	25
Shared Services レジストリ・データの編集 .....	26
特定の EPM System アプリケーションのプロビジョニング・アーティファクトの移行 .....	26
LCM デザイナーの役割での移行 .....	27
アーティファクト移行の用途 .....	29
製品間でアーティファクトの依存関係があるアプリケーションの移行 ...	29
編集目的でのアーティファクトのエクスポートとインポート .....	29

アーティファクトの単独編集 .....	29
バージョン・コントロール・システムにおけるライフサイクル管理の使用 ...	30
ライフサイクル管理と既存のワークフロー・システムとの統合 .....	31
<b>第 4 章 Shared Services Console .....</b>	<b>33</b>
Shared Services Console の概要 .....	33
Shared Services Console の起動 .....	33
ライフサイクル管理および Shared Services Console の統合 .....	34
<b>第 5 章 アプリケーションおよびアプリケーション・グループでの作業 .....</b>	<b>35</b>
概要 .....	35
アプリケーション・グループの使用 .....	35
アプリケーション・グループの作成 .....	36
アプリケーション・グループ・プロパティの変更 .....	37
アプリケーション・グループの削除 .....	37
アプリケーションの管理 .....	38
アプリケーションの移動 .....	38
複数のアプリケーションの削除 .....	39
アプリケーションの削除 .....	39
<b>第 6 章 ライフサイクル管理および Shared Services Console での作業 .....</b>	<b>41</b>
アーティファクトの表示 .....	41
アーティファクトの検索 .....	42
アーティファクトの移行 .....	43
ファイル・システムへのエクスポート .....	44
ファイル・システムからのインポート .....	46
移行オプションの設定 .....	47
編集する個々のアーティファクトのエクスポートとインポート .....	52
アプリケーション・アーティファクトのダウンロードおよびアップロード .....	54
ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行 .....	56
Shared Services レジストリ・データの編集 .....	58
Shared Services レジストリ・データの表示 .....	59
Shared Services レジストリ・データのエクスポート .....	59
Shared Services レジストリ・データの編集 .....	60
Shared Services レジストリ・データのインポート .....	60
移行プロパティの編集 .....	60
ライフサイクル管理のレポート .....	62
移行ステータス・レポート .....	63
アプリケーション監査レポート .....	64
アーティファクトの変更レポート .....	65

<b>第 7 章 ライフサイクル管理ユーティリティの使用法</b> .....	67
ライフサイクル管理ユーティリティのプロセス .....	67
ライフサイクル管理ユーティリティの機能 .....	69
ライフサイクル管理ユーティリティのインストール .....	69
移行定義の使用 .....	69
移行定義の作成 .....	69
移行定義ファイルの XML スキーマ .....	70
移行定義ファイルの要素 .....	70
サンプルの移行定義ファイル .....	74
ライフサイクル管理ユーティリティの使用法 .....	75
概要 .....	75
移行を開始する前に .....	75
ライフサイクル管理ユーティリティの実行 .....	75
コマンドライン引数 .....	76
追加のコマンドライン・ユーティリティ .....	80
アクティビティの変更レポート .....	80
EPMExportAll .....	81
EPMImportAll .....	81
<b>付録 A. 配置メタデータとライフサイクル管理</b> .....	83
配置メタデータのアーティファクトについて .....	83
配置メタデータの役割の要件 .....	84
配置メタデータのエクスポートおよびインポートの前提条件 .....	84
配置メタデータのアーティファクト・リスト .....	84
登録アーティファクト・リストについて .....	84
登録アーティファクト .....	85
Shared Services レジストリのアーティファクト .....	85
配置メタデータの移行に関する考慮事項 .....	85
配置メタデータのエクスポートおよびインポートのオプション .....	86
ライフサイクル管理のログ・ファイル .....	86
<b>付録 B. Calculation Manager とライフサイクル管理</b> .....	87
Calculation Manager のアーティファクトについて .....	87
Calculation Manager の役割の要件 .....	87
Calculation Manager の移行の前提条件 .....	88
Calculation Manager のアーティファクト・リスト .....	88
アーティファクト・リストについて .....	89
ルール of アーティファクト .....	89
ルール・セット of アーティファクト .....	89
式 of アーティファクト .....	90

スクリプトのアーティファクト .....	90
テンプレートのアーティファクト .....	90
Calculation Manager アプリケーションの移行および製品間のアーティファクト の依存関係 .....	90
移行におけるエクスポートとインポートのオプション .....	91
サンプルの移行定義ファイル .....	91
ライフサイクル管理のログ・ファイル .....	92
<b>付録 C. Essbase とライフサイクル管理 .....</b>	<b>93</b>
Essbase アーティファクトについて .....	93
Essbase の役割の要件 .....	94
Essbase の移行の前提条件 .....	94
Essbase のアーティファクト・リスト .....	95
アーティファクト・リストについて .....	95
Essbase Server アーティファクト .....	95
Essbase アプリケーション・アーティファクト .....	96
Essbase データベース・アーティファクト .....	96
Essbase の移行に関する考慮事項 .....	98
Essbase アプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係 .....	98
移行におけるエクスポートとインポートのオプション .....	99
移行のエクスポート・オプション .....	99
移行のインポート・オプション .....	99
サンプルの移行定義ファイル .....	100
ライフサイクル管理のログ・ファイル .....	100
<b>付録 D. Essbase Studio とライフサイクル管理 .....</b>	<b>101</b>
Essbase Studio アーティファクトについて .....	101
Essbase Studio の役割の要件 .....	101
Essbase Studio の移行の前提条件 .....	102
Essbase Studio のアーティファクト・リスト .....	102
アーティファクト・リストについて .....	102
Essbase Studio アーティファクト .....	103
Essbase Studio の移行に関する考慮事項 .....	103
Essbase Studio アプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関 係 .....	103
移行におけるエクスポートとインポートのオプション .....	103
移行のエクスポート・オプション .....	103
移行のインポート・オプション .....	103
サンプルの移行定義ファイル .....	104
ライフサイクル管理のログ・ファイル .....	105

<b>付録 E. FDMEE およびライフサイクル管理</b> .....	107
FDMEE アーティファクトについて .....	107
FDMEE の役割の要件 .....	108
FDMEE の移行の前提条件 .....	108
FDMEE のアーティファクト・リスト .....	109
アーティファクト・リストについて .....	109
アプリケーション・データ・アーティファクト .....	109
グローバル設定アーティファクト .....	111
FDMEE の移行に関する考慮事項 .....	112
FDMEE アプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係 .....	112
移行におけるエクスポートとインポートのオプション .....	112
サンプルの移行定義ファイル .....	113
ライフサイクル管理のログ・ファイル .....	113
<b>付録 F. Financial Close Management とライフサイクル管理</b> .....	115
Financial Close Management アーティファクト .....	115
Financial Close Management 役割の要件 .....	116
Financial Close Management 移行の前提条件 .....	116
Financial Close Management のアーティファクト・リスト .....	117
アーティファクト・リストについて .....	117
Close Manager アーティファクト .....	118
Account Reconciliation Manager アーティファクト .....	119
Financial Close Management 移行の考慮事項 .....	122
Financial Close Management アプリケーションの移行と製品間アーティファクト の依存関係 .....	122
移行におけるエクスポートとインポートのオプション .....	122
移行のエクスポート・オプション .....	122
移行のインポート・オプション .....	122
サンプルの移行定義ファイル .....	123
ライフサイクル管理のログ・ファイル .....	124
<b>付録 G. Financial Management とライフサイクル管理</b> .....	125
Financial Management アーティファクトについて .....	125
Financial Management の役割の要件 .....	126
Financial Management 移行の前提条件 .....	126
Financial Management クラシック・アプリケーションの移行 .....	126
Financial Management Performance Management Architect のアプリケーション の移行 .....	127
Financial Management のアーティファクト・リスト .....	127
アーティファクト・リストについて .....	128

アプリケーションのベース・レベル・データ・アーティファクト	128
構成アーティファクト	128
ドキュメント・アーティファクト	129
次元アーティファクト	129
フォーム・アーティファクト	130
内部取引アーティファクト	131
仕訳アーティファクト	131
メンバー・リストのアーティファクト	132
フェーズ送信アーティファクト	132
ルールのアーティファクト	132
セキュリティのアーティファクト	132
Financial Management の移行に関する考慮事項	133
Financial Management アプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係	133
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	133
移行のエクスポート・オプション	133
移行のインポート・オプション	133
サンプルの移行定義ファイル	134
ライフサイクル管理のログ・ファイル	135
<b>付録 H. Performance Management Architect とライフサイクル管理</b>	<b>137</b>
Performance Management Architect のアーティファクトについて	137
Performance Management Architect の役割の要件	137
Performance Management Architect の移行の前提条件	138
Performance Management Architect のアーティファクト・リスト	138
アーティファクト・リストについて	138
アプリケーション・メタデータのアーティファクト	139
共有ライブラリ次元のアーティファクト	141
次元アクセスのアーティファクト	141
データ同期のアーティファクト	142
Performance Management Architect の移行に関する考慮事項	142
Performance Management Architect アプリケーションの移行および製品間のアーティファクトの依存関係	143
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	143
移行のエクスポート・オプション	143
移行のインポート・オプション	144
サンプルの移行定義ファイル	144
ライフサイクル管理のログ・ファイル	145



<b>付録 I. Performance Scorecard とライフサイクル管理</b> .....	147
Performance Scorecard のアーティファクトについて .....	147
Performance Scorecard の役割の要件 .....	147
Performance Scorecard の移行の前提条件 .....	148
Performance Scorecard のアーティファクト・リスト .....	148
アーティファクト・リストについて .....	148
管理オプションのアーティファクト .....	149
オブジェクトのアーティファクト .....	149
Performance Scorecard アプリケーションの移行と製品間のアーティファクトの 依存関係 .....	149
移行におけるエクスポートとインポートのオプション .....	150
移行のエクスポート・オプション .....	150
移行のインポート・オプション .....	150
サンプルの移行定義ファイル .....	150
ライフサイクル管理のログ・ファイル .....	151
<b>付録 J. Planning とライフサイクル管理</b> .....	153
Planning アーティファクトについて .....	153
Planning の役割の要件 .....	153
Planning の移行の前提条件 .....	154
Planning のアーティファクト・リスト .....	155
アーティファクト・リストについて .....	155
構成アーティファクト .....	156
Essbase データ・アーティファクト .....	157
グローバル・アーティファクト .....	157
プラン・タイプのアーティファクト .....	160
リレーショナル・データのアーティファクト .....	161
セキュリティのアーティファクト .....	162
Planning の移行に関する考慮事項 .....	162
Planning アプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係 .....	163
移行におけるエクスポートとインポートのオプション .....	163
サンプルの移行定義ファイル .....	164
ライフサイクル管理のログ・ファイル .....	165
<b>付録 K. Profitability and Cost Management とライフサイクル管理</b> .....	167
Profitability and Cost Management アーティファクトについて .....	167
Profitability and Cost Management の役割の要件 .....	169
Profitability and Cost Management の移行の要件 .....	169
Profitability and Cost Management のアーティファクト・リスト .....	170
アーティファクト・リストについて .....	170

標準 Profitability and Cost Management モデル・アーティファクト	171
詳細 Profitability and Cost Management モデル・アーティファクト	172
Profitability and Cost Management の移行と製品間アーティファクトの依存関係	174
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	175
移行のエクスポート・オプション	175
移行のインポート・オプション	175
サンプルの移行定義ファイル	175
ライフサイクル管理のログ・ファイル	176
<b>付録 L. Reporting and Analysis とライフサイクル管理</b>	<b>177</b>
Reporting and Analysis のアーティファクトについて	177
Reporting and Analysis の役割の要件	177
Reporting and Analysis の移行の前提条件	178
宛先アプリケーションにおける Production Reporting ジョブ・サービス・プロパティの構成	178
宛先アプリケーションでの Interactive Reporting データ・アクセス・サービスのデータ・ソースの作成	179
Reporting and Analysis のアーティファクト・リスト	179
アーティファクト・リストについて	180
物理リソースのアーティファクト	180
セキュリティのアーティファクト	180
スケジュール・オブジェクトのアーティファクト	181
製品プリファレンスのアーティファクト	181
リポジトリ・オブジェクトのアーティファクト	182
管理オプションのアーティファクト	185
ファイル・システム上での個別の Reporting and Analysis アーティファクトの編集	186
Reporting and Analysis のアーティファクト・タイプ	187
Reporting and Analysis の移行に関する考慮事項	189
Reporting and Analysis アプリケーションの移行および製品間のアーティファクトの依存関係	189
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	190
移行のエクスポート・オプション	190
移行のインポート・オプション	190
サンプルの移行定義ファイル	190
ライフサイクル管理のログ・ファイル	191
<b>付録 M. Shared Services とライフサイクル管理</b>	<b>193</b>
Shared Services のアーティファクトについて	193
Shared Services の役割の要件	194

Shared Services の移行の前提条件 .....	194
Shared Services のアーティファクト・リスト .....	195
アーティファクト・リストについて .....	195
ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)のアーティファクト .....	195
タスクフローのアーティファクト .....	196
Shared Services アプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係 .....	196
Shared Services ネイティブ・ディレクトリの移行オプション .....	197
ネイティブ・ディレクトリの移行インポート・オプション .....	197
ネイティブ・ディレクトリの CSV ファイル .....	197
Shared Services タスク・フロー移行のエクスポート・オプションとインポート・オプション .....	203
サンプルの移行定義ファイル .....	204
ライフサイクル管理のログ・ファイル .....	205
<b>用語集</b> .....	<b>207</b>
<b>索引</b> .....	<b>211</b>



---

# ドキュメントのアクセシビリティについて

---

Oracle のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc> を参照してください。

## Access to Oracle Support

Oracle サポート・サービスでは、My Oracle Support を通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> か、聴覚に障害のあるお客様は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。



# 1

## ライフサイクル管理について

### この章の内容

ライフサイクル管理と移行.....	15
ライフサイクル管理の機能.....	15
ライフサイクル管理のコンポーネント.....	16
ライフサイクル管理をサポートする EPM System 製品とコンポーネント .....	17

**注：** この章では、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理製品の概要を示します。ライフサイクル管理の使用を始める前に、[19 ページの「ライフサイクル管理の要件」](#)を必ず確認してください。

## ライフサイクル管理と移行

ライフサイクル管理では、製品環境およびオペレーティング・システム間で、Oracle Enterprise Performance Management System 製品のアプリケーション、リポジトリまたは個別のアーティファクトを移行するための一貫性のある方法を提供します。

アーティファクトは、個別のアプリケーションまたはリポジトリ・アイテム(スクリプト、Web フォーム、データ・フォーム、ルール・ファイル、ドキュメント、財務レポートなど)です。アプリケーションおよびリポジトリのアーティファクトは、製品ごとのカテゴリ別に整理されます。

ライフサイクル管理のインターフェースは、Oracle Hyperion Shared Services Console と統合されています。

通常、Shared Services Console のライフサイクル管理のインターフェースは、ライフサイクル管理をサポートしているすべての EPM System 製品と一貫しています。ただし、EPM System 製品では、ライフサイクル管理のインターフェースに、様々なアーティファクト・リストとエクスポートおよびインポート・オプションが表示されます。製品別のアーティファクト・リストとエクスポートおよびインポートのオプションについては、このガイドの巻末付録を参照してください。

## ライフサイクル管理の機能

ライフサイクル管理では次の機能が提供されます:

- アプリケーションおよびディレクトリの表示

- アーティファクトの検索
- ファイル・システムからファイル・システムへの移行
- 選択済アーティファクトの表示
- 移行の監査
- 移行のステータスの表示
- ファイル・システム上でアーティファクトを個別にインポートまたはエクスポートすることによる迅速な変更
- ライフサイクル管理のファイル・システム・フォルダのダウンロードおよびアップロード
- 完全なアプリケーション・スイートの移行

関連するすべてのアーティファクトを一度に選択して移行することで、Oracle Hyperion Financial Close Management または Oracle Hyperion Planning の完全なスイートを移行できます。

- 複数のアプリケーションの移行

Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理では、複数のクラシック Oracle Essbase、Planning または Oracle Hyperion Financial Management アプリケーションを、1つの移行定義を使用して移行できます。

## ライフサイクル管理のコンポーネント

ライフサイクル管理は次のコンポーネントで構成されています:

- **LCM 管理者の役割** - ライフサイクル管理タスクを実行する Oracle Hyperion Shared Services のユーザー役割です。LCM 管理者は、ライフサイクル管理を使用して Foundation アプリケーション・グループ内の Shared Services のアーティファクトを表示したり、製品環境およびオペレーティング・システム内のアプリケーション、リポジトリまたは個別のアーティファクトを移行したりできます。この役割をプロビジョニングされたユーザーは、アーティファクトを同じ Shared Services インスタンスで登録されている EPM System 製品に展開しロードできます。

**注：** EPM System 製品の中には、ライフサイクル管理タスクを実行するのに、LCM 管理者の役割の他に追加の製品の役割をプロビジョニングされたライフサイクル管理ユーザーを必要とするものがあります。追加の役割については、このガイドの巻末付録を参照してください。

- **LCM デザイナーの役割** - ライフサイクル管理タスクを実行する Shared Services のユーザー役割です。LCM デザイナーの役割をプロビジョニングされたユーザーは、移行の定義やエクスポート操作の実行が可能ですが、インポート操作は実行できません。
- **移行定義ファイル** - 移行に関するすべての情報(ソース、宛先、移行するアーティファクト)が含まれています。移行するアーティファクトは、移行定義で定義されている必要があります。このガイドの巻末付録に掲載されているサンプル・ファイルを使用して移行定義を最初から作成するか、Oracle Hyperion



Shared Services Console のファイル・システム・フォルダにある XML ファイルを移行定義ファイルとして使用することができます。ファイル・システム・フォルダの XML ファイルは、アーティファクトのエクスポート時に作成されます。移行定義ファイルは、ライフサイクル管理ユーティリティで移行を実行する場合に使用できます。

- **Shared Services Console** - ユーザーがプロビジョニングやライフサイクル管理などの管理タスクを実行できるようにする Shared Services のユーザー・インタフェースです。
- **移行オプション** - 移行中に使用する移行エクスポートおよびインポート・オプションを入力する Shared Services Console の機能の一部です。
- **ライフサイクル管理ユーティリティ** - アーティファクトをソースから宛先に移行する代替手段を提供するコマンドライン・ユーティリティ。ライフサイクル管理ユーティリティは、Windows タスク スケジューラや Oracle Enterprise Manager などのサードパーティのスケジューリング・サービスで使用できます。
- **移行プロパティ・ファイル** - 移行に関するグローバル・パラメータ;たとえば、ファイル・システムやログ・ファイルの場所、バッチ処理による移行のサイズのグループ化、概算レポートの使用の可否などです。
- **移行ステータス・レポート** - ユーザー情報、ソースおよび宛先情報、「処理中」移行の進捗インディケータ、移行日付、時間、継続時間、および移行ステータス(処理中、完了、または失敗)を提供します。移行の詳細は、「失敗」のステータスが示される移行に対して提供されます。
- **ライフサイクル管理のログ・ファイル** - ライフサイクル管理による移行におけるすべてのアクティビティを取得します。

## ライフサイクル管理をサポートする EPM System 製品とコンポーネント

次の EPM System 製品がライフサイクル管理をサポートしています:

- Shared Services
- Oracle Hyperion Calculation Manager
- Oracle Essbase
- Oracle Essbase Studio
- Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Enterprise Edition
- Financial Close Management
- Financial Management
- Oracle Hyperion EPM Architect
- Oracle Hyperion Performance Scorecard
- Oracle Hyperion Planning
- Oracle Hyperion Profitability and Cost Management

- Oracle Hyperion Reporting and Analysis (Oracle Hyperion Financial Reporting、Oracle Hyperion Interactive Reporting、Oracle Hyperion SQR Production Reporting、Oracle Hyperion Web Analysis)
- 配置メタデータ

**表 1** EPM System の製品コード

製品コード	製品名
HUB	Shared Services
HREG	Oracle Hyperion Shared Services レジストリ
CALC	Calculation Manager
ESBAPP	Essbase
BPM	Essbase Studio
AIF	Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Enterprise Edition
FCC	Financial Close Management
HFM	Financial Management
BPMA	Performance Management Architect
HPS	Performance Scorecard
HP	Planning
HPM	Profitability and Cost Management
HAVA	Reporting and Analysis (Financial Reporting、Interactive Reporting、Production Reporting、Web Analysis)

このガイドの巻末付録には、製品ごとの情報が記載されています。

# 2

## ライフサイクル管理の開始

### この章の内容

ライフサイクル管理の要件.....	19
ライフサイクル管理のインストール.....	21
Shared Services 高可用性用のライフサイクル管理の構成.....	22
ライフサイクル管理のクイック・スタート.....	22
バックアップおよびリカバリ.....	24
セキュリティ.....	24

## ライフサイクル管理の要件

### サブトピック

- 使用の前提条件
- ソースと宛先に関する考慮事項
- ファイル・システムの考慮事項
- アプリケーションおよびアプリケーション・グループ
- ライフサイクル管理での移行時の EPM System 環境の可用性
- その他の重要事項

### 使用の前提条件

- Oracle Hyperion Shared Services と Oracle Enterprise Performance Management System をインストールして構成し、これらが実行されていることを確認します。Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに LCM 管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。
- 必要に応じて他の製品固有の役割を割り当てます。このガイドの終わりにある付録を参照してください。

### ソースと宛先に関する考慮事項

- ソースと宛先の環境で、同じユーザー・ディレクトリを使用する必要があります。

- ライフサイクル管理のエクスポートおよびインポートの操作中は、製品サービスが稼働している必要があります。

## ファイル・システムの考慮事項

- ファイル・システムから、およびファイル・システムに移行する場合、ファイル・システムは Shared Services Console またはネットワーク上のライフサイクル管理ユーティリティからアクセスできる必要があります。
- ファイル・システム移行のデフォルトの宛先は、Shared Services Java Web アプリケーション・サーバー・コンピュータ上にあります。この領域が Shared Services コンピュータ上に割り当てられていることを確認してください。

Shared Services コンピュータのデフォルトのファイル・システムの宛先は、MIDDLEWARE\_HOME/user\_projects/epmsystem1/import\_export です。ファイル・システムの場合は移行プロパティに定義されています。これは共有ディスクを使用するようにカスタマイズすることもできます。60 ページの「[移行プロパティの編集](#)」を参照してください。

## アプリケーションおよびアプリケーション・グループ

- インポート中のアプリケーションがターゲット環境にない場合、ライフサイクル管理によってアプリケーション・シェルが作成されます。
- 移行を実行するには、アプリケーションがアプリケーション・グループに割り当てられているか、デフォルト・アプリケーション・グループに属している必要があります。同じ名前の2つのアプリケーションが存在する場合は、デフォルト・アプリケーション・グループに属するアプリケーションを移行できません。

**注：** 名前が同じアプリケーションを複数保持できるのは、デフォルト・アプリケーション・グループのみです。ただし、別のアプリケーション・グループに割り当てられないかぎり、アーティファクトの移行は行われません。

- インポート中のアプリケーションがターゲット環境に存在しないアプリケーション・グループに属している場合、ライフサイクル管理にそのアプリケーション・グループが作成されます。

## ライフサイクル管理での移行時の EPM System 環境の可用性

ライフサイクル管理でのアーティファクトの増分移行操作は、次の場合以外、アプリケーションの通常使用時に行うことができます：

- ある環境から別の環境へのアプリケーションまたはリポジトリの完全移行の場合、システムをメンテナンス期間とすることをお勧めします。

- Financial Management で次元メタデータ・アーティファクトがインポートされる場合、アプリケーションの現在のユーザー・セッションが無効化され、ユーザーはアプリケーションを再度開く必要があります。
- Performance Scorecard へのインポート時、既存のユーザー・セッションは無効化されます。このため、Performance Scorecard の場合、ライフサイクル管理操作をメンテナンス期間に行うことをお勧めします。

**注：** EPMA、Planning、Oracle Hyperion Calculation Manager、Essbase、Financial Reporting、Interactive Reporting には制限がありません。Production Reporting および Web Analysis には制限がありません。

## その他の重要事項

- ライフサイクル管理をバックアップとリカバリの唯一の方法にしないでください。24 ページの「バックアップおよびリカバリ」を参照してください。
- 配置メタデータのアーティファクトには、配置の物理サーバー名と構成情報が含まれます。この情報は、ある環境から別の環境(たとえば、Dev から Test)に移行しないでください。このデータを移行すると、宛先環境の構成情報が破損し、システムが使用できなくなります。付録 A 「配置メタデータとライフサイクル管理」を参照してください。
- ライフサイクル管理での移行は、Windows の予約名(CON、PRN、AUX、NUL など)と同じ名前前のアーティファクトおよびフォルダで失敗します。(予約名の詳細なリストは、オペレーティング・システムのベンダーのサイトを参照してください。)
- Reporting and Analysis の移行を行う場合、ターゲット・マシンで Production Reporting と Interactive Reporting のクライアント/データ・ソースを手動で再作成する必要があります。178 ページの「宛先アプリケーションにおける Production Reporting ジョブ・サービス・プロパティの構成」および179 ページの「宛先アプリケーションでの Interactive Reporting データ・アクセス・サービスのデータ・ソースの作成」を参照してください。

## ライフサイクル管理のインストール

ライフサイクル管理は Shared Services と一緒にインストールされます。Shared Services のインストールとアプリケーション・サーバーへの配置については、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。

ライフサイクル管理のコンポーネントは、EPM\_ORACLE\_HOME/common/utilities/LCM/11.1.2.0 にインストールされます。

# Shared Services 高可用性用のライフサイクル管理の構成

Shared Services を高可用性用に構成し、Windows サービスとして起動する場合、ライフサイクル管理に対して構成手順を実行する必要があります。このシナリオには、移行時に共有ディスクを使用してアーティファクトを格納することも含まれます。共有ディスクの場所を Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System コンフィグレータの「LCM共有ディスクの場所」フィールドに入力します。

EPM System コンフィグレータの「LCM共有ディスクの場所」フィールドの詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』の Foundation 固有の構成タスクに関する項を参照してください。高可用性の構成の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System 高可用性および障害リカバリ・ガイド』の Shared Services 高可用性用のライフサイクル管理の構成に関する項を参照してください。

## ライフサイクル管理のクイック・スタート

ライフサイクル管理の移行は、この高度なプロセスに従います。各部分のプロセスの説明は、次の表で説明されているガイドまたは項で説明されています。

**注意** ライフサイクル管理のインポートを実行する前に、宛先環境をバックアップしておくことをお勧めします。ライフサイクル管理を使用したエクスポートおよびインポートでは、元に戻せません。

表 2 ライフサイクル管理のプロセス

タスク	追加情報
1.Shared Services および EPM System 製品をインストールして構成します。	Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide
2.LCM 管理者の役割をライフサイクル管理のユーザーに割り当てます。 注：ほとんどの製品では、ライフサイクル管理タスクを実行するための追加の役割をユーザーにプロビジョニングする必要があります。追加の役割については、このガイドの巻末付録を参照してください。	『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』
3.移行のインポートおよびエクスポートのオプションを定義します。	Shared Services Console の場合は、 <a href="#">第 6 章「ライフサイクル管理および Shared Services Console での作業」</a> を参照してください。 ライフサイクル管理ユーティリティの場合は、 <a href="#">第 7 章「ライフサイクル管理ユーティリティの使用法」</a> を参照してください。

タスク	追加情報
<p><b>4.Shared Services Console</b> またはライフサイクル管理ユーティリティで、<b>ファイル・システムにアーティファクトをエクスポートします。</b></p> <p><b>クラシック・アプリケーションの場合:</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 必要に応じて、Shared Services のアーティファクトをすべて選択します。</li> <li>2. 必要に応じて、製品固有のアーティファクトをすべて選択します。 関連するすべてのアーティファクトを選択することもできます。たとえば、Calculation Manager のルール、Oracle Hyperion Financial Reporting のレポート、Essbase のグローバル代替変数などです。</li> <li>3. 選択したアーティファクトを単一のファイル・システム・フォルダにエクスポートします。</li> </ol> <p><b>EPMA アプリケーションの場合:</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 必要に応じて、Shared Services のアーティファクトをすべて選択します。</li> <li>2. 必要に応じて、EPMA のアーティファクトをすべて選択します。</li> <li>3. 選択した Shared Services および EPMA のアーティファクトを単一のファイル・システム・フォルダにエクスポートします。</li> <li>4. 必要に応じて、製品固有のアーティファクトをすべて選択します。 関連するすべてのアーティファクトを選択することもできます; Calculation Manager のルール、Financial Reporting のレポート、Essbase のグローバル代替変数などがあります。</li> <li>5. 選択した製品固有のアーティファクトを2番目のファイル・システム・フォルダにエクスポートします。</li> </ol>	<p>44 ページの「<a href="#">ファイル・システムへのエクスポート</a>」を参照してください。</p>
<p><b>5.製品固有の移行の前提条件を実行します。</b></p>	<p>このガイドの巻末にある付録の各製品の「<a href="#">移行の前提条件</a>」を参照してください。</p>
<p><b>6.宛先環境をバックアップします。</b></p>	<p>Oracle Enterprise Performance Management System Backup and Recovery Guide</p>
<p><b>7.Shared Services Console</b> またはライフサイクル管理ユーティリティで、<b>ファイル・システムからアーティファクトをインポートします。</b></p> <p><b>クラシック・アプリケーションの場合:</b></p> <p>エクスポートされたファイル・システム・フォルダを右クリックして、「インポート」を選択します。</p> <p><b>EPMA アプリケーションの場合:</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. EPMA アプリケーションのアーティファクトが含まれるファイル・システム・フォルダを右クリックして、「インポート」を選択します。</li> <li>2. EPMA アプリケーション・ライブラリから EPMA アプリケーションを手動で配置します。</li> <li>3. 製品固有のアーティファクトが含まれるファイル・システム・フォルダを右クリックして、「インポート」を選択します。</li> </ol>	<p>46 ページの「<a href="#">ファイル・システムからのインポート</a>」を参照してください。</p>
<p><b>8.移行ステータス・レポートを表示して、すべて正常に移行されたことを確認します。</b></p>	<p>63 ページの「<a href="#">移行ステータスの表示</a>」</p>

# バックアップおよびリカバリ

ライフサイクル管理は、サーバーおよびコンテンツの物理的バックアップへのニーズを満たすものではありません。ライフサイクル管理はほとんどのアプリケーション・アーティファクトをエクスポートできるため、アプリケーション・コンテンツのアーカイブに適しています。次のような場合にライフサイクル管理を使用できます:

- ビジネス・ユーザーがアプリケーション・コンテンツを編集する際の、アーティファクトの一時バックアップの作成。たとえば、Essbase または Planning の次元に対して変更を行う場合、何か問題が発生したらその変更を元に戻せるようにするため、編集を行う前にこの次元のライフサイクル管理によるエクスポートを実行できます。このエクスポートされた次元は一時バックアップとして機能します。この後で製品の次元を編集できます。
- インポートを実行する前のアーティファクトのアーカイブ。テスト・システムから本番システムにコンテンツを移行する場合、本番アーティファクトをエクスポートして任意のバージョン・コントロール・システムにチェックインすることで、本番アーティファクトをアーカイブする場合があります。

**注:** ライフサイクル管理は、論理的なバックアップとリカバリのソリューションとしてのみ使用できます。データのバックアップとリカバリのソリューションとしては推奨されません。多くの製品では、独自のバックアップとリカバリのソリューションが提供されています。これらのソリューションについては、Oracle Enterprise Performance Management System Backup and Recovery Guide に記載されています。

## セキュリティ

ライフサイクル管理を使用するには、プロビジョニングを介して、ユーザーおよびグループに対し、セキュリティを設定する必要があります。ライフサイクル管理を実行するユーザーには LCM 管理者の役割を割り当てる必要があります。LCM 管理者は Shared Services に登録されたすべてのアプリケーションに対し、移行を実行できます。つまり LCM 管理者は同じ Shared Services インスタンスを使用して、すべてのアプリケーションを抽出およびロードできます。

**注:** 配置メタデータ、Essbase、Essbase Studio、Reporting and Analysis、Financial Management、Planning、Performance Scorecard および Profitability and Cost Management では、ライフサイクル管理ユーザーがライフサイクル管理タスクを実行するためには(LCM 管理者役割に加え)追加の製品の役割をプロビジョニングする必要があります。追加の役割については、このガイドの巻末付録を参照してください。

LCM 管理者役割の割当てについては、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。



# 3

## ライフサイクル管理の用途

### この章の内容

Shared Services の用途.....	25
アーティファクト移行の用途 .....	29
バージョン・コントロール・システムにおけるライフサイクル管理の使用 .....	30
ライフサイクル管理と既存のワークフロー・システムとの統合 .....	31

## Shared Services の用途

### サブトピック

- ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行と一括のセキュリティ更新
- タスクフローの移行
- Shared Services レジストリ・データの編集
- 特定の EPM System アプリケーションのプロビジョニング・アーティファクトの移行
- LCM デザイナーの役割での移行

## ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行 と一括のセキュリティ更新

ライフサイクル管理ではネイティブ・ディレクトリ・アーティファクト(割り当てられた役割、委任リスト、グループ、役割およびユーザー)が、あるシステムから別のシステムに移行されます。ライフサイクル管理によって、移行対象のネイティブ・ディレクトリ・アーティファクトを定義できます。さらに、ライフサイクル管理では、ある環境内でセキュリティの更新を一括で実行できます。たとえば、あるユーザーまたはユーザー群に対するセキュリティ割当てをすべて変更できます。

56 ページの「ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行」を参照してください。

## タスクフローの移行

ライフサイクル管理を使用すると、次の EPM System 製品に対する Shared Services タスクフロー・アーティファクトを移行できます:

- Financial Management

- Performance Management Architect
- Profitability and Cost Management

タスク・フローのアーティファクトを使用して、任意の環境から別の環境へタスク・フローの定義を移行したり、ファイル・システムでタスク・フローを編集したりできます。詳細は、[付録 M 「Shared Services とライフサイクル管理」](#)を参照してください。

## Shared Services レジストリ・データの編集

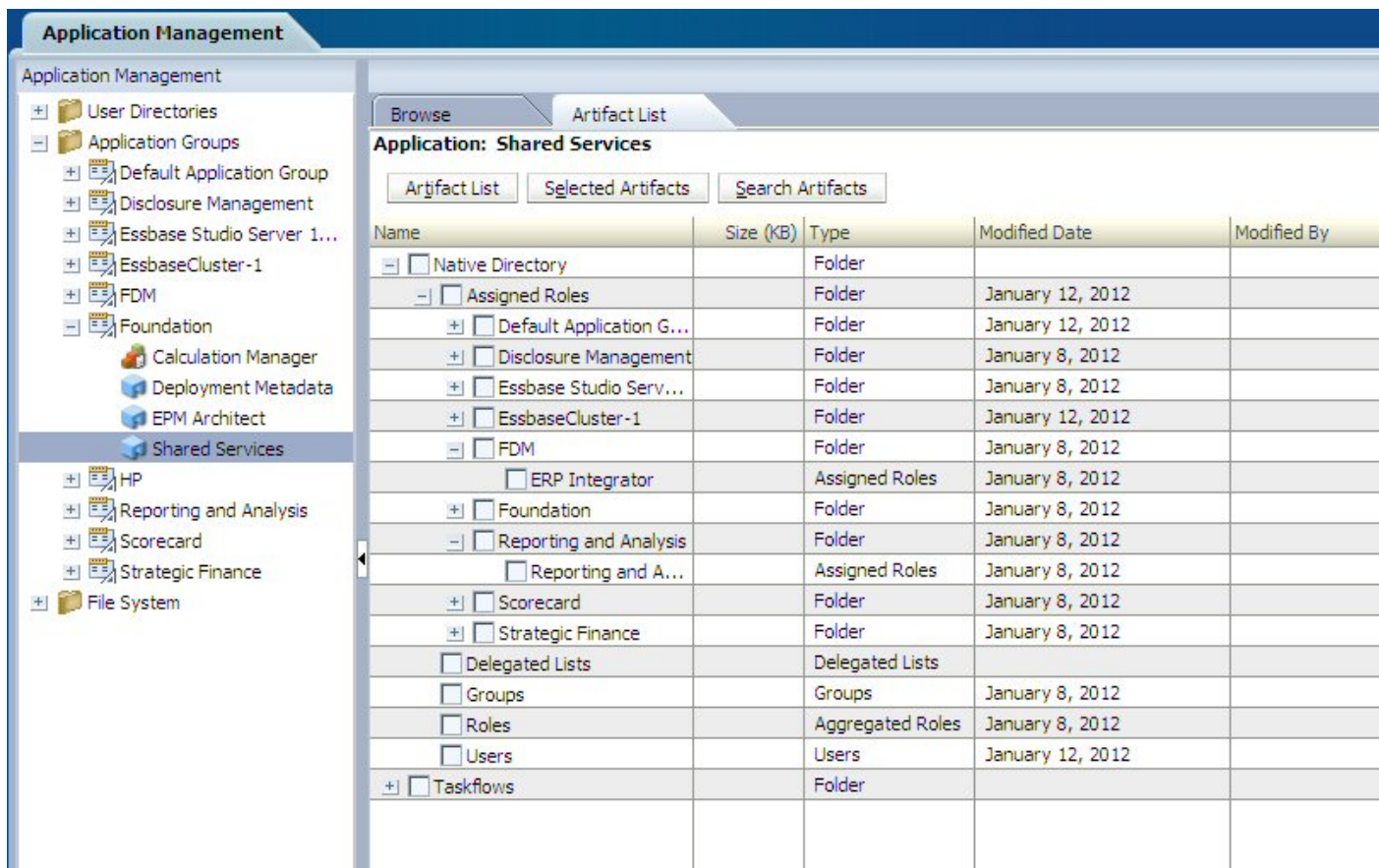
ライフサイクル管理を使用すると、Oracle Hyperion Shared Services レジストリ・データを編集して、Secure Socket Layer(SSL)接続の有効/無効を切り替えたり、その他の構成変更を手動で実行することができます。[58 ページの「Shared Services レジストリ・データの編集」](#)を参照してください。

## 特定の EPM System アプリケーションのプロビジョニング・アーティファクトの移行

ライフサイクル管理では、すべてのアプリケーションのプロビジョニングを移行しなくても、ある特定のアプリケーションのプロビジョニング・アーティファクトを移行できます。プロビジョニング・アーティファクトは、Shared Services Console のネイティブ・ディレクトリ(割り当てられた役割)のノードの下に表示されます。

次の図は、Shared Services Console 内のプロビジョニング・アーティファクトの場所を示しています。

図 1 Shared Services Console のプロビジョニング・アーティファクト



手順の詳細は、56 ページの「ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行」を参照してください。

## LCM デザイナーの役割での移行

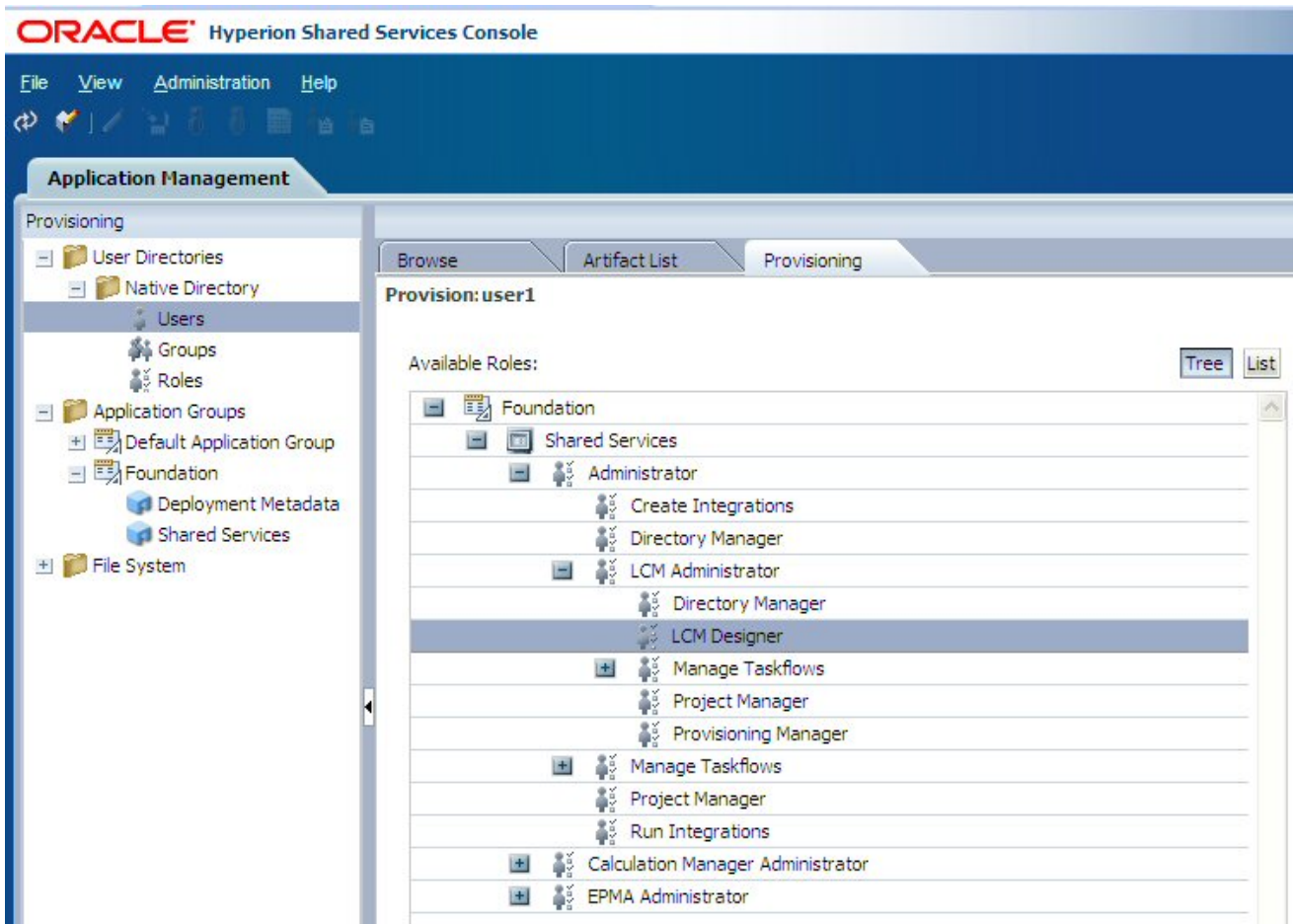
ライフサイクル管理でのインポート操作は、ターゲット環境の分析を必要とし、通常は管理者によって実行されます。ただし、アプリケーションのビジネス・ユーザーはシステムにおける変更を認識するため、通常、移行するコンテンツはアプリケーションのビジネス・ユーザーによって定義されます。LCM デザイナーの役割では、ユーザーは移行を定義し、エクスポート操作を実行できますが、インポート操作の実行は制限されます。

たとえば、次のシナリオを考えてください:

支出予算の管理を担当するプランニング管理者は、テスト環境の支出勘定科目に関連するデータ・フォームを変更します。プランニング管理者に LCM デザイナーの役割を割り当てると、管理者はデータ・フォームを本番環境に移動する移行を定義できます。管理者は、アーティファクトがエクスポートされたことを IT マネージャに通知します。IT マネージャは、エクスポートされたフォルダを本番環境にコピーし、インポート操作を実行します。(エクスポートされたフォルダには、Import.xml ファイルでのインポート実行の定義が含まれています。)

LCM デザイナーの役割は、Shared Services Console で割り当てます。(ユーザー役割とセキュリティのガイドの EPM System の役割に関する項を参照。)

図 2 Shared Services Console の LCM デザイナーの役割



ユーザーに LCM デザイナーの役割が割り当てられると、Shared Services Console は次のように変更されます:

- 「管理」メニューの「移行ステータス・レポートの削除」オプションが無効になります。
- 編集後に、単一のアーティファクトをインポートする機能が無効になります。
- ファイル・システム・フォルダを右クリックした場合に表示されるインポート・オプションが無効になります。
- Shared Services Console の下部にある「インポート」ボタンが無効になります。

# アーティファクト移行の用途

## サブトピック

- 製品間でアーティファクトの依存関係があるアプリケーションの移行
- 編集目的でのアーティファクトのエクスポートとインポート
- アーティファクトの単独編集

## 製品間でアーティファクトの依存関係があるアプリケーションの移行

移行を確実にを行うため、ライフサイクル管理ではアーティファクトのインポート時に特定の指示が遂行されますが、これは製品レベルのみに適用されます。ライフサイクル管理では、(アーティファクト・レベルの)複数の製品に対しては、アーティファクトのインポートが自動的に指示されません。たとえば、Financial Management アプリケーションは、Performance Management Architect の次元およびビジネス・ルール、Shared Services のユーザー・プロビジョニング、Financial Reporting のレポートなどで構成される場合があります。

ライフサイクル管理を使用して複数の製品からアーティファクトを移行する場合は、製品アーティファクトをインポートする前に、製品間に依存するアーティファクトが宛先に存在することを確認する必要があります。これは、ライフサイクル管理の移行を初めて実行する場合に、特に重要です。

次のドキュメントには、ライフサイクル管理の移行を初めて実行する場合の手順が示されています。

- Oracle Enterprise Performance Management System Migrating Oracle Hyperion Planning Applications
- Oracle Enterprise Performance Management System の Oracle Hyperion Performance Management Architect アプリケーションの移行

[http://docs.oracle.com/cd/E17236\\_01/nav/portal\\_2.htm](http://docs.oracle.com/cd/E17236_01/nav/portal_2.htm) のドキュメント・ライブラリを参照してください。

## 編集目的でのアーティファクトのエクスポートとインポート

ライフサイクル管理を使用すると、アーティファクトをファイル・システムにエクスポートし、これを編集した後でインポートできます。詳細な手順は、52 ページの「編集する個々のアーティファクトのエクスポートとインポート」を参照してください。

## アーティファクトの単独編集

Shared Services Console を使用して、個々のアーティファクトをファイル・システムにエクスポートして編集し、編集後に移行定義ファイルを必要とせずにインポー

トできます。詳細な手順は、52 ページの「編集する個々のアーティファクトの  
エクスポートとインポート」を参照してください。

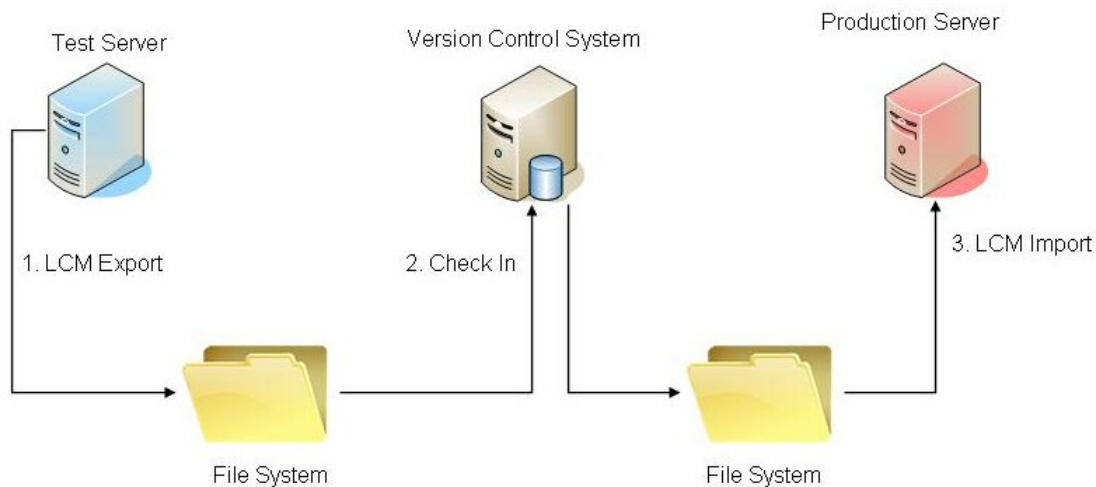
**注：** アーティファクトにはファイル・システムで編集できないものもあります。  
53 ページの「個々のアーティファクトの編集」を参照してください。

アーティファクトは、エクスポート元と同一のアプリケーションにインポートする  
必要があります。

## バージョン・コントロール・システムにおける ライフサイクル管理の使用

ライフサイクル管理では、Oracle(R) Universal Content Management などの既存のド  
キュメントまたはソース・コードのコントロール・システムを使用して、EPM  
System のアーティファクトをバージョン管理できます。最も効果的なアプローチ  
は、アーティファクトをファイル・システムにエクスポートしてから、それを本  
番サーバーにインポートする前にバージョン・コントロール・システムにインポ  
ートすることです。

図 3 ライフサイクル管理を使用したバージョン管理



このアプローチは、使用されている本番コントロール・ツールに応じていくつか  
の方法で自動化できます。たとえば、エクスポートされたアーティファクトを最  
初にバージョン・コントロール・システムにインポートしてから、本番システム  
にインポートするスクリプトを記述することで、自動化を実現できます。この変  
更をプロセスに組み込むことで、本番システムのアーティファクトが、該当する  
日付メタデータを備えて常に企業のバージョン・コントロール・システムに存在  
するようになります。したがって顧客は、「先週は正常に動作していたシステム  
が、現在は動作していない場合、アーティファクトに対するどの変更が先週、本  
番システムに移行されたのでしょうか」などの質問に回答できます。バージョン・  
コントロール・システムが比較機能をサポートしている場合は、テキストベース

または XML ベースで EPM System アーティファクトに対する差異を提供できません。

ファイル・システムへの移行やファイル・システムからの移行の詳細は、[43 ページの「アーティファクトの移行」](#)を参照してください。

## ライフサイクル管理と既存のワークフロー・システムとの統合

Java API または コマンドライン・ユーティリティを使用すると、ライフサイクル管理を既存のワークフロー・システムに統合できます。移行のロジックは移行定義ファイルで取得されるため、コマンドライン・ユーティリティがほとんどのケースで効率的です。移行定義ファイル(XML ファイル)は、ライフサイクル管理機能を使用して Shared Services Console で作成するか、ワークフロー・システムによってプログラマ的に作成することができます。

Shared Services Console で作成された移行定義ファイルを使用する場合は、プログラム上で変更してユーザーのログイン情報を追加する必要があります。このログイン情報は、XML ファイルへの挿入時はプレーン・テキストの状態ですが、最初に移行が実行される際は自動的に暗号化されます。移行定義ファイルを一度作成すると、コマンドライン・ユーティリティまたは Java API を使用して本番管理システムから起動できるようになります。





# 4

## Shared Services Console

### この章の内容

Shared Services Console の概要 .....	33
Shared Services Console の起動 .....	33
ライフサイクル管理および Shared Services Console の統合 .....	34

## Shared Services Console の概要

Shared Services Console は、ビュー・ペインとタスク・タブで構成されています。初めにログインすると、Shared Services Console にはビュー・ペインと「参照」タブが表示されます。

ビュー・ペインは、ユーザー・ディレクトリ、ユーザー、グループ、役割、アプリケーション・グループおよびアプリケーションなどのオブジェクトを選択できるナビゲーション・フレームです。通常は、ビュー・ペインで現在選択されている項目の詳細が「参照」タブに表示されます。その他のタスク・タブは、実行するタスクに応じて開きます。たとえば、「レポート」タブはレポートを生成するとき、「構成」タブはユーザー・ディレクトリを構成するときに開きます。

現在の構成に応じて、Shared Services Console のビュー・ペインには既存のオブジェクトが一覧表示されます。これらのオブジェクトを展開すると、詳細を表示できます。たとえば、「ユーザー・ディレクトリ」オブジェクトを展開すると、構成済のすべてのユーザー・ディレクトリが一覧表示されます。構成済のユーザー・ディレクトリでユーザーとグループを検索することもできます。

オブジェクトを右クリックすると表示されるショートカット・メニューは、ビュー・ペイン上のオブジェクトに関連付けられています。

ビュー・ペインのオブジェクトに関連付けられたショートカット・メニューは、オブジェクトに対する操作を実行する最も早い方法です。ショートカット・メニューのオプションは、選択した対象に従って動的に変更されます。ショートカット・メニューのコマンドは、メニュー・バーのメニューでも使用可能です。使用可能なメニュー・オプションを表すボタンがツールバーに表示されます。

## Shared Services Console の起動

Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace のメニュー・オプションを使用して、Shared Services Console にアクセスします。

**注：** Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace は、その他の EPM System 製品にアクセスできるポータルです。たとえば、Performance Management Architect、および Interactive Reporting や Web Analysis などの Reporting and Analysis コンポーネントにアクセスできます。現在の EPM Workspace ユーザーに割り当てられた Shared Services の役割によって、Shared Services Console でユーザーが使用できるリソースが決まります。

▶ Shared Services Console を起動するには、次の手順に従います:

**1 次に移動します:**

`http://Web_server_name:port_number/workspace`

URL の中で、`Web_server_name` は Oracle Hyperion Foundation Services が使用する Web サーバーが実行されているコンピュータの名前を示し、`port_number` は、Web サーバー・ポートを示します。たとえば、`https://myWebserver:19000/workspace` のようになります。

**注：** セキュアな環境の EPM Workspace にアクセスする場合、プロトコルとして `https` (`http` ではなく)を使用し、セキュアな Web サーバー・ポート番号を使用します。たとえば、`https://myWebserver:19043/workspace` のような URL を使用します。

**2 「アプリケーションの起動」をクリックします。**

ポップアップ・ブロックが原因で EPM Workspace が開かない場合があることに注意してください。

**3 ログオン・ウィンドウで、ユーザー名とパスワードを入力します。**

最初は、Shared Services Console へアクセスできる唯一のユーザーは、ユーザー名とパスワードが配置プロセス中に指定された EPM System 管理者です。

**4 「ログオン」をクリックします。**

**5 Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace から、「ナビゲート」、「管理」、「Shared Services Console」の順に選択します。**

## ライフサイクル管理および Shared Services Console の統合

ライフサイクル管理は Shared Services Console と統合され、アプリケーション・グループとアプリケーションの下にアーティファクトがリストされています。たとえば、Shared Services Console には Development というアプリケーション・グループが表示されます。Development アプリケーション・グループの下には、HFM Management Reporting アプリケーションが表示されます。HFM Management Reporting アプリケーションの下には、次元モデルまたは非次元モデルが表示されます(Accounts、Entities、Security、Member Lists など)。

# 5

## アプリケーションおよびアプリケーション・グループでの作業

### この章の内容

概要 .....	35
アプリケーション・グループの使用 .....	35
アプリケーションの管理 .....	38

### 概要

アプリケーション・グループおよびアプリケーションは、重要な EPM System の概念です。アプリケーションは、Shared Services に登録されている EPM System 製品の1つのインスタンスへの参照です。プロビジョニングおよびライフサイクル管理アクティビティは、アプリケーションに対して実行されます。通常、アプリケーションはアプリケーション・グループにグループ分けされます。

### アプリケーション・グループの使用

#### サブトピック

- [アプリケーション・グループの作成](#)
- [アプリケーション・グループ・プロパティの変更](#)
- [アプリケーション・グループの削除](#)

通常、アプリケーションは、EPM System によって、配置時に選択した既存のアプリケーション・グループか、デフォルト・アプリケーション・グループ内に置かれます。

アプリケーション・グループは EPM System アプリケーションのコンテナです。たとえば、アプリケーション・グループに、Planning アプリケーションと Oracle Hyperion Reporting and Analysis アプリケーションが含まれるとします。アプリケーションが属することのできるアプリケーション・グループの数は1つですが、アプリケーション・グループには複数のアプリケーションを含められます。

EPM System 製品では、アプリケーションは独自のアプリケーション・グループ内に置かれます。EPM System 製品によって独自のアプリケーション・グループが作成されない場合、アプリケーション・グループ(たとえば、デフォルト・アプリケーション・グループ)を選択し、アプリケーションを整理します。

Shared Services に登録されているが、アプリケーション・グループに追加されていないアプリケーションは、ビュー・ペインの「デフォルト・アプリケーション・

グループ」ノードの下に一覧表示されます。「デフォルト・アプリケーション・グループ」ノードに一覧表示されているアプリケーションの役割にユーザーおよびグループをプロビジョニングし、プロビジョニング情報を失うことなくアプリケーションをアプリケーション・グループに移動できます。必要に応じて、カスタムのアプリケーション・グループを作成できます。

**注：** アプリケーション・グループを作成および管理するには、Shared Services 管理者またはプロジェクト・マネージャである必要があります。Shared Services 管理者はすべての登録済アプリケーションを使用できます。プロジェクト・マネージャは自分がプロビジョニング・マネージャであるアプリケーションのみ使用できます。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

## アプリケーション・グループの作成

アプリケーション・グループの作成中、新規アプリケーション・グループにアプリケーションを割り当てることもできます。

▶ アプリケーション・グループを作成するには:

1 **Shared Services Console** を起動します。

33 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。

2 ビュー・ペインで、「アプリケーション・グループ」を右クリックし、「新規」を選択します。

「新規アプリケーション・グループ」画面が表示されます。

3 「名前」に一意のアプリケーション・グループ名を入力し、「説明」にはオプションの説明を入力します。

4 このアプリケーション・グループにアプリケーションを割り当てるには:

1. 「アプリケーション・グループのアプリケーションのリスト」から、割り当てるアプリケーションを含むアプリケーション・グループを選択します。

2. 「リストの更新」をクリックします。

「使用可能なアプリケーション」リストにアプリケーション・グループに割り当てることのできるアプリケーションが表示されます。

3. 「使用可能なアプリケーション」でアプリケーション・グループに割り当てるアプリケーションを選択し、「追加」をクリックします。

4. 割り当てられたアプリケーションを除去するには、「割り当てられたアプリケーション」から除去するアプリケーションを選択し「削除」をクリックします。現在のセッションで割り当てたアプリケーションをすべて除去するには、「リセット」をクリックします。

5 「終了」をクリックします。

6 「追加作成」をクリックし、別のアプリケーション・グループを作成するか、「OK」をクリックしてステータス画面を閉じます。

# アプリケーション・グループ・プロパティの変更

プロパティおよびアプリケーションの割当てなどアプリケーション・グループの設定はすべて変更できます。

**注：** また、別のアプリケーション・グループからアプリケーションを移動することで、アプリケーション・グループにアプリケーションを追加することもできます。38 ページの「[アプリケーションの移動](#)」を参照してください。

▶ アプリケーション・グループを変更するには:

1 **Shared Services Console** を起動します。

33 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。

2 ビュー・ペインで「アプリケーション・グループ」を選択します。

3 「参照」タブでアプリケーション・グループを右クリックし、「開く」を選択します。

4 必要に応じてアプリケーション・グループ・プロパティを変更します。

アプリケーションの割当てと除去の詳細は、36 ページの[手順 4](#)を参照してください。

5 「保存」をクリックします。

## アプリケーション・グループの削除

アプリケーション・グループを除去すると、アプリケーションとアプリケーション・グループとの関連付けが除去され、アプリケーションからプロビジョニング割当てが削除されて、アプリケーション・グループも削除されます。

▶ アプリケーション・グループを削除するには:

1 **Shared Services Console** を起動します。

33 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。

2 ビュー・ペインでアプリケーション・グループを右クリックし、「削除」を選択します。

3 「はい」をクリックします。

**注：** デフォルト・アプリケーション・グループまたは基本アプリケーション・グループは削除できません。Shared Services Console のファイル・システム・ノードを削除することもできません。

# アプリケーションの管理

## サブトピック

- [アプリケーションの移動](#)
- [複数のアプリケーションの削除](#)
- [アプリケーションの削除](#)

Shared Services は、登録された EPM System アプリケーションを追跡します。通常、EPM System 製品は、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System コンフィグレータを使用して配置する際に Shared Services に登録されます。EPM System アプリケーション・インスタンスは、配置する際に Shared Services に登録されます。

一部のアプリケーションを登録すると、アプリケーション・グループが作成され、アプリケーションが割り当てられます。登録によりアプリケーション・グループが作成されない場合は、アプリケーションがデフォルト・アプリケーション・グループの下にリストされます。これらのアプリケーションをプロビジョニングできます。デフォルト・アプリケーション・グループから別のアプリケーション・グループにアプリケーションを移動すると、Shared Services にプロビジョニング情報が保存されます。アプリケーションがアプリケーション・グループに割り当てられていなくても、アプリケーションをデフォルト・アプリケーション・グループに移行できます。

**注：** 名前が同じアプリケーションを複数保持できるのは、デフォルト・アプリケーション・グループのみです。ただし、アプリケーションが別のアプリケーション・グループに割り当てられないかぎり、アーティファクトの移行は行われません。

## アプリケーションの移動

アプリケーション・グループからアプリケーションを移動すると、アプリケーションとアプリケーション・グループ間の関連付けが除去されます。

▶ アプリケーションを移動するには:

- 1 **Shared Services Console** を起動します。  
[33 ページの「Shared Services Console の起動」](#)を参照してください。
- 2 移動するアプリケーションを含むアプリケーション・グループのノードを展開します。
- 3 アプリケーションを右クリックし、「移動」を選択します。
- 4 「移動」タブでアプリケーションの移動先のアプリケーション・グループを選択します。
- 5 「保存」をクリックします。

**注：** Shared Services と配置メタデータのアプリケーションは、Foundation アプリケーション・グループから移動できません。

## 複数のアプリケーションの削除

Shared Services の管理者がアプリケーションを削除すると、プロビジョニング情報も削除されます。

▶ 複数のアプリケーションを削除するには:

1 Shared Services Console を起動します。

33 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。

2 ビュー・ペインで、「アプリケーション・グループ」を右クリックし、「アプリケーションの削除」を選択します。

3 削除するアプリケーションを選択します。

アプリケーション・グループ内のすべてのアプリケーションを削除するには、そのアプリケーション・グループを選択します。

**注:** この画面でアプリケーション・グループを削除できません。37 ページの「[アプリケーション・グループの削除](#)」を参照してください。

4 「削除」をクリックします。

5 「OK」をクリックします。

## アプリケーションの削除

Shared Services の管理者はアプリケーション・グループからアプリケーションを削除できます。アプリケーション・グループからアプリケーションを削除する場合、そのアプリケーションのプロビジョニング情報はすべて除去されます。

▶ アプリケーションを削除するには:

1 Shared Services Console を起動します。

33 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。

2 ビュー・ペインで、削除するアプリケーションを含むアプリケーション・グループのノードを展開します。

3 アプリケーションを右クリックし、「削除」を選択します。

4 「OK」をクリックします。





# 6

## ライフサイクル管理および Shared Services Consoleでの作 業

### この章の内容

アーティファクトの表示.....	41
アーティファクトの検索.....	42
アーティファクトの移行.....	43
Shared Services レジストリ・データの編集.....	58
移行プロパティの編集.....	60
ライフサイクル管理のレポート.....	62

## アーティファクトの表示

Shared Services Console のライフサイクル管理インタフェースにより、アーティファクトの表示、検索、エクスポート、およびインポートが可能です。アーティファクトは各種カテゴリにソートされているため、整然と表示されます。

表形式のライフサイクル管理インタフェースにより、複数のアプリケーションを表示できます。

**注：** アーティファクトは製品ごとに異なります。

製品のアーティファクトおよびカテゴリの詳細は、このガイドの終わりにある付録を参照してください。

▶ Shared Services Console でアーティファクトを表示するには:

1 Shared Services Console を起動します。

33 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。

2 ビュー・ペインで「アプリケーション・グループ」ノードを展開し、アプリケーション・グループを表示します。

3 アプリケーションを表示するために、アプリケーション・グループを展開します。

**注：** 「Foundation」アプリケーション・グループには、Calculation Manager、配置メタデータ、Shared Services、Performance Management Architect などの Foundation アプリケーションが含まれます。「ファイル・システム」ノードはデフォルトの Shared Services ファイル・システムの場所(Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System コンフィグレータで定義されている)を読み取ります。

- 4 アプリケーションを選択して(またはアプリケーションを右クリックし、「エクスプローラ」を選択して)、アーティファクトのリストを表示します。

「アーティファクト・リスト」タブにはアーティファクト・リストが表示されます。

アーティファクト・リストの上に、次のビュー・オプションが表示されます。

- 「アーティファクト・リスト」:アプリケーションとリポジトリのアーティファクトを表示

各アプリケーション・グループに新しいタブが表示されます。移行が完了すると、タブは閉じます。

- 「選択済アーティファクト」:タブであらかじめ選択済のアーティファクトを表示

ライフサイクル管理インタフェースでは、アプリケーションとアプリケーション・グループ間で移動した際に選択したアーティファクトを記憶しています。この機能は複数の製品間でアプリケーションの移行を定義するときに役立ちます。

- 「アーティファクトの検索」:アーティファクトの検索オプションを表示します。

## アーティファクトの検索

アーティファクト・リストの上にあるアーティファクトの検索オプションを使用して、アーティファクトの検索オプションを表示できます。

▶ Shared Services Console でアーティファクトを検索するには:

- 1 Shared Services Console を起動します。

33 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。

- 2 アーティファクトを表示します。41 ページの「[アーティファクトの表示](#)」を参照してください。

- 3 「アーティファクト・リスト」タブで、「アーティファクトの検索」をクリックします。

- 4 検索オプションを入力します:

- 「アーティファクト名」 - アーティファクトの名前。アスタリスク(\*)をパターン検索でワイルドカードとして使用するか、フィルタの条件に一致するアーティファクトを検索します。たとえば、A\*と指定すると、A(検索は大文字と小文字を区別しないため、小文字の a も含む)で始まるすべてのアーティファクトが戻ります。\*A では A(または小文字の a)で終わるすべてのアーティファクトが戻ります。
- 「変更日」 - 次のオプションから選択します。
  - 「今日」 - 今日変更されたアーティファクト
  - 「昨日」 - 昨日変更されたアーティファクト
  - 「過去 7 日間」 - 最近 7 日間に変更されたアーティファクト

- 「過去1か月間」 - 最近1か月間に変更されたアーティファクト
- 「日付範囲」 - 指定した日付範囲内(指定した日付を含む)に変更されたアーティファクト

**注：** 変更日をサポートしないアーティファクトは常に表示されます。

変更日または時間をサポートしないアーティファクトのリストは、このガイドの終わりにある付録を参照してください。

- 「開始日」 - 日付範囲の開始の日(たとえば、01/01/2008)
- 「終了日」 - 日付範囲の終了の日(たとえば、01/31/2008)
- 「変更者」 - ユーザーの名前。アスタリスク(\*)をパターン検索でワイルドカードとして使用するか、フィルタの条件に一致するアーティファクトを検索します。検索では大文字/小文字は区別されません。

**注：** 検索条件が指定されないと、アプリケーションのすべてのアーティファクトが表示されます。

## 5 「検索」をクリックします。

# アーティファクトの移行

## サブトピック

- [ファイル・システムへのエクスポート](#)
- [ファイル・システムからのインポート](#)
- [移行オプションの設定](#)
- [編集する個々のアーティファクトのエクスポートとインポート](#)
- [アプリケーション・アーティファクトのダウンロードおよびアップロード](#)
- [ネイティブ・ディレクトリ\(セキュリティ\)の移行](#)

アーティファクトを次のインスタンスのファイル・システムとの間で移行することができます:

- ソースと宛先が同じ Shared Services インスタンスに登録されている場合
- ソースと宛先が異なる Shared Services インスタンスに登録されているが、共有ファイル・システムが使用されている場合

ソースと宛先が同じ Shared Services インスタンスに登録されておらず、同じネットワーク内にもない場合は、中間のファイル・システムにアーティファクトをエクスポートし、FTP、DVD、または他の転送メソッドを使用して、中間のファイル・システムを宛先システムに転送できます。

**注：** 転送のシナリオでは、ファイル・システム・フォルダが MIDDLEWARE\_HOME/user\_projects/epmsystem1 の import\_export フォルダに直接コピーされることを確認します。

## ファイル・システムへのエクスポート

ファイル・システムの場所は、Shared Services の Java Web アプリケーション・サーバー・コンピュータです。Shared Services コンピュータのデフォルトの宛先は、MIDDLEWARE\_HOME/user\_projects/epmsystem1/import\_export です。ファイル・システムの場所にエクスポート(コピー)されたアプリケーションまたはアーティファクトは、ビュー・ペインの「ファイル・システム」ノードの下に表示されます。アーティファクトがファイル・システムにエクスポートされると、ネイティブ製品でアーティファクトが更新された最後の変更日時が保持されます。

**注：** Windows 2003 の場合、Shared Services が Windows のサービスの 1 つとして開始され、ファイル・システム・パスはマップされたドライブに定義されることから、Shared Services Console を使用してファイル・システムのコンテンツを表示できません。ファイル・システム・パスがネットワーク・アクセスの可能な場所である場合は、Shared Services が Windows サービスとして実行していないことを確認してください。

▶ Shared Services Console を使用してファイル・システムにアーティファクトとアプリケーションをエクスポートするには:

### 1 Shared Services Console を起動します。

33 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。

### 2 「管理」、「移行オプション」を選択します。

### 3 「移行オプション」・タブで、移行用のエクスポート・オプションを確認します。

インストールされた製品に対するオプションのみが表示されます。製品によってオプションは異なり、すべての製品にエクスポート・オプションがあるわけではありません。必要に応じて何も変更せずにデフォルトのオプションを受け入れることができます。

製品別のオプションのリストは、47 ページの「[移行オプションの設定](#)」を参照するか、このガイドの終わりにある付録を参照してください。

### 4 移行オプションを変更した場合は、「保存」をクリックします。

### 5 「アプリケーション・グループ」ノードを展開し、エクスポートするアプリケーションを選択します。

アプリケーションを選択すると、「アーティファクト・リスト」タブにアプリケーションとそのアプリケーションとリポジトリ・アーティファクトが表示されます。

### 6 各アプリケーションの「アーティファクト・リスト」タブで、エクスポートするアーティファクトを選択します。

個々のアーティファクトを選択するには、アーティファクトの横にあるチェックボックスをクリックします。すべてのアーティファクトを選択するには、「すべて選択」をクリックします。

### 7 Shared Services Console の右下にある「エクスポート」ボタンをクリックします。

- 8 「エクスポート」ダイアログ・ボックスで、アーティファクトがエクスポートされる「ファイル・システム・フォルダ」を入力し、「エクスポート」をクリックします。

デフォルトのファイル・システム・フォルダ名は、username DD-MM-YY Hour\_Min 形式で表示されます。たとえば、admin 03-01-12 09\_32 です。デフォルトを受け入れるか、または異なるファイル・システム・フォルダ名を入力します。

ライフサイクル管理では、フォルダ名にネイティブ・オペレーティング・システムでサポートされない文字は許可されないことに注意してください。たとえば、Windows ではフォルダ名にコロンは許可されませんが、ライフサイクル管理でも同様です。

選択されているすべてのアプリケーションおよびアーティファクトは、指定されたファイル・システム・フォルダにエクスポートされます。(複数のアプリケーションがある場合、異なるファイル・システム・フォルダを指定する必要はありません。)

ファイル・システムにすでに存在するファイル・システム・フォルダ名を指定した場合は、新しいファイル・システム・フォルダ名を指定することが求められます。

- 9 「移行ステータス・レポート」タブで移行ステータスを表示します。

63 ページの「移行ステータスの表示」を参照してください。

アーティファクトが正常に移行された後で、新しいファイル・システムフォルダが Shared Services Console の「ファイル・システム」ノードの下に作成されます。ファイル・システム・フォルダを展開すると、アプリケーションが製品名とそれに続くアプリケーション名で表示されます。

**ヒント:** ファイル・システムに移行されるアーティファクトのセキュリティを保護できます。第 1 レベルのセキュリティは、ファイル・システム・セキュリティです。ファイル・システム上のアーティファクトへのアクセスを制限するには、Shared Services を開始したユーザーに import\_export フォルダへのすべての権限を許可し、その他のユーザーには許可しないように、import\_export フォルダの権限を変更します。追加のセキュリティ・レベルが必要な場合は、import\_export フォルダのコンテンツを、パスワードで保護されたコンテナ(Winzip など)に移動するか、PGP またはその他のデータ暗号化メソッドを使用して、ファイル・システム上で暗号化します。アーティファクトをファイル・システムからインポートする前に、権限のあるユーザーがアーティファクトの暗号化を解除するようにしてください。

## アーティファクトのファイル・システムへの再エクスポート

必要に応じてアーティファクトをファイル・システムに再エクスポートできます。アーティファクトを再エクスポートするには、「ファイル・システム」ノードの下のフォルダを右クリックし、「エクスポートの繰返し」を選択します。

エクスポートを繰り返すと、アーティファクトは、新しいファイル・システム・フォルダにエクスポートされます。アーティファクトを再インポートするには、

「ファイル・システム」ノードの下のフォルダを右クリックし、「インポート」を選択します。(インポートする前に製品に設定された移行オプションをチェックする必要があります。)

## ファイル・システムからのインポート

ファイル・システムの場所は、Shared Services の Java Web アプリケーション・サーバー・コンピュータです。Shared Services コンピュータのデフォルトの宛先は、MIDDLEWARE\_HOME/user\_projects/epmsystem1/import\_export です。ファイル・システムの場所にエクスポート(コピー)されたアプリケーションまたはアーティファクトは、ビュー・ペインの「ファイル・システム」ノードの下に表示されます。アーティファクトがファイル・システムにエクスポートされると、ネイティブ製品でアーティファクトが更新された最後の変更日時が保持されます。

▶ Shared Services Console を使用して、ファイル・システムからアーティファクトおよびアプリケーションをインポートするには、次の手順を行います:

### 1 宛先環境をバックアップします。

Oracle Enterprise Performance Management System Backup and Recovery Guide を参照してください。

### 2 Shared Services Console を起動します。

33 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。

### 3 「管理」、「移行オプション」を選択します。

### 4 「移行オプション」・タブで、移行用のインポート・オプションを定義します。

インストールされた製品に対するオプションのみが表示されます。製品によってオプションは異なり、すべての製品にインポート・オプションがあるわけではありません。必要に応じて何も変更せずにデフォルトのオプションを受け入れることができます。

製品別のオプションのリストは、47 ページの「[移行オプションの設定](#)」を参照するか、このガイドの終わりにある付録を参照してください。

### 5 「ファイル・システム」ノードを展開し、インポートするアプリケーションを選択します。

アプリケーションを選択すると、「アーティファクト・リスト」タブにアプリケーションとそのアプリケーションとリポジトリ・アーティファクトが表示されます。

### 6 次のいずれかの方法でアーティファクトをインポートします。

- 「ファイル・システム」フォルダを右クリックして、「インポート」を選択します。

そのフォルダ内のすべてのアプリケーションをインポートします。インポートする「ファイル・システム」フォルダを選択すると、ダイアログ・ボックスが表示され、インポートを続行するかどうかの確認が求められます。

- 「ファイル・システム」フォルダの下の個々のアプリケーションを右クリックして、「インポート」を選択します。

- それぞれのアプリケーションの「アーティファクト・リスト」タブで、インポートするアーティファクトを選択し、Shared Services Console の右下にある「インポート」ボタンをクリックします。

デザイナー・ロールが割り当てられたユーザーでは「インポート」ボタンは使用できません。

- 7 「インポート」ダイアログ・ボックスで、インポートするアプリケーションを選択し、「インポート」をクリックします。

デフォルトでは、ファイル・システム(移行定義ファイル)からのアプリケーション名が表示されます。存在しない場合は、アプリケーションが作成されます。

- 8 「移行ステータス・レポート」タブで移行ステータスを表示します。

[63 ページの「移行ステータスの表示」](#)を参照してください。

## 移行オプションの設定

### サブトピック

- [移行のインポート・オプション](#)
- [移行のエクスポート・オプション](#)
- [移行オプションのあるサンプルの移行定義ファイル](#)

ライフサイクル管理の移行用のインポートおよびエクスポート・オプションを設定できます。インストールされた製品に対するオプションのみが表示されます。製品によってオプションは異なり、すべての製品にオプションがあるわけではありません。必要に応じて何も変更せずにデフォルトのオプションを受け入れることができます。

移行オプションはすべてのライフサイクル管理の移行にグローバルに適用できます。これらは移行定義ファイルで明示的にオプションを指定することで上書きできます。

▶ 移行オプションを設定するには:

- 1 Shared Services Console を起動します。

[33 ページの「Shared Services Console の起動」](#)を参照してください。

- 2 「管理」、「移行オプション」を選択します。
- 3 「移行オプション」タブで、移行に必要なオプションを入力します。

## 移行のインポート・オプション

表 3 インポート・オプション

インポート・オプション	説明
<p>「Essbase Studio - インポート・モード」</p>	<p>インポート・オプションを選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「置換」:要素がカタログ・データベースにすでに存在する場合は、カタログ・ファイルの新しい要素で上書きされます。</li> <li>「マージ」:要素がカタログ・データベースにすでに存在する場合は、その要素が保持され、XML ファイルの重複する要素は使用されません。XML ファイルを使用して、カタログ・データベースが作成されます。少なくとも 1 つのインポートされたオブジェクトがカタログに存在する場合、インポート・プロセスは終了します。</li> <li>「要素が存在する場合は中止」:XML ファイルを使用してカタログ・データベースが作成されます。少なくとも 1 つのインポートされたオブジェクトがカタログに存在する場合、インポート・プロセスは終了します。</li> </ul> <p><b>注:</b> 「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre>&lt;Options option="OverwriteCatalogObjects" Value="value"/&gt;</pre> <p>例:</p> <pre>&lt;Options option="OverwriteCatalogObjects" Value="SKIP"/&gt;</pre> <p>移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値は Replace/Merge/Abort (要素が存在する場合) です。</p>
<p>「EPM Architect - 次元のインポート・モード」</p>	<p>次のいずれかのインポート操作を選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「置換」:宛先の次元とプロパティをソース・インスタンスから抽出されたメタデータに置換します。</li> <li>「マージ」:宛先の次元とプロパティをソース・インスタンスから抽出されたメタデータにマージします。</li> </ul> <p><b>注:</b> 「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre>&lt;Options option="replaceDimension" Value="value"/&gt;</pre> <p>例:</p> <pre>&lt;Options option="replaceDimension" Value="Merge"/&gt;</pre> <p>移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値は Replace/Merge です。</p>
<p>「Essbase アプリケーション - アーティファクトを上書き」</p>	<p>「はい」の場合、宛先の場所にあるすべてのアーティファクトを上書きします。デフォルト値は「いいえ」です。</p> <p><b>注:</b> 「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre>&lt;Options option="overWriteArtifact" Value="value"/&gt;</pre> <p>例:</p> <pre>&lt;Options option="overWriteArtifact" Value="false"/&gt;</pre> <p>移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値は True/false です。</p>



インポート・オプション	説明
「Essbase アプリケーション - キューブの再構築」	<p>次のいずれかのオプションを選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 「キューブ・データを保持」 - キューブのアウトラインを再構築するときにキューブのデータを保持します。</li> <li>● 「キューブ・データを破棄」 - キューブのアウトラインを再構築するときにキューブのデータを破棄します。</li> <li>● 「入力データのみ保持」 - キューブのアウトラインを再構築するときに入力データのみを保持します。</li> <li>● 「レベル 0 データのみ保持」 - キューブのアウトラインを再構築するときにレベル 0 のデータのみを保持します。</li> </ul> <p><b>注:</b> 「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre>&lt;Options option="restructureCube" Value="value"/&gt;</pre> <p>例:</p> <pre>&lt;Options option="restructureCube" Value="Retain cube data"/&gt;</pre> <p>移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値は Retain cube data/Discard cube data/Keep only input data/Keep only 0 level data です。</p>
「FDMEE - 検証のスキップ」	<pre>&lt;guilabel moreinfo="none"&gt;</pre> <p>インポート中に宛先の場所でのターゲット次元メンバーの検証をスキップします。</p> <p><b>注:</b> 「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre>&lt;Options option="skipValidation" Value="value"/&gt;</pre> <p>例:</p> <pre>&lt;Options option="skipValidation" Value="true"/&gt;</pre> <p>移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値は True/false です。</p>
「Financial Close Management - インポート・モード」	<p>次のいずれかのオプションを選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 「置換」 - インポートしたアーティファクトで選択したアーティファクトを上書きします</li> <li>● 「すべて置換」 - インポートしたアーティファクトで既存のアーティファクトをすべて上書きします</li> </ul> <p><b>注:</b> 「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre>&lt;Options option="replaceOption" Value="value"/&gt;</pre> <p>例:</p> <pre>&lt;Options option="replaceOption" Value="Replace"/&gt;</pre> <p>移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値は Replace/Replace All です。</p>

インポート・オプション	説明
「Reporting and Analysis - インポートでジョブ出力を除外」	<p>「はい」の場合は、インポート時にすべてのジョブ出力がインポート・フィルタと一致した場合でもスキップされます。デフォルト値は「いいえ」です。</p> <p><b>注：</b>「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre>&lt;Options option="excludeJobOutputOnImport" Value="value" /&gt;</pre> <p>例:</p> <pre>&lt;Options option="excludeJobOutputOnImport" Value="false" /&gt;</pre> <p>移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値は True/false です。</p>
「Reporting and Analysis - より新しいアーティファクトのみ置換」	<p>「はい」の場合は、リポジトリ内のアーティファクトと比較してファイル・システムの最終変更のタイム・スタンプがより新しいアーティファクトのみがインポートおよび置換されます。デフォルト値は「いいえ」で、最終変更のタイムスタンプに関係なく、宛先環境の既存のアーティファクトが置換されます。</p> <p><b>注：</b>「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre>&lt;Options option="replaceNewerArtifactsOnlyImport" Value="value" /&gt;</pre> <p>例:</p> <pre>&lt;Options option="replaceNewerArtifactsOnlyImport" Value="true" /&gt;</pre> <p>移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値は True/false です。</p>
「HFM - 次元のインポート・モード」	<p>次のいずれかのインポート操作を選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 「置換」 - アーティファクトをインポートしたアーティファクトで上書きします。</li> <li>● 「マージ」 - アーティファクトをインポートしたアーティファクトとマージします。</li> </ul> <p><b>注：</b> このオプションは、移行で定義されたすべての次元に適用できます。</p> <p><b>注：</b>「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre>&lt;Options option="ImportDimensionMode" Value="value" /&gt;</pre> <p>例:</p> <pre>&lt;Options option="ImportDimensionMode" Value="Merge" /&gt;</pre> <p>移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値は Replace/Merge です。</p>
「HFM - フェーズ送信割当てインポート・モード」	<p>次のいずれかのインポート操作を選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 「置換」 - アーティファクトをインポートしたアーティファクトで上書きします。</li> <li>● 「マージ」 - アーティファクトをインポートしたアーティファクトとマージします。</li> </ul> <p><b>注：</b>「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre>&lt;Options option="ImportPhaseSubmissionAssignmentMode" Value="value" /&gt;</pre> <p>例:</p> <pre>&lt;Options option="ImportPhaseSubmissionAssignmentMode" Value="Replace" /&gt;</pre> <p>移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値は Replace/Merge です。</p>

インポート・オプション	説明
「Shared Services - 最大エラーしきい値」	<p>インポート・プロセスが停止されるまでに許容されるエラーの数。</p> <p><b>注：</b>「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre data-bbox="403 376 986 398">&lt;Options option="maxerrors" Value="value"/&gt;</pre> <p>例:</p> <pre data-bbox="403 465 959 488">&lt;Options option="maxerrors" Value="100"/&gt;</pre> <p>移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値は 10/50/100/500/1000/5000/&gt;5000 です。</p>
「Shared Services - インポート・モード」	<p>次のいずれかのインポート操作を選択します:</p> <ul data-bbox="403 651 632 801" style="list-style-type: none"> <li>● 作成または更新</li> <li>● 作成</li> <li>● 更新</li> <li>● 削除</li> </ul> <p><b>注：</b> 非アクティブ化されたネイティブ・ディレクトリのユーザーを削除するには、ユーザーを最初にアクティブ化してから削除する必要があります。</p> <p><b>注：</b>「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre data-bbox="403 976 986 999">&lt;Options option="operation" Value="value"/&gt;</pre> <p>例:</p> <pre data-bbox="403 1066 999 1088">&lt;Options option="operation" Value="Delete"/&gt;</pre> <p>移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値は Create or Update/Create/Update/Delete です。</p>

## 移行のエクスポート・オプション

表 4 エクスポート・オプション

エクスポート・オプション	説明
「Reporting and Analysis - ジョブ出力付きのエクスポート」	<p>「はい」の場合は、ジョブはその出力がエクスポート・フィルタと一致しない場合でも、出力とともにエクスポートされます。デフォルト値は「はい」です。</p> <p><b>注：</b>「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre data-bbox="451 1630 1114 1653">&lt;Options option="exportJobOutput" Value="value"/&gt;</pre> <p>例:</p> <pre data-bbox="451 1720 1102 1742">&lt;Options option="exportJobOutput" Value="true"/&gt;</pre> <p>移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値は True/false です。</p>

エクスポート・オプション	説明
「Performance Scorecard - 増分エクスポート」	<p>「はい」の場合は、最後のエクスポート以降に変更されたメタデータ・オブジェクトをエクスポートします。デフォルト値は「いいえ」です。</p> <p><b>注：</b>「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre data-bbox="416 398 1011 427">&lt;Options option="incremental" Value="value"/&gt;</pre> <p>例:</p> <pre data-bbox="416 495 1011 524">&lt;Options option="incremental" Value="false"/&gt;</pre> <p>移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値は True/false です。</p>

## 移行オプションのあるサンプルの移行定義ファイル

次に、移行オプションの行を太字で示したサンプルの移行定義ファイルを示します。

```

<Package>
<LOCALE>en_US</LOCALE>
<User name="admin" password="" />
<Task>
  <Source type="Application" product="HUB" project="Foundation" application="Shared Services" />
  <Target type="FileSystem" filePath="/expl/HUB.Shared Services" />

  <Options option="operation" Value="delete" />

  <Artifact recursive="true" parentPath="/Native Directory" pattern="*" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Taskflows" pattern="*" />
</Task>
<Task>
  <Source type="FileSystem" filePath="/exp22/HUB.Shared Services" />
  <Target type="Application" product="HUB" project="Foundation" application="Shared Services" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Native Directory" pattern="*" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Taskflows" pattern="*" />
</Task>
</Package>

```

## 編集する個々のアーティファクトのエクスポートとインポート

### サブトピック

- [編集する個々のアーティファクトのエクスポートとインポート](#)
- [個々のアーティファクトの編集](#)
- [編集後の個々のアーティファクトのインポート](#)

Shared Services Console を使用して、個々のアーティファクトをファイル・システムにエクスポートして編集し、編集後に再度インポートできます。アーティファ

クトは、エクスポート元と同一のアプリケーションにインポートする必要があります。

**注：** アーティファクトにはファイル・システムで編集できないものもあります。  
53 ページの「[個々のアーティファクトの編集](#)」を参照してください。

## 編集する個々のアーティファクトのエクスポートとインポート

▶ Shared Services Console を使用して個々のアーティファクトをエクスポートするには:

1 Shared Services Console を起動します。

33 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。

2 ビュー・ペインで「アプリケーション・グループ」ノードを展開し、アプリケーション・グループを表示します。

3 アプリケーションを表示するために、アプリケーション・グループを展開します。

4 アプリケーションを選択して(またはアプリケーションを右クリックし、「エクスプローラ」を選択して)、アーティファクトのリストを表示します。

5 エクスポートするアーティファクトを右クリックし、「編集用にエクスポート」を選択します。

6 「ファイルのダウンロード」で「保存」をクリックします。

7 ローカル・ファイル・システムの保存場所を入力し、「保存」をクリックします。

**注：** Reporting and Analysis にかぎり、アーティファクトがローカル・ファイル・システムの ZIP ファイルに保存されます。編集するには、アーティファクトを解凍する必要があります。その他の製品では、アーティファクトは ZIP ファイルではなく、ファイル・システムに直接保存されます。

## 個々のアーティファクトの編集

アーティファクトは、個別のアプリケーションまたはリポジトリ・アイテム(スクリプト、Web フォーム、データ・フォーム、ルール・ファイル、ドキュメント、財務レポートなど)であるため、その編集方法はアーティファクトのタイプによって異なります。一部のアーティファクトはテキスト・エディタで編集可能ですが、中には編集時に製品が必要なものもあります。たとえば、Calculation Manager アーティファクトは XML ベースであるため、テキスト・エディタで編集できます。

アーティファクトがファイル・システム上で編集可能かどうかを判別するには、このガイドの巻末付録のアーティファクト・リストを確認してください。

---

**注意** 編集用にエクスポートしたファイルは名前変更しないでください。インポートが失敗します。

---

## 編集後の個々のアーティファクトのインポート

アーティファクトは、エクスポート元と同一のアプリケーションにインポートする必要があります。また、アーティファクトのエクスポート中に使用された同じファイル名を使用する必要があります。

▶ Shared Services Console を使用して個別アーティファクトをインポートするには:

- 1 Shared Services Console を起動します。  
33 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
- 2 ビュー・ペインで「アプリケーション・グループ」ノードを展開し、アプリケーション・グループを表示します。
- 3 アプリケーションを表示するために、アプリケーション・グループを展開します。
- 4 アプリケーションを選択して(またはアプリケーションを右クリックし、「エクスプローラ」を選択して)、アーティファクトのリストを表示します。
- 5 アプリケーション内の任意のアーティファクトを右クリックし、「編集後にインポート」を選択します。
- 6 「アーティファクトのロード」で、アーティファクトを保存するローカルのファイル・システムの場所を入力し、「終了」をクリックします。

## アプリケーション・アーティファクトのダウンロードおよびアップロード

### サブトピック

- [アプリケーション・アーティファクトをダウンロードおよびアップロードする手順](#)
- [ZIP ファイルおよびアーカイブに関する重要事項](#)

Shared Services Console のファイル・システム・ノードからアーティファクトをダウンロードすることで、アプリケーション・アーティファクトをある環境から別の環境に移動できます。ライフサイクル管理アーティファクトをダウンロードする場合は、ZIP ファイルに保存します。さらにアーティファクトを含む ZIP ファイルを別の環境にアップロードできます。

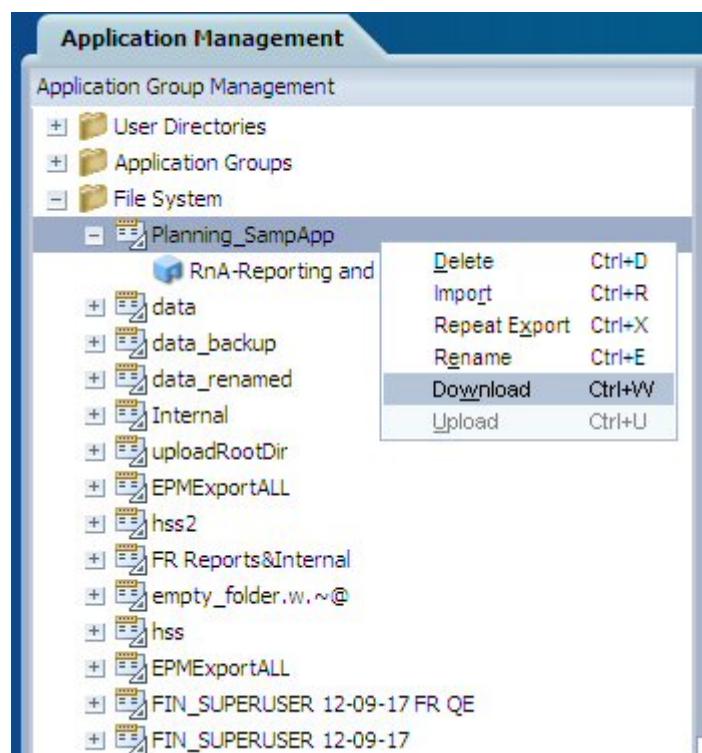
### アプリケーション・アーティファクトをダウンロードおよびアップロードする手順

▶ アプリケーション・アーティファクトをダウンロードおよびアップロードするには:

- 1 既存の環境で、Shared Services Console を起動します。  
33 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
- 2 ビュー・ペインで「ファイル・システム」ノードを展開します。

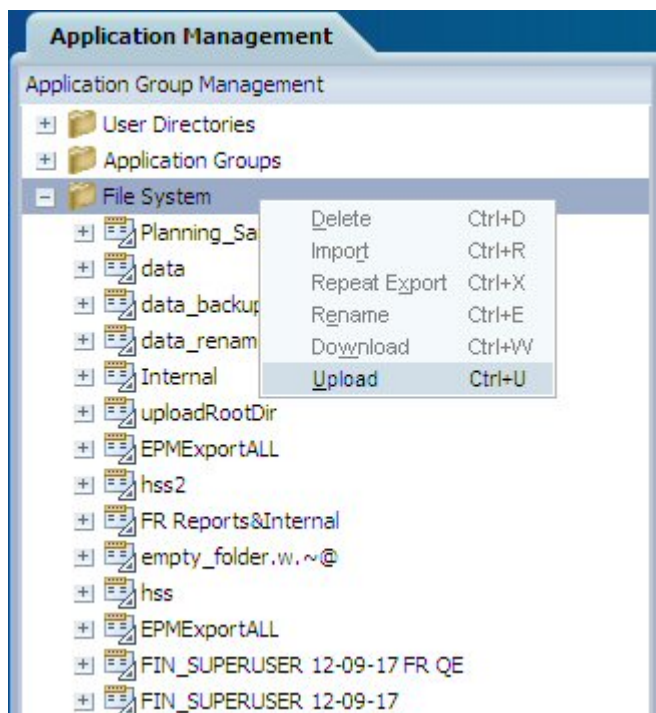
- 3 「ファイル・システム」フォルダを右クリックして、「ダウンロード」を選択します。

「ダウンロード」オプションは、ファイル・システム・フォルダがサーバー上の ZIP ファイルの場合にのみ使用できます。エクスポート操作中、フォルダ・サイズが 2GB 以下の場合のみ、ファイル・システム・フォルダはライフサイクル管理によって圧縮されます。2GB より大きいコンテンツの場合、ある環境から他の環境に移動するには、FTP などのメカニズムを使用する必要があります。



- 4 「ファイルのダウンロード」ダイアログ・ボックスで、「保存」をクリックして、アプリケーション・アーティファクトを ZIP ファイルとして保存します。  
ZIP ファイルのコンテンツ全体を 1 つのファイルとしてダウンロードします。
- 5 新しい環境で、Shared Services Console を起動し、「ファイル・システム」ノードを展開します。
- 6 「ファイル・システム」ノードを右クリックし、「アップロード」を選択して、アップロードする ZIP ファイルを選択します。

ZIP ファイルがすでに存在する場合、アップロードは中止されます。必要に応じてアップロードする前に ZIP ファイルの名前を変更できます。



## ZIP ファイルおよびアーカイブに関する重要事項

- ダウンロードしたコンテンツを解凍する場合や、圧縮した LCM フォルダをサーバーにアップロードする場合、7-Zip などの圧縮ソフトウェアを使用する必要があります。
- 2GB より大きい ZIP ファイルのアップロードはサポートされません。
- データ・セットをアーカイブする場合、Unicode のパスおよびファイル名を維持する必要があります。

7-Zip を使用してこれを行うには:

1. 「ファイル・システム」フォルダを右クリックして「7-zip」を選択し、次に「Add to Archive」を選択します。
2. 「Add to Archive」ダイアログ・ボックスで、次の情報を設定します:
  - 「Archive Format」フィールドで、「Zip」を選択します。
  - 「Parameters」フィールドに、「cu=on」を入力します。
3. 「OK」をクリックします。

**注：** UTF エンコードが維持されない場合に、データ・セットにそれらのエンコードを必要とする文字が含まれていると、移行はエラーになります。

## ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行

アプリケーション・アーティファクトを移行する方法と同じ方法でネイティブ・ディレクトリのアーティファクト(割り当てられた役割、グループ、役割、およびユーザー)を移行できます。



Shared Services ネイティブ・ディレクトリのアーティファクトは、Foundation アプリケーション・グループの下の Shared Services ノードにリストされています。

**注：** 製品アプリケーションのセキュリティ・アーティファクト(たとえば、Financial Management セキュリティ・クラシックや Essbase フィルタなど)は、製品アプリケーション・グループの下に個別にリストされています。

製品別のアプリケーションのセキュリティ・アーティファクト・リストについては、このガイドの巻末にある付録を参照してください。

▶ Shared Services Console を使用して Shared Services ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)のアーティファクトを移行するには:

**1 宛先環境をバックアップします。**

Oracle Enterprise Performance Management System Backup and Recovery Guide を参照してください。

**2 Shared Services Console を起動します。**

[33 ページの「Shared Services Console の起動」](#)を参照してください。

**3 ビュー・ペインで「アプリケーション・グループ」ノードから、「Foundation」アプリケーション・グループを展開します。**

**4 「Shared Services」を選択します(または、「Shared Services」を右クリックして、「エクスプローラ」を選択します)。**

**5 「ネイティブ・ディレクトリ」を展開して、次のネイティブ・ディレクトリのアーティファクトを選択します。**

- 「割り当てられている役割」

割り当てられた役割を展開し、移行するアーティファクトを選択します。アーティファクトには通常、アプリケーション名にちなんだ名前が付けられます。

- 「委任リスト」
- 「グループ」
- 「役割」
- 「ユーザー」

**6 「割り当てられた役割」を展開して、移行するアプリケーションに割り当てられた役割を選択します。**

**7 「エクスポート」を選択します。**

**8 「エクスポート」ダイアログ・ボックスで、アーティファクトがエクスポートされる「ファイル・システム・フォルダ」を入力し、「エクスポート」をクリックします。**

**9 「移行ステータス・レポート」タブで移行ステータスを表示します。**

# Shared Services レジストリ・データの編集

## サブトピック

- [Shared Services レジストリ・データの表示](#)
- [Shared Services レジストリ・データのエクスポート](#)
- [Shared Services レジストリ・データの編集](#)
- [Shared Services レジストリ・データのインポート](#)

Shared Services レジストリとは Shared Services 用に構成するデータベースの一部です(Shared Services のデータベースとテーブルスペースを共有しています。)

**注：** 前のリリースでは、Shared Services レジストリは EPM System レジストリとも呼ばれていました。

Shared Services レジストリは EPM System 製品の初回構成時に作成され、インストールする主な EPM System 製品の次の情報を保管および再使用することで、構成を簡略化します。

- インストール・ディレクトリ、データベース設定、配置設定などの初期構成値
- 複数の統合された EPM System 製品およびコンポーネントを実装するために使用するコンピュータ名、ポート、サーバー、URL
- 依存するサービス・データ

ライフサイクル管理に備わったユーザー・インタフェースにより、ユーザーはレジストリのコンテンツを表示し、レジストリ・データを編集や再インポートが可能なファイル・システムにエクスポートできます。

---

**注意** Shared Services レジストリ・アーティファクトは指定された環境にかぎり、ライフサイクル管理の一部として構成情報の編集などに使用可能です。Shared Services レジストリ・データを1つの環境から別の環境に移行するためにライフサイクル管理を使用しないでください。

---

ライフサイクル管理を使用すると、エクスポートする Shared Services レジストリのアーティファクトを定義できます。Shared Services Console を使用して、個々のレジストリ・アーティファクトをファイル・システムにエクスポートして編集し、編集後に再度インポートできます。

Foundation アプリケーション・グループの Deployment Metadata ノードの下で、Shared Services Console に属す Shared Services レジストリ・アーティファクトをすべて表示できます。

- ノード(レジストリの分類ごと)はすべてライフサイクル管理のディレクトリです。
- ノードの属性はすべてライフサイクル管理のアーティファクトです。

- ファイル(XML ファイルなど)の属性には、対応するファイル・タイプのアーティファクトが存在します。
- ノード(コンポーネントまたは製品)の名前付き値ペアの属性はいずれも、1つのアーティファクトにグループ分けされます。このアーティファクトはこうした属性のすべてを含むファイルで、ライフサイクル管理のエクスポートが実施されるときにコピーされます。

Shared Services レジストリ・アーティファクトおよび Shared Services レジストリの移行オプションのリストについては、[付録 A 「配置メタデータとライフサイクル管理」](#) を参照してください。

## Shared Services レジストリ・データの表示

- ▶ Shared Services Console を使用して、Shared Services レジストリ・データを表示するには:
  - 1 Shared Services Console を起動します。  
[33 ページの「Shared Services Console の起動」](#) を参照してください。
  - 2 ビュー・ペインの「アプリケーション・グループ」ノードで、「Foundation」アプリケーション・グループを展開します。
  - 3 「配置メタデータ」を選択します(または「配置メタデータ」を右クリックして、「エクスプローラ」を選択します)。
  - 4 「Shared Services レジストリ」を選択します。

## Shared Services レジストリ・データのエクスポート

---

**注意** Shared Services レジストリ・アーティファクトは指定された環境にかぎり、ライフサイクル管理の一部として構成情報の編集などに使用可能です。Shared Services レジストリ・データを1つの環境から別の環境に移行するためにライフサイクル管理を使用しないでください。

---

- ▶ Shared Services Console を使用して Shared Services レジストリをエクスポートするには:
  - 1 Shared Services Console を起動します。  
[33 ページの「Shared Services Console の起動」](#) を参照してください。
  - 2 ビュー・ペインの「アプリケーション・グループ」ノードで、「Foundation」アプリケーション・グループを展開します。
  - 3 「配置メタデータ」を選択します(または「配置メタデータ」を右クリックして、「エクスプローラ」を選択します)。
  - 4 「Shared Services レジストリ」を展開します。
  - 5 エクスポートする Shared Services レジストリのアーティファクトを選択します。

個々のアーティファクトを選択するには、アーティファクトの横にあるチェックボックスをクリックします。すべてのアーティファクトを選択するには、「すべて選択」をクリックします。

- 6 「エクスポート」を選択します。
- 7 「エクスポート」ダイアログボックスで、アーティファクトがエクスポートされる「ファイル・システム・フォルダ」を入力し、「エクスポート」をクリックします。
- 8 「移行ステータス・レポート」タブで移行ステータスを表示します。

## Shared Services レジストリ・データの編集

- ▶ ファイル・システムで Shared Services レジストリ・データを編集するには:
  - 1 Shared Services レジストリ・データがコピーされている、またはエクスポートされているファイル・システムの場所に移動します。
  - 2 データを編集します。
  - 3 変更を保存します。

## Shared Services レジストリ・データのインポート

- ▶ Shared Services Console を使用して、Shared Services レジストリ・データをインポートするには:
  - 1 Shared Services Console を起動します。  
[33 ページの「Shared Services Console の起動」](#)を参照してください。
  - 2 ビュー・ペインの「ファイル・システム」ノードで、エクスポートするときに指定したファイル・システム・フォルダを右クリックし、「インポート」を選択します。

## 移行プロパティの編集

ライフサイクル管理では、移行プロパティを使用して移行に関するグローバル・パラメータを設定します。

- ▶ 移行プロパティを変更するには:
  - 1 Shared Services Console を起動します。  
[33 ページの「Shared Services Console の起動」](#)を参照してください。
  - 2 「表示ペインで「アプリケーション・グループ」ノードを展開します。
  - 3 「アプリケーション・グループ」下で「Foundation」、「配置メタデータ」の順に展開します。
  - 4 「アーティファクト・リスト」タブで、「Shared Services レジストリ」、「Foundation Services」、「Shared Services」の順に展開します。

- 5 「プロパティ」アーティファクトを選択して右クリックし、「編集用にエクスポート」を選択します。
- 6 「ファイルのダウンロード」ダイアログ・ボックスで、希望の場所に「プロパティ」アーティファクトを保存します。
- 7 必要に応じて移行プロパティを編集します。
- 8 ライフサイクル管理に戻り、手順 5 で使用した「プロパティ」アーティファクトを右クリックして「編集後にインポート」を選択します。
- 9 「編集後にインポート」ダイアログ・ボックスで、編集されたプロパティ・アーティファクトが使用可能なファイル・システムを指定します。
- 10 Shared Services を再起動します。

表 5 移行プロパティとその説明

プロパティ	説明
double-encoding	<p>Financial Management アプリケーションの移行で UTF-8 エンコードに加えて Base64 エンコードを使用できます。</p> <p>このプロパティは、混在リリース環境で(Financial Management の前のリリースと、Shared Services のこのリリースを使用する場合など)Financial Management の移行を実行する場合にはサポートされません。混在リリース環境で Financial Management アプリケーションの移行を実行する場合は、このプロパティを FALSE に設定します。</p> <p><b>デフォルト値:</b> TRUE</p>
filesystem.artifact.path	<p>エクスポートされたアプリケーションが保管されるディレクトリの場所。これは、Shared Services が高可用性用に構成されている場合の共有ディスクの場所です。このパラメータをカスタマイズするには、この行のコメントを解除し、パスの場所を追加します。</p> <p><b>デフォルト値:</b> このパラメータはコメント化され、ライフサイクル管理エンジンでは Shared Services コンピュータのデフォルト・ファイル・システムの場所が使用されます (MIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1/import_export など)。</p> <p><b>注:</b> Windows 2003 では、ファイル・システム・パスがネットワーク・アクセスが可能な場所である場合は、UNC パスを使用するか、または共有ファイル・システムを同時アクセスに対する読取り/書込みの権限で使用する必要があります。</p> <p><b>注:</b> 分散環境間でデータ移行を可能にするには、filesystem.artifact.path が共有パスである必要があります。</p>
fileSystem.friendlyNames	<p>アーティファクトのファイルを、拡張名(アーティファクト ID と名前の組合せなど)で保管するかどうかを指定します。</p> <p><b>デフォルト値:</b> TRUE</p> <p><b>注:</b> fileSystem.friendlyNames は、Reporting and Analysis および配置メタデータにのみ適用可能です。他の製品のアーティファクトは、常にアーティファクト名を使用して保管されます。</p>

プロパティ	説明
groupcount	<p>グループでの移行されるアーティファクトの数。</p> <p>このオプションは、グループでの移行をサポートしている製品(Planning、Financial Management、Financial Close Management、Performance Management Architect、Reporting and Analysis および FDMEE)で使用可能です。Performance Management Architect および Financial Close Management のアーティファクトは、アーティファクトのサイズや数に関係なく常に1つのグループとして移行されます。</p> <p>デフォルトのグループ数は30です。これは30のグループでアーティファクトが移行されるということです。アーティファクトのタイプ、アーティファクトのサイズ、アーティファクトの数に関するデータに基づいて、移行のパフォーマンスを改善するため、この値を変更できます。</p> <p><b>デフォルト値:</b> -1</p>
MSR.PURGE.EARLIERTO.DAYS	<p>ライフサイクル管理の移行に関連する管理設定。</p> <p>この値より以前の移行は、24時間ごとに実行されるチェックに基づいて、Oracle Hyperion Foundation Services システムの起動時に定期的に削除されます。</p> <p><b>デフォルト値:</b> 30日</p>
report.folder_path	<p>移行ステータスのレポートとアーティファクトの概算レポートが保管されるディレクトリ。</p> <p><b>デフォルト値:</b> ../reports (MIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1/diagnostics/logs/migration/reports)</p>
zip.threshold	<p>最大 ZIP ファイル・サイズのしきい値。</p> <p>エクスポート・コンテンツのサイズがこのしきい値を超えると、エクスポート・コンテンツはフォルダとして保管されます。このサイズは1.8GBを超えることはできません。これより大きいサイズの圧縮およびダウンロードには、ブラウザとJDKの制限があります。</p> <p><b>デフォルト値:</b> 1.8 GB</p>

## ライフサイクル管理のレポート

### サブトピック

- [移行ステータス・レポート](#)
- [アプリケーション監査レポート](#)
- [アーティファクトの変更レポート](#)

**注:** この項で説明するレポートに加えて、Shared Services ではプロビジョニング・レポート、セキュリティ・レポート、および構成レポートも生成されます。これらのレポートについては、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』に説明されています。

# 移行ステータス・レポート

## サブトピック

- [移行ステータスの表示](#)
- [移行データの削除](#)

## 移行ステータスの表示

LCM 管理者は、移行ステータス・レポートを表示してすべての移行のステータスを確認できます。

- **処理中** - 移行の処理中です。
- **完了** - すべてのアーティファクトが正常に移行されました。
- **警告付きで完了** - すべてのアーティファクトが正常に移行されましたが、調査が必要となる可能性がある問題があります。
- **失敗** - 一部のアーティファクトが移行されませんでした。

**注：** 移行のステータスが「警告付きで完了」または「失敗」の場合は、ハイパーリンクをクリックして移行の詳細を確認します。移行の詳細は、「処理中」または「完了」の移行では表示できません。

▶ 移行ステータスを表示するには:

### 1 Shared Services Console を起動します。

[33 ページの「Shared Services Console の起動」](#)を参照してください。

### 2 「管理」から、「移行ステータス・レポート」を選択します。

各移行に関する次の情報を表示できます。

- ユーザー
- ソース
- 宛先
- 開始時間
- 完了時刻
- 期間
- ステータス - 「処理中」、「完了」、「警告付きで完了」または「失敗」

**注：** ソース - 宛先列の進捗インディケータには、「処理中」の移行で処理されるアーティファクト数が示されます。

### 3 移行のステータスが「警告付きで完了」または「失敗」の場合は、「ステータス」列のハイパーリンクをクリックすると、次の移行の詳細を確認できます:

- ソースと宛先のアプリケーション
- アーティファクトのパス
- アーティファクト名

- メッセージ・タイプ(エラーまたは警告)
  - メッセージ
- 4 移行ステータス・レポートを再生成するには、「リフレッシュ」をクリックします。
  - 5 移行ステータス・レポートを閉じるには、「取消し」をクリックします。

## 移行データの削除

この機能により、指定した移行データを削除できます。削除できるのは完了した移行と失敗した移行のみです。進行中の移行は削除できません。

▶ 移行データを削除するには:

1 **Shared Services Console** を起動します。

33 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。

2 「管理」から「移行ステータス・レポートの削除」を選択します。

3 「削除」で次の値を指定します:

- -1 - すべての移行データを削除
- 0 - 前日までに行われたすべての移行のデータを削除
- n - 本日から数えて指定日数より前の移行データをすべて削除します。たとえば、2 と入力すると、本日から数えて 2 日より前の移行データがすべて削除されます。(n の値は 999 以下の正の数である必要があります)。

4 指定した移行データを削除するには、「削除」をクリックします。

5 データを削除せずに「削除」ダイアログ・ボックスを閉じるには、「取消し」をクリックします。

## アプリケーション監査レポート

アプリケーション監査レポートはライフサイクル管理機能を使用してインポートまたはエクスポートされたアーティファクトの情報を表示します。Shared Services 管理者のみが、監査レポートを生成および表示できます。LCM 管理者は監査タスクを実行できません。

監査は、監査レポートを生成する前に使用可能にする必要があります。監査を使用可能にするには、Shared Services Console を起動し、「管理」、「監査の構成」の順に選択し、「監査の使用可能」チェック・ボックスを選択します。詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

監査を使用可能にすると、アプリケーション・レベルまたはアプリケーション・グループ・レベルで監査レポートを生成できるようになります。ライフサイクル管理で実行されたすべてのアクションは、アプリケーション監査レポートに記録され、どのアーティファクトが移行され、いつ移行されたかが追跡されます。レポートは外部ファイルにエクスポートできます。



▶ アプリケーション監査レポートを生成するには:

1 **Shared Services Console** を起動します。

33 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。

2 「管理」で「監査レポート」を選択してから、「アプリケーション監査レポート」を選択します。

「アプリケーション監査レポート」が表示されます。

3 レポート・パラメータを入力します:

- 「実行者」 - レポートを生成するユーザーを選択するか、すべてのユーザーを選択します。
- 「実行された期間」 - レポートを実行する期間を選択します。
  - 「5 日」 - 過去 5 日間のイベント
  - 「10 日」 - 過去 10 日間のイベント
  - 「15 日」 - 過去 15 日間のイベント
  - 「20 日」 - 過去 20 日間のイベント
  - 「25 日」 - 過去 25 日間のイベント
  - 「30 日」 - 過去 30 日間のイベント
  - 「日付範囲」 - 指定した日付範囲内(指定した日付を含む)のイベント

4 レポートを表示するには、「レポートの表示」をクリックします。

5 レポートを CSV ファイル・フォーマットで表示または保存するには、「エクスポート」をクリックします。

6 レポートを閉じるには「閉じる」をクリックします。

## アーティファクトの変更レポート

アーティファクトの変更レポートでは、EPM System 内のアーティファクトに対して行われた変更を識別します。このレポートには、アプリケーション・グループ、アプリケーション、アーティファクト名、アーティファクト・タイプ、変更されたユーザー、変更日、およびアーティファクト・パスが示されます。アーティファクト変更レポートを作成する場合は、アーティファクト名、アーティファクト・タイプ、変更ユーザー、開始日、終了日の各属性に基づいて結果をフィルタ処理できます。

▶ アーティファクトの変更レポートを生成するには:

1 **Shared Services Console** を起動します。

33 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。

2 「管理」から、「アーティファクトの変更レポート」を選択します。

3 レポート・パラメータを入力します:

- 「アーティファクト名」 - アーティファクトの名前。特定のアーティファクト名、または名前の一部を入力できます。たとえば、Cost\*と入力して、Cost で始まるすべてのデータ・フォームを検索できます。

これはオプションのパラメータです。アーティファクト名を入力しない場合は、すべてのアーティファクトが含まれます。

- 「アーティファクト・タイプ」 - アーティファクトのタイプ。

これはオプションのパラメータです。アーティファクト・タイプを入力しない場合は、すべてのアーティファクト・タイプが含まれます。

- 「変更者」 - アーティファクトを変更した人のユーザー ID。

これはオプションのパラメータです。ユーザー ID を入力しない場合は、アーティファクトを変更したすべてのユーザーが含まれます。

- 「開始日」 - レポートの開始日。デフォルトの日付は昨日の日付です。
- 「終了日」 - レポートの終了日。デフォルトの日付は今日の日付です。

**ヒント：** 開始日と終了日を変更して、異なる日付範囲を指定できます。たとえば、2年前の開始日を設定して、過去2年間に変更されたアーティファクトを検索できます。

#### 4 レポートに含めるアプリケーションを選択します。

すべてのアプリケーションを選択するには、「すべて」の横にあるチェック・ボックスを選択します。

**注：** 特定のアプリケーションを検索するには、アプリケーションの検索テキスト・ボックスにアプリケーションの名前を入力します。たとえば、アプリケーションが複数あり、Essbase アプリケーションのみを参照する場合は、Essbase と入力して、表示されるアプリケーションを Essbase アプリケーションのみに絞り込むことができます。

#### 5 「レポート作成」をクリックします。

#### 6 レポートが生成された後、次のいずれかのオプションを選択します。

- 「戻る」：アーティファクトの変更レポートの入力画面に戻り、別のレポート・パラメータを入力します。
- 「印刷プレビュー」：印刷する前に、レポートをプレビューします。レポートをプレビューした後、「印刷」をクリックして、レポートを印刷できます。
- 「CSV にエクスポート」：レポートをカンマ区切り値ファイルにエクスポートします。
- 「閉じる」：アーティファクトの変更レポートを終了します。

**注：** アーティファクトの変更を追跡するためのライフサイクル管理ユーティリティの使用については、[80 ページの「アクティビティの変更レポート」](#)を参照してください。

# 7

## ライフサイクル管理ユーティリティの使用法

### この章の内容

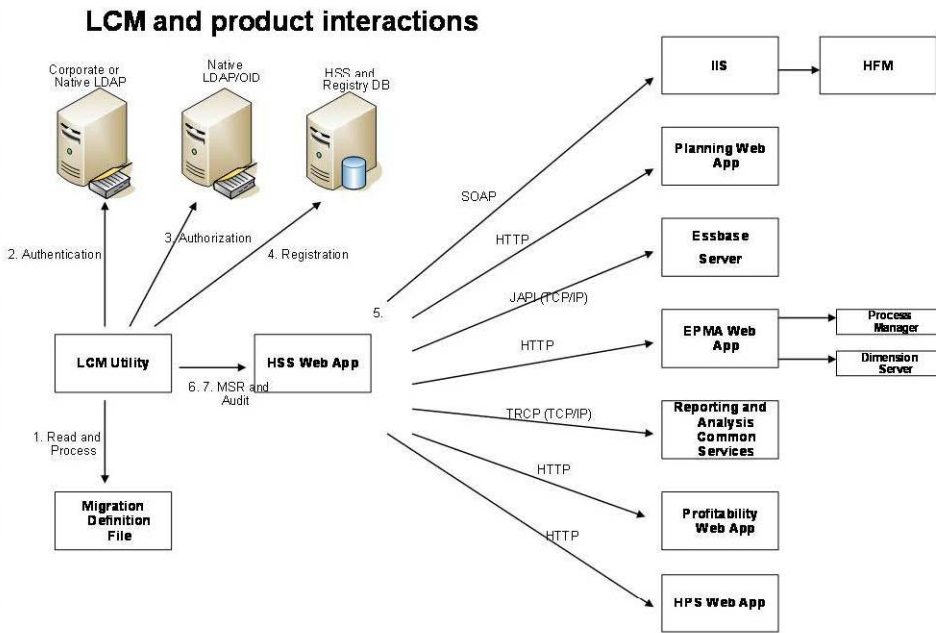
ライフサイクル管理ユーティリティのプロセス .....	67
ライフサイクル管理ユーティリティの機能 .....	69
ライフサイクル管理ユーティリティのインストール.....	69
移行定義の使用 .....	69
ライフサイクル管理ユーティリティの使用法.....	75
追加のコマンドライン・ユーティリティ.....	80

## ライフサイクル管理ユーティリティのプロセス

ライフサイクル管理ユーティリティは、製品環境およびオペレーティング・システム間でのアーティファクトの移行をサポートするコマンドライン・ユーティリティです。このユーティリティにより、アプリケーション全体または個別のアーティファクトを、ソースから宛先に移行する代替手段が提供されます。

図 4 は、サービスとライフサイクル管理ユーティリティの間の通信フローを示しています:

図 4 ライフサイクル管理と製品のやりとり



1. **移行定義ファイルの処理:** ライフサイクル管理ユーティリティは、最初に移行定義ファイルを読み取り、処理します。
2. **認証:** 次に、ライフサイクル管理ユーティリティは、Shared Services とともに使用するために構成された、企業 LDAP ディレクトリまたは他のプロバイダいずれかのユーザーを認証します。Shared Services レジストリ・データベースは、初期化中は実行されている必要があります。
3. **許可:** 認証後、ライフサイクル管理ユーティリティは、Shared Services のネイティブ・ディレクトリに問い合せて、ユーザーの役割が要求された操作の実行を許可しているかを確認します。
4. **登録情報:** ライフサイクル管理ユーティリティは、Shared Services レジストリおよび Shared Services データベースと通信し、EPM System アプリケーションの登録情報を取得します。
5. **各アプリケーション移行要求の処理:** ライフサイクル管理ユーティリティは、適切な EPM System アプリケーションに問い合せて各インポートまたはエクスポート操作を処理します。
6. **監査:** ライフサイクル管理ユーティリティは、監査が有効な場合、HTTP を介して Shared Services Java Web アプリケーションに問い合せて、各ライフサイクル管理アクションを監査します。
7. **ステータス・レポートのパブリッシュ:** ライフサイクル管理ユーティリティは、HTTP を介して Shared Services Java Web アプリケーションに問い合せて、移行ステータス・レポートをパブリッシュします。

## ライフサイクル管理ユーティリティの機能

- 1つ以上の EPM System アプリケーションまたはアプリケーションのアーティファクトを、ある環境から他の環境に移行する
- ユーザーは Windows タスク スケジューラまたは Oracle Enterprise Manager などのサード・パーティのスケジューリング・サービスを使用して、スケジュールされた移行を実行できる
- ユーティリティへの保護されたアクセスを保証する  
ライフサイクル管理の操作を行えるのは、LCM 管理者の役割を割り当てられたユーザーのみです。
- 国際データの移行をサポート
- トラブルシューティングを容易にするためのエラーの記録

**注：** ライフサイクル管理ユーティリティの要件は、[19 ページの「ライフサイクル管理の要件」](#)を参照してください。

## ライフサイクル管理ユーティリティのインストール

ライフサイクル管理ユーティリティは Shared Services のインストール時にインストールされます。Shared Services のインストールとアプリケーション・サーバーへの配置については、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。

ライフサイクル管理ユーティリティのコンポーネントは EPM\_ORACLE\_HOME/common/utilities/LCM/11.1.2.0 にインストールされます。コンポーネントはここにインストールされますが、ユーティリティは MIDDLEWARE\_HOME/user\_projects/epmsystem1/bin から実行する必要があります。

## 移行定義の使用

サブトピック

- [移行定義の作成](#)
- [移行定義ファイルの XML スキーマ](#)
- [移行定義ファイルの要素](#)
- [サンプルの移行定義ファイル](#)

## 移行定義の作成

移行するアーティファクトは、移行定義で定義されている必要があります。移行定義について次のことに注意してください：

- インポート操作またはエクスポートの実行時に、移行定義が Shared Services Console で作成されます。

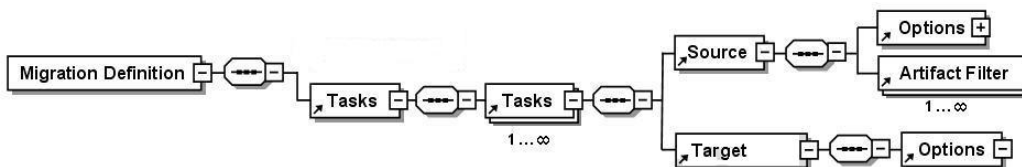
- アーティファクトをエクスポートすると、ライフサイクル管理によって、エクスポート用とインポート用の2つのXMLファイルが作成されます。これらのXMLファイルは、ライフサイクル管理ユーティリティの移行定義ファイルに使用できます。
- エクスポート操作を実行するときに、そのエクスポートおよび対応するインポート用のMDFファイルが、ルート・フォルダの下のファイル・システム・フォルダに自動的に作成されます。

## 移行定義ファイルのXMLスキーマ

移行定義のひな型となるサンプル・ファイルは `EPM_ORACLE_HOME/common/utilities/LCM/11.1.2.0/Sample` にあります。

図5で、移行定義のXMLスキーマのアウトラインを説明しています。

図5 移行定義ファイルのXMLスキーマのアウトライン



## 移行定義ファイルの要素

### サブトピック

- [ロケール](#)
- [ユーザーおよびパスワード](#)
- [タスク](#)

ここでは、移行定義ファイルのXMLスキーマで使用される要素および属性について説明します。

### ロケール

移行定義ファイルの作成時に、サーバーのロケールを定義します。このロケールには、すべてのエラー・メッセージとコンソール・メッセージが含まれます。

### ユーザーおよびパスワード

移行定義ファイルを実行するユーザーのユーザー名と暗号化されたパスワードを定義します。

## タスク

移行中に完了するタスクを定義します。移行定義ファイルに定義されているタスクは、ソース、宛先、移行するアーティファクトによって異なります。各タスクには、少なくともソース、宛先およびアーティファクト・タグが含まれます。

複数のソースと宛先がある場合は、ソースと宛先の組合せごとに少なくともタスクを1つずつ定義する必要があります。たとえば、ファイル・システムへのアーティファクトの抽出はタスク1として定義されます。ファイル・システムからアプリケーションへのアーティファクトのロードは、タスク2として定義されます。

**注：** デフォルトでは、タスクが失敗しても、ライフサイクル管理ユーティリティは次のタスクを続行します。タスクのソースとターゲットの接続の検証は、タスクが実行されている場合にのみ行われ、タスクの実行開始前には行われません。

タスクには次の要素が含まれます：

- ソース
- ターゲット
- アーティファクト
- オプション

## ソース

移行するソースを定義します。タスクごとにソースと宛先をそれぞれ1つずつ定義する必要があります。

表 6 ソース属性

属性	説明
application	アプリケーションが登録される名前。アプリケーションの名前は Shared Services Console に表示されます。 <b>例:</b> HAVAAPP1
filePath	アーティファクトが格納されるファイル・システム上のディレクトリ。 <b>例:</b> filePath="/Essbase.Sample.Basic" <b>注意:</b> MDF ファイルが UI から生成される場合、パスは作業フォルダへの相対パスです。 .mdf ファイルが作業フォルダに存在しない場合、 -b コマンドライン引数を使用して、ファイル・システム・パスが設定されている場所に相対するベース・パスを使用します。

属性	説明
product	<p>Shared Services に登録するアプリケーションの製品コード。</p> <p><b>例:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● HUB (Shared Services)</li> <li>● CALC (Calculation Manager)</li> <li>● ESBAPP (Essbase)</li> <li>● BPM (Essbase Studio)</li> <li>● AIF (FDMEE)</li> <li>● HFM (Financial Management)</li> <li>● FCC (Financial Close Management)</li> <li>● BPMA (Performance Management Architect)</li> <li>● HPS (Performance Scorecard)</li> <li>● HP (Planning)</li> <li>● HPM (Profitability and Cost Management)</li> <li>● HAVA (Reporting and Analysis)</li> </ul>
project	<p>アプリケーションが属する Shared Services アプリケーション・グループの名前。プロジェクト名は Shared Services Console に表示されます。</p> <p><b>例:</b> DevBIPlus_Proj</p>
type	<p>接続タイプ:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● FileSystem(ファイル・システムの接続用)</li> <li>● Application(Shared Services で登録されているアプリケーションの接続用)</li> </ul>

## ターゲット

移行の宛先を定義します。タスクごとに1つの宛先を定義する必要があります。

表7 ターゲット属性

属性	説明
application	<p>アプリケーションが登録される名前。アプリケーションの名前は Shared Services Console に表示されます。</p> <p><b>例:</b> HAVAAPP1</p>
filePath	<p>アーティファクトが格納されるファイル・システム上のディレクトリ。</p> <p><b>例:</b> filePath="/Essbase.Sample.Basic"</p> <p><b>注意:</b> MDF ファイルが UI から生成される場合、パスは作業フォルダへの相対パスです。MDF ファイルが作業フォルダに存在しない場合、-b コマンドライン引数を使用して、ファイル・システム・パスが設定されている場所に相対するベース・パスを使用します。</p>



属性	説明
product	<p>Shared Services に登録するアプリケーションの製品コード。</p> <p><b>例:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● HUB (Shared Services)</li> <li>● HAVA (Reporting and Analysis)</li> <li>● ESBAPP (Essbase)</li> <li>● HFM (Financial Management)</li> <li>● HP (Planning)</li> <li>● BPMA (Performance Management Architect)</li> <li>● CALC (Calculation Manager)</li> <li>● HPS (Performance Scorecard)</li> <li>● HPM (Profitability and Cost Management)</li> </ul>
project	<p>アプリケーションが属する Shared Services アプリケーション・グループの名前。プロジェクト名は Shared Services Console に表示されます。</p> <p><b>例:</b> DevBIPlus_Proj</p>

## アーティファクト

現行の移行に使用されるフィルタです。

表 8 アーティファクト属性

属性	説明
parentPath	<p>移行するアーティファクトまたはデータが保管されている最上位のディレクトリ。製品ディレクトリ構造については、このガイドの巻末付録を参照してください。</p> <p><b>例:</b> /Data Analysis &amp; Report Creation</p> <p><b>注意</b> 親のパス・ディレクトリにアンパサンド(&amp;)文字が含まれている場合は、移行定義ファイルでは&amp;に置き換えます(次の例を参照)。</p> <p><b>注:</b> recursive="true"である場合は、このディレクトリ内のサブディレクトリに含まれているすべてのアーティファクトがインポートされます。</p> <p><b>注:</b> pattern 属性は、すべての製品に必要です。</p>
pattern	<p>アーティファクトの選択基準。</p> <p>インポートするアーティファクトの名前を指定するか、*(アスタリスク)を使用してフィルタ条件に一致するすべてのアーティファクトをインポートします。</p> <p><b>例:</b> *</p> <p><b>注:</b> pattern 属性は、すべての製品に必要です。</p>
recursive	<p>サブディレクトリに保管されているアーティファクトで移行を行う必要があるかどうか。</p> <p><b>例:</b> true</p> <p><b>注:</b> recursive 属性はオプションです。</p>

## オプション

オプションは製品に固有です。設定可能なインポートとエクスポートのオプションについては、このガイドの巻末付録を参照してください。ソースまたは宛先でオプションを解釈することによって、移行対象のアーティファクトが把握されません。

オプションが設定されていない場合は、Shared Services レジストリに設定されているデフォルトのオプションが使用されます。

表 9 オプション属性

属性	説明
option	Shared Services レジストリに定義されているオプション名のオーバーライドに使用する名前。 例: ExportJobOutput
value	Shared Services レジストリに定義されているオプション値のオーバーライドに使用する値。 例: true

## サンプルの移行定義ファイル

次にサンプル移行定義ファイルを示します。構造または構文が変更されると、移行中にエラーが発生します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package>
<LOCALE>en_US</LOCALE>
<User name="admin" password="" />
  <Task>
    <Source type="Application" product="HUB" project="Foundation" application="Shared
Services" />
    <Target type="FileSystem" filePath="/folder/HUB.Shared Services" />
    <Options option="GroupFilter" Value="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Native Directory" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Taskflows" pattern="*" />
  </Task>
  <Task>
    <Source type="FileSystem" filePath="/folder/HUB.Shared Services" />
    <Target type="Application" product="HUB" project="Foundation" application="Shared
Services" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Native Directory" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Taskflows" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

# ライフサイクル管理ユーティリティの使用方 法

## サブトピック

- [概要](#)
- [移行を開始する前に](#)
- [ライフサイクル管理ユーティリティの実行](#)
- [コマンドライン引数](#)

## 概要

ライフサイクル管理ユーティリティには次のオプションがあります:

- ファイル・システムを対象としたアーティファクトの移行
- 最後のエクスポート時刻以降に変更されたアーティファクトのリスト
- エクスポートされたコンテンツで変更されたアーティファクトのリスト
- EPM System 環境での変更内容のリスト

**注:** 移行時に発生するエラーは、logging.xml(MIDDLEWARE\_HOME/  
user\_projects/epmsystem1/Config/FoundationServices ディレクトリ  
内)および log.directory プロパティで定義されます。移行プロセス中に発  
生した問題は、エラー・ログを監視して把握します。

## 移行を開始する前に

ライフサイクル管理ユーティリティを使用して移行を開始する前に、次を行いま  
す:

- Shared Services が実行していることを確認します。
- 宛先環境をバックアップします。
- 移行定義を作成します。
- **オプション:** 移行に使用するプロパティ・ファイルを変更します。

## ライフサイクル管理ユーティリティの実行

▶ ライフサイクル管理ユーティリティを実行するには:

- 1 移行する場合は、宛先環境をバックアップしてください。

Oracle Enterprise Performance Management System Backup and Recovery Guide を参  
照してください。

- 2 コマンド・プロンプト・ウィンドウを開きます。
- 3 ディレクトリを Utility.bat (Windows)または Utility.sh (UNIX)の場所に変更し  
ます。たとえば、MIDDLEWARE\_HOME/user\_projects/epmsystem1/bin です。

- 4 コマンド・プロンプトで次のテキストを入力して、ライフサイクル管理ユーティリティを実行します。

```
Utility.bat c:/lcm/lcmdefinition.xml
```

c:/lcm/lcmdefinition.xml は、移行定義ファイルがある場所です

## Foundation Services 以外のマシンからライフサイクル管理ユーティリティを実行

EPM System で、Oracle Hyperion Foundation Services が構成されているマシン以外で、ライフサイクル管理ユーティリティの移行を実行できるのは、EPM System 製品が分散 EPM System 構成の一部として構成されているマシンのみです。ライフサイクル管理ユーティリティを使用した移行は、EPM System 製品がインストールされていないスタンドアロンのクライアント・マシンからは実行できません。

- ▶ Foundation Services 以外のマシンからライフサイクル管理ユーティリティを実行するには:

- 1 Utility.bat (Windows)または Utility.sh (UNIX)を EPM\_ORACLE\_HOME/common/utilities/LCM/11.1.2.0/bin から MIDDLEWARE\_HOME/user\_projects/epmsystem1/bin にコピーします。
- 2 MIDDLEWARE\_HOME/user\_projects/epmsystem1/bin に移動し、Utility.bat または Utility.sh を実行します。

## コマンドライン引数

### サブトピック

- [-b]: ベース・パスを指定します
- [-ls]: EPM System のコンテンツのリスト
- [-ls -ms]: 最終エクスポート時間以降に変更されたアーティファクトのリスト
- [-ls -lmu ユーザー名]: エクスポートされたコンテンツでユーザーによって変更されたアーティファクトのリスト

### [-b]: ベース・パスを指定します

[-b]引数は、ファイル・システム・パスが設定されている場所に相対するベース・パスを使用するようライフサイクル管理ユーティリティに指示します(ファイル・システムは、すべてのエクスポートとインポートが保管される場所です)。

```
utility.bat c:/lcm/lcmdefinition.xml [-b path]
```

指定されるパスは、現在の作業ディレクトリに対する絶対パスまたは相対パスです(また、絶対パスに対して“.”および“..”も含められます)。ベース・パスが指定されていない場合は、MDF ファイルのディレクトリの場所が使用されます(このディレクトリは、ライフサイクル管理ユーティリティが存在するディレクトリとはかぎりません)。

次に例を示します:

```
utility.bat c:\import_export\HPFullApplicationSuite\Import.xml
utility.bat c:\import.xml -b c:\Oracle\Middleware\user_projects
\epmsystem1\import_export\HPFullApplicationSuite
```

**注：** 指定されたパスが存在しない場合、ライフサイクル管理でエラーが表示されます。

次に、エクスポートされた zip コンテンツ内に存在する MDF ファイルを指定する例を示します:

```
utility.bat c:\Oracle\Middleware\user_projects
\epmsystem1\import_export\SS1.zip\Export.xml
utility.bat c:\Oracle\Middleware\user_projects
\epmsystem1\import_export\SS1.zip\HSS-Shared Services\Import.xml
```

## **[-ls]: EPM System のコンテンツのリスト**

[-ls] 引数は、移行定義ファイルによって定義された移行のアーティファクトをリストします。ソース・システムとターゲット・システム両方のアーティファクトをリストします。たとえばエクスポート MDF では、ソースが EPM System アプリケーションで、ターゲットがファイル・システムです。

Windows:

```
utility.bat importMDF.xml -ls
utility.bat exportMDF.xml -ls
```

UNIX:

```
utility.sh importMDF.xml -ls
utility.sh exportMDF.xml -ls
```

結果の出力は 2 つのファイルで、1 つはソース、もう 1 つは宛先に関するものです:

- <mdf name>\_application name.txt
- <mdf name>\_file system folder name.txt

サード・パーティのファイル比較ユーティリティを使用して出力を比較できます。これにより、移行の成功を確認できます。

出力ファイルの詳細:

- アーティファクト名
- アーティファクト・タイプ
- パス
- コンテンツ・サマリーのサマリー  
コンテンツ・サマリーの例:

```
CONNECTION NAME = AppConnection2
CONNECTION TYPE = Application
```

```
APPLICATION RESOURCE DETAILS -
APPLICATION ID - 1111
PRODUCT NAME - Hyperion Shared Services
PRODUCT CODE - HUB
PRODUCT VERSION - 11.1.2.2
PROJECT NAME - Foundation
```

```
TOTAL ARTIFACT: 48
Aggregated Roles      1  (artifact count by type)
Assigned Roles        15
Groups                1
Process Definition    15
Taskflow ACL          15
Users                 1
```

出力ファイルは、MDF ファイルと同じパスに作成され、同じ名前の既存のファイルを置換します。出力ファイルのパスは次のように指定できます:

```
utility.sh c:\importMDF.xml -ls -p c:\compare\
```

複数のタスクがある MDF の場合、タスクごとに異なるリスト構造セットが作成され、ファイルの先頭にタスク番号が付きます:

- <mdf name>\_application name\_<tasknumber>.txt
- <mdf name>\_file system folder name\_<tasknumber>.txt

1. -ls -ms:最後のエクスポート時刻以降に変更されたアーティファクトをリストする場合  
2. -ls -lmu "ユーザー名":エクスポートされたコンテンツでユーザーによって変更されたすべてのアーティファクトをリストする場合。

## **[-ls -ms]: 最終エクスポート時間以降に変更されたアーティファクトのリスト**

[-ls -ms]引数は、移行定義ファイルによって定義された最終移行後にシステムで変更されたアーティファクトをリストします。これらのアーティファクトは、Shared Services Console にリストされます。

エクスポート MDF ファイル(ソース = アプリケーション、ターゲット = ファイル・システム・コンテンツ)の場合、[-ls -ms]によって、最終変更日がファイル・システム・コンテンツのアーティファクトの日付と異なっているアプリケーション内のアーティファクトがリストされます。

インポート MDF ファイル(ソース = ファイル・システム・コンテンツ、ターゲット = アプリケーション)では、[-ls -ms]によって、最終変更日がアプリケーションのアーティファクトの日付とファイル・システム内で異なっているアーティファクトがリストされます。

**注：** アーティファクトの変更日を使用できない場合、そのアーティファクトはリストされません。

Windows:

```
utility.bat c:\exportMDF.xml -ls -ms
```

UNIX:

```
utility.sh /importMDF.xml -ls -ms
```

コンソールの出力フォーマット:

アーティファクト・タイプ アーティファクト 最終変更日

## **[-ls -lmu ユーザー名]: エクスポートされたコンテンツでユーザーによって変更されたアーティファクトのリスト**

[-ls -lmu] 引数は、特定のユーザーによって変更されたアーティファクトをリストします。

エクスポート MDF ファイル(ソース = アプリケーション、ターゲット = ファイル・システム・コンテンツ)では、ライフサイクル管理ユーティリティによって、変更者名がファイル・システム・リストのアーティファクトと照合されます。

インポート MDF ファイル(ソース = ファイル・システム・コンテンツ、ターゲット = アプリケーション)では、ライフサイクル管理ユーティリティによって、変更者名が製品リストのアーティファクトと照合されます。

Windows:

```
utility.bat c:\exportMDF.xml -ls -lmu "ユーザー"
```

UNIX:

```
utility.sh /importMDF.xml -ls -lmu "ユーザー"
```

コンソールの出力フォーマット:

アーティファクト・タイプ アーティファクト 変更者

**注：** ユーザー名を指定しない場合、エラーが表示されます。ユーザー名は引用符で囲まれている必要があります。

# 追加のコマンドライン・ユーティリティ

## サブトピック

- [アクティビティの変更レポート](#)
- [EPMExportAll](#)
- [EPMImportAll](#)

## アクティビティの変更レポート

アクティビティの変更レポート・ユーティリティは、特定の期間または特定のアプリケーションについて EPM System 環境で機能的に変更されたアーティファクトを追跡するレポートを生成します。

Windows:

```
acr.bat input.properties -<日数> -app<アプリケーション名>
```

UNIX:

```
acr.sh input.properties file -d<日数> -app<アプリケーション名>
```

パラメータ:

- `input.properties`: ユーザー名とパスワードを含むプロパティ・ファイル。  
`input.properties` の内容は次のとおりです:

```
User=admin  
Password=password
```

- `-d`: 日数。値は次のとおりです:
  - `-X = x` より少ない日数  
たとえば、`-1` では、最終日に変更されたアーティファクトのレポートが生成されます。
  - `+X = x` より多い日数  
たとえば、`+3` では、3 日より前に変更されたアーティファクトのレポートが生成されます。
- `-app`: アプリケーション名
  - アプリケーション表示名 = このアプリケーションのみ
  - \*または ALL = すべてのアプリケーション。

`[-acr]` コマンドからの出力は、`Reports` という名前のフォルダの、ライフサイクル管理のデフォルトのファイル・システムの場所に生成されます。レポート名のフォーマットは、`acr_mm_dd_yyyy_hh_mm_ss.html` です。

**注:** `Shared Services Console` を使用して EPM System 環境でアーティファクトの変更を追跡する方法の詳細は、[65 ページの「アーティファクトの変更レポート」](#)を参照してください。



## EPMExportAll

EPMExportAll ユーティリティは、環境内のすべてのアプリケーションをクローニングします。

EPMExportAll を使用する場合は、次のことに注意してください:

- すべてのアプリケーションが、1つのフォルダにエクスポートされます。
- LCM 対応のアプリケーションのみがエクスポートされます。
- 環境のバックアップまたはスナップショットとして使用するこのタスクは、自動化できます。

EPMExportAll では、入力としてプロパティ・ファイル(input.properties)を使用します。input.properties ファイルには、ユーザー名とパスワードが含まれます。

例:

```
user=admin
password=
password
```

Windows:

```
epm_cloneexport.bat input.properties
```

UNIX:

```
epm_cloneexport.sh input.properties
```

epm\_cloneexport.bat/sh コマンドからの出力は、ライフサイクル管理のデフォルトのファイル・システムの場所に生成されます。エクスポート MDF ファイルとともに EPM\_CloneExport フォルダが作成されます。

## EPMImportAll

EPMImportAll ユーティリティは、EPMExportAll でクローニングされたすべてのアプリケーションを別の環境にインポートします。

EPMImportAll を使用する場合は、次の点を考慮してください。

- EPMImportAll は、**Planning、Financial Management** および **Profitability and Cost Management** のアプリケーションが存在しない環境でのみ実行できます。
- EPMExportAll フォルダ内のクローニングされたエクスポート・コンテンツを、ソース環境からターゲット環境の同じファイル・システム・フォルダの場所にコピーする必要があります。
- デフォルトでは、EPMImportAll は、EPMExportAll フォルダの import.xml を使用してインポートを実行します。

EPMImportAll では、入力としてプロパティ・ファイル(input.properties)を使用します。input.properties ファイルには、ユーザー名とパスワードが含まれます。

例:

```
user=admin  
password=  
password
```

Windows:

```
epm_cloneimport.bat input.properties
```

UNIX:

```
epm_cloneimport.sh input.properties
```

epm\_cloneimport.bat/sh コマンドからの出力は、ライフサイクル管理のデフォルトのファイル・システムの場所に生成されます。インポート MDF ファイルとともに EPM\_CloneExport フォルダが作成されます。

# A

## 配置メタデータとライフサイクル管理

### この付録の内容

配置メタデータのアーティファクトについて .....	83
配置メタデータの役割の要件 .....	84
配置メタデータのエクスポートおよびインポートの前提条件 .....	84
配置メタデータのアーティファクト・リスト .....	84
配置メタデータの移行に関する考慮事項.....	85
配置メタデータのエクスポートおよびインポートのオプション.....	86
ライフサイクル管理のログ・ファイル.....	86

## 配置メタデータのアーティファクトについて

配置メタデータのアーティファクトには、配置の物理サーバー名と構成情報が含まれます。この情報は、ある環境から別の環境(たとえば、Dev から Test)に移行しないでください。このデータを移行すると、宛先環境の構成情報が破損し、システムが使用できなくなります。配置メタデータのアーティファクトのエクスポートおよびインポートの使用事例は、構成の変更を監視するためのバージョン・コントロール・システムへの構成情報のアーカイブのみです。

ライフサイクル管理は、次の配置メタデータのアーティファクト・タイプを編集する場合に使用できます:

- 登録: 任意の環境でアプリケーションの構成情報を編集できるようにする登録アーティファクト(たとえば、製品を非 SSL から SSL に更新する場合は、登録インスタンス・ファイルでコールバック URL を編集する必要があります)。
- Shared Services レジストリ: Oracle Hyperion Shared Services レジストリのアーティファクトにより、レジストリのコンテンツを表示したり、レジストリ・データを編集可能なファイル・システムにエクスポートして再びインポートしたりできます。

**注意** ある環境から他の環境に配置メタデータのアーティファクトを移行するのにライフサイクル管理を使用しないでください。ライフサイクル管理は、配置メタデータのアーティファクトをファイル・システムにエクスポートする場合に使用します。エクスポート後にテキスト・エディタを使用してアーティファクトを編集したら、ライフサイクル管理を使用して編集済のアーティファクトを Shared Services にインポートし直します。

配置メタデータのアーティファクトについては、[84 ページの「配置メタデータのアーティファクト・リスト」](#)を参照してください。

## 配置メタデータの役割の要件

配置メタデータのライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります:

- LCM 管理者
- Shared Services 管理者

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

## 配置メタデータのエクスポートおよびインポートの前提条件

- Shared Services および EPM System 製品をインストールして構成し、これらが実行中であることを確認します。Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに、LCM 管理者および Shared Services 管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

## 配置メタデータのアーティファクト・リスト

### サブトピック

- [登録アーティファクト・リストについて](#)
- [登録アーティファクト](#)
- [Shared Services レジストリのアーティファクト](#)

配置メタデータのアーティファクトは、Shared Services Console 内の Foundation アプリケーション・グループに一覧表示されます。配置メタデータのアーティファクトを表示するユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります:

- LCM 管理者
- Shared Services 管理者

**注:** Shared Services Console に表示されるアーティファクトは、実装ごとに異なります。

## 登録アーティファクト・リストについて

アーティファクト・リストについて次のことに注意してください:

- アーティファクト - アーティファクト名
- 説明 - アーティファクトの説明

- **最終変更時間** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトがインポートされた時間を反映します。アーティファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終変更ユーザー** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーティファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能** - 「はい」の場合、アーティファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーティファクトは製品内でのみ編集できます。
- **依存** - アーティファクトの依存関係を一覧表示します

## 登録アーティファクト

「登録」ディレクトリには、製品、アプリケーションおよびアプリケーション・グループのアーティファクトが含まれます。

表 10 登録アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
製品	EPM System では、Planning や Essbase などのアプリケーション・タイプ	はい	いいえ	はい - XML	なし
アプリケーション	Shared Services に登録されている EPM System 製品のインスタンス	はい	いいえ	はい - XML	なし

## Shared Services レジストリのアーティファクト

Shared Services レジストリ・ディレクトリには、Shared Services レジストリのプロパティと以前のリリースからの製品レジストリのアーティファクトが含まれます。

## 配置メタデータの移行に関する考慮事項

- 配置メタデータの編集されたデータベース・パスワードをインポートする場合、プロパティ名の前に"ENCR"を付けてパスワードが暗号化された形式で格納されるようにします。  
たとえば、`component.Properties` の対応する行を次のように編集します:  
`ENCR:key1=plaintext`
- LCM 管理者および LCM デザイナは、配置メタデータ情報をエクスポートまたはインポートできません。

## 配置メタデータのエクスポートおよびインポートのオプション

Shared Services レジストリのアーティファクトにはエクスポートまたはインポートのオプションはありません。配置メタデータ・アーティファクトはすべて、ファイル・システムにエクスポート、またはファイル・システムからインポートする必要があります。デフォルトでは、配置メタデータのアーティファクトは更新またはマージされます。

## ライフサイクル管理のログ・ファイル

配置メタデータのライフサイクル管理のログ・ファイルについては、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide に記載されています。

# B

## Calculation Manager とライフ サイクル管理

### この付録の内容

Calculation Manager のアーティファクトについて.....	87
Calculation Manager の役割の要件.....	87
Calculation Manager の移行の前提条件.....	88
Calculation Manager のアーティファクト・リスト.....	88
Calculation Manager アプリケーションの移行および製品間のアーティファクト の依存関係.....	90
移行におけるエクスポートとインポートのオプション.....	91
サンプルの移行定義ファイル.....	91
ライフサイクル管理のログ・ファイル.....	92

## Calculation Manager のアーティファクトについて

ライフサイクル管理は、次の Calculation Manager のアーティファクト・タイプを移行する場合に使用します:

- ルール
- ルール・セット
- 式
- スクリプト
- テンプレート

Calculation Manager のアーティファクトについては、[88 ページ](#)の「[Calculation Manager のアーティファクト・リスト](#)」を参照してください。

## Calculation Manager の役割の要件

Calculation Manager のライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります:

- LCM 管理者
- Calculation Manager 管理者
- アプリケーション・レベルの役割

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

## Calculation Manager の移行の前提条件

- Shared Services および Calculation Manager をインストールして構成し、これらが実行中であることを確認します。Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに LCM 管理者の役割、Calculation Manager 管理者の役割およびアプリケーション・レベルの役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。
- 製品固有のアーティファクトを移行する前に、Shared Services のネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループおよびプロビジョニング)を移行します。56 ページの「ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行」を参照してください。Shared Services ネイティブ・ディレクトリのアーティファクト・リストについては、付録 M「Shared Services とライフサイクル管理」を参照してください。
- Financial Management Performance Management Architect または Planning Performance Management Architect アプリケーションのビュー(およびプラン・タイプ)を移行し、アプリケーション名がソースのアプリケーション名と同じであることを確認します。Performance Management Architect のアーティファクトの詳細は、付録 H「Performance Management Architect とライフサイクル管理」を参照してください。
- Planning、Financial Management および Essbase アプリケーションは、そのアーティファクトを Calculation Manager にインポートする前に、ソースでの名前と同じ名前で作成される必要があります。

## Calculation Manager のアーティファクト・リスト

### サブトピック

- [アーティファクト・リストについて](#)
- [ルールのアーティファクト](#)
- [ルール・セットのアーティファクト](#)
- [式のアーティファクト](#)
- [スクリプトのアーティファクト](#)
- [テンプレートのアーティファクト](#)

Calculation Manager アーティファクトは、Shared Services Console 内の Foundation アプリケーション・グループの「Calculation Manager」ノードにリストされます。



## アーティファクト・リストについて

アーティファクト・リストについて次のことに注意してください:

- **アーティファクト** - アーティファクト名
- **説明** - アーティファクトの説明
- **最終変更時間** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトがインポートされた時間を反映します。アーティファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終変更ユーザー** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーティファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能** - 「はい」の場合、アーティファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーティファクトは製品内でのみ編集できます。
- **依存** - アーティファクトの依存関係を一覧表示します

## ルールのアーティファクト

表 11 ルールのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
ルール	コンポーネントでグループ化されたテンプレートと計算を含めることのできるオブジェクト	はい	はい	はい - XML	なし

## ルール・セットのアーティファクト

表 12 ルール・セットのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
ルール・セット	同時または連続の計算が可能なルールおよびその他のルール・セットを含むオブジェクト	はい	はい	はい - XML	なし

## 式のアーティファクト

表 13 式のアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
式	ビジネス・ルールおよびテンプレート内で使用でき、メンバー、関数および条件文(オプション)を使用してユーザーが記述または設計できる計算文を含むコンポーネント	はい	はい	はい - XML	なし

## スクリプトのアーティファクト

表 14 スクリプトのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
スクリプト	ビジネス・ルールおよびテンプレート内で使用でき、Visual Basic(Financial Management の場合)または Essbase(Planning および Essbase の場合)の計算スクリプト文のみを含むコンポーネント	はい	はい	はい - XML	なし

## テンプレートのアーティファクト

表 15 テンプレートのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
テンプレート	1 回または複数回の計算を実行する、ユーザーが作成したコンポーネント	はい	はい	はい - XML	なし

## Calculation Manager アプリケーションの移行および製品間のアーティファクトの依存関係

Calculation Manager アプリケーションをある環境から他の環境(開発からテストまたはテストから本番環境)に移行する場合は、製品間のアーティファクトの依存関係が存在します。

Calculation Manager には、Calculation Manager 固有のアーティファクトに加え、次に示す、移行する他の製品からのアーティファクトも必要です。

- Essbase
- クラシック Planning

# 移行におけるエクスポートとインポートのオプション

インポート時に、Calculation Manager アーティファクトは、宛先環境で既存のアーティファクトを置換します。アーティファクトをマージするオプションはありません。

Calculation Manager には、製品固有のエクスポート・オプションおよびインポート・オプションはありません。

## サンプルの移行定義ファイル

Calculation Manager の移行定義ファイルで使用される製品コードは CALC です。

**注：** 移行定義ファイルで正しい構文が使用されていない場合、「MDFファイルのフォーマットが正しくありません」というエラーが表示されます。

### ファイル・システムへのエクスポート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="Application" product="CALC" project="Foundation"
application="Calculation Manager" />
    <Target type="FileSystem" filePath="/CALC-Calculation Manager" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Consolidation" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Essbase" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Planning" pattern="*" />
  ...</Task>
</Package>
```

---

### ファイル・システムからのインポート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="FileSystem" filePath="/CALC-Calculation Manager" />
    <Target type="Application" product="CALC" project="Foundation"
application="Calculation Manager" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Consolidation" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Essbase" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Planning" pattern="*" />
  ...</Task>
</Package>
```

---

## ライフサイクル管理のログ・ファイル

Oracle Hyperion Calculation Manager のライフサイクル管理のログ・ファイルについては、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide に記載されています。



# Essbaseとライフサイクル管理

## この付録の内容

Essbase アーティファクトについて .....	93
Essbase の役割の要件 .....	94
Essbase の移行の前提条件 .....	94
Essbase のアーティファクト・リスト .....	95
Essbase の移行に関する考慮事項 .....	98
Essbase アプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係 .....	98
移行におけるエクスポートとインポートのオプション .....	99
サンプルの移行定義ファイル .....	100
ライフサイクル管理のログ・ファイル .....	100

## Essbase アーティファクトについて

次のタイプの Essbase アーティファクトを移行するには、ライフサイクル管理を使用します:

- 計算スクリプト
- カスタム定義マクロおよび関数
- データ
- データベース・プロパティ
- データベース・アウトライン
- ディスク・ボリューム
- ドリルスルー定義
- Excel ファイル
- ロケーション別名
- レポート・スクリプト
- 規則ファイル
- セキュリティ・フィルタ
- 代替変数
- テーブルスペース
- テキスト・ファイル

Essbase アーティファクトのリストおよび説明については、95 ページの「Essbase のアーティファクト・リスト」を参照してください。

## Essbase の役割の要件

Essbase のライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります:

- LCM 管理者
- サーバー・アクセス
- 計算
- データベース・マネージャ

**注:** Essbase のサーバー・レベルでは、サーバー・アクセスの役割が必要になります。アプリケーション・レベルでは、ソース・アプリケーション・アーティファクトをエクスポートするために計算の役割が必要で、宛先のアプリケーションにインポートするためにデータベース・マネージャの役割が必要になります。

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

## Essbase の移行の前提条件

- Shared Services と Essbase をインストールして構成し、これらが実行されていることを確認します。Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに、LCM 管理者、サーバー・アクセス、計算およびデータベース・マネージャの役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。
- Essbase クラシック・アプリケーションの場合は、セキュリティ・フィルタを移行する前に、Shared Services ネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)を移行する必要があります。56 ページの「ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行」を参照してください。Shared Services ネイティブ・ディレクトリのアーティファクト・リストについては、付録 M「Shared Services とライフサイクル管理」を参照してください。

**注:** Planning または Essbase のライフサイクル管理を使用するには、Essbase で従来のセキュリティ・モードではなく、Shared Services ネイティブ・ディレクトリを使用する必要があります。

- Essbase データをエクスポートする前に、エクスポート・プロセスが完了するまで更新できないようにするため、データベースが読取り専用モードに設定されていることを確認します。

- データ・アーティファクトをエクスポートする前に、必ずデータベースにデータをロードしてください。それ以外の場合、アーティファクトに値がないため、データの移行が失敗します。

## Essbase のアーティファクト・リスト

### サブトピック

- [アーティファクト・リストについて](#)
- [Essbase Server アーティファクト](#)
- [Essbase アプリケーション・アーティファクト](#)
- [Essbase データベース・アーティファクト](#)

Essbase アーティファクト・リストは Shared Services Console の Essbase アプリケーション・グループにリストされます。

**注：** Shared Services Console に表示されるアーティファクトは、実装ごとに異なります。

## アーティファクト・リストについて

アーティファクト・リストについて次のことに注意してください：

- **アーティファクト - アーティファクト名**
- **説明** - アーティファクトの説明
- **最終変更時間** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトがインポートされた時間を反映します。アーティファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終変更ユーザー** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーティファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能** - 「はい」の場合、アーティファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーティファクトは製品内でのみ編集できます。
- **依存** - アーティファクトの依存関係を一覧表示します。たとえば、Essbase のセキュリティ・フィルタ・アーティファクトを移行する場合は、Shared Services のセキュリティ・アーティファクトも移行する必要があります。

## Essbase Server アーティファクト

Essbase Server ディレクトリには、代替変数アーティファクトが含まれています。

表 16 Essbase Server アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
カスタム定義マクロおよび関数	計算関数	いいえ	いいえ	はい - XML	なし
代替変数	定期的に変更される情報のグローバル・ブレースホルダ	いいえ	いいえ	はい - XML	なし

## Essbase アプリケーション・アーティファクト

各アプリケーション・ディレクトリ(Demo など)には、アプリケーション固有の代替変数アーティファクトが含まれています。

表 17 Essbase アプリケーション・アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
カスタム定義マクロおよび関数	計算関数	いいえ	いいえ	はい - XML	なし
代替変数	定期的に変更される情報のグローバル・ブレースホルダ	いいえ	いいえ	はい - XML	なし
テーブルスペース *ASO アプリケーションにのみ適用可能	データ・ストレージの最適化	いいえ	いいえ	はい - XML	なし

## Essbase データベース・アーティファクト

各 Essbase アプリケーションには、1 つ以上のデータベース・ディレクトリ(Sample.Basic など)があります。これらのディレクトリには、データベース固有のアーティファクトが含まれています。

表 18 Essbase データベース・アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
計算スクリプト	データベースの集計方法や集約方法を定義する一連のコマンドです。集計プロセスとは別に、割当てや他の計算ルールを指定するコマンドが計算スクリプトに含まれることもあります。	はい	いいえ	はい - テキスト	なし



アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
データ	入力メンバー・レベルに存在する場合、および親レベルで集約/集計されている場合のすべての保管済データ(たとえば、保管済データ、動的計算および保管)	いいえ	いいえ	はい-テキスト	データベース・アウトライン
データベース・プロパティ	bufferSize、dataCacheSetting、dataFileCacheSetting、indexCacheSetting、sortBufferSize などのプロパティ。	いいえ	いいえ	いいえ	なし
データベース・アウトライン	キューブのアウトライン・ファイル	はい	いいえ	いいえ	なし
ディスク・ボリューム *BSO アプリケーションにのみ適用可能	データ・ストレージの割当て	いいえ	いいえ	はい-XML	なし
ドリルスルー定義	Oracle Hyperion Financial Data Quality Management および FMEE 情報	いいえ	いいえ	はい-XML	なし
Excel ファイル	Essbase のセルに関連付けられる外部スプレッドシート・ファイル	はい	いいえ	はい-テキスト、XML	なし
ロケーション別名	データ・ソースを特定する記述子です。ロケーション別名により、サーバー、アプリケーション、データベース、ユーザー名、およびパスワードが指定されます。ロケーション別名は、DBA のデータベース・レベルで Oracle Essbase Administration Services、ESSCMD、または API を使用して設定されます。	いいえ	いいえ	はい-XML	なし
レポート・スクリプト	プロダクション・レポートを生成する、Essbase レポート・ライター・コマンドを格納したテキスト・ファイル	はい	いいえ	はい-テキスト、XML	なし
規則ファイル	Essbase がデータ・ソースを処理するときにデータ値または次元とメンバー上で行う一連の操作	はい	いいえ	いいえ	なし
セキュリティ・フィルタ	データ値またはセルに対するセキュリティ・アクセスをコントロールする制限	いいえ	いいえ	はい-CSV	Shared Services セキュリティ・アーティファクト
代替変数	定期的に変更される情報のグローバル・プレースホルダ	いいえ	いいえ	はい-XML	なし
テキスト・ファイル	Essbase キューブにデータをロードするためのテキスト・ファイル	はい	いいえ	はい-テキスト	なし

## Essbase の移行に関する考慮事項

- MaxL スクリプト\*.mxl、MaxL\*.msh および MDX スクリプト\*.mdx などの特定のテキスト・ファイルは、ライフサイクル管理を使用して移行できません。
- トリガーはライフサイクル管理を使用して移行できません。かわりに MaxL を使用して移行できます。
- パーティション定義はライフサイクル管理を使用して移行できません。かわりに MaxL を使用して移行できます。
- カスタム定義マクロおよび関数はライフサイクル管理を使用して移行できません。かわりに MaxL を使用して移行できます。
- ライフサイクル管理では、移行する際に宛先で新しいデータベースを作成する必要がないかぎり、BSO アーティファクトから ASO アプリケーションへの移行および ASO アプリケーション・アーティファクトから BSO データベースへの移行は抑制されません。アウトラインにはこの制限があります。したがって、アウトラインに依存するデータ移行も移行できません。
- Oracle Essbase Spreadsheet Add-in では、サーバー・レベルの代替変数がサポートされています。
- Essbase 用のライフサイクル管理を使用するには、Essbase が Shared Services モードになっている必要があります。

Essbase では、宛先アプリケーションに関して次の点を考慮する必要があります。

- Administration Services でアプリケーションを事前に定義することも、import.xml ファイルでアプリケーション名を指定して、CLU から移行を実行することも可能です。
- データベースが存在しない場合、自動的に作成されます
- データ・ソースと宛先の名前が同じである必要があります。
- キューブが存在せず自動的に作成される場合は、上書きフラグが選択されていなくても、アウトラインは強制的に上書きされます。
- 空のアウトラインが存在する場合は、計算スクリプト・ディレクトリの下にあるアーティファクトのリストには、「デフォルトの計算」アーティファクトは表示されません。
- Essbase がターゲット環境にない場合、ライフサイクル管理によってアプリケーション・シェルが作成されます。

## Essbase アプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係

Essbase アプリケーションをある環境から他の環境(開発からテストまたはテストから本番環境)に移行する場合は、製品間のアーティファクトの依存関係が存在します。Essbase では、Essbase 固有のアーティファクトとともに、他の製品からアーティファクトを移行する必要があります。

- Essbase クラシック製品間アーティファクト

- Shared Services セキュリティ(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)
- オプション: Reporting and Analysis (Financial Reporting、Web Analysis、および Interactive Reporting)
- Essbase Oracle Hyperion EPM Architect 製品間アーティファクト:
  - Performance Management Architect
  - Shared Services セキュリティ(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)
  - オプション: Reporting and Analysis (Financial Reporting、Web Analysis、および Interactive Reporting)

## 移行におけるエクスポートとインポートのオプション

### サブトピック

- [移行のエクスポート・オプション](#)
- [移行のインポート・オプション](#)

## 移行のエクスポート・オプション

Essbase には、製品固有のエクスポート・オプションはありません。

## 移行のインポート・オプション

インポート時に、Essbase アーティファクトは、宛先環境で既存のアーティファクトを置換します。アーティファクトをマージするオプションはありません。

Essbase には、次のインポート・オプションがあります:

- 「アーティファクトを上書き」:宛先の場所にあるすべてのアーティファクトを上書きします。
- 「キューブを再構築」:次のオプションから選択します。
  - 「キューブ・データを保持」 - キューブのアウトラインを再構築するときにキューブのデータを保持します。
  - 「キューブ・データを破棄」 - キューブのアウトラインを再構築するときにキューブのデータを破棄します。
  - 「入力データのみ保持」 - キューブのアウトラインを再構築するときに入力データのみを保持します。
  - 「レベル 0 データのみ保持」 - キューブのアウトラインを再構築するときにレベル 0 のデータのみを保持します。

**注：** エクスポートおよびインポートのオプションにアクセスするには、Shared Services Console を起動し、「管理」、「移行オプション」を選択します。

## サンプルの移行定義ファイル

Essbase の移行定義ファイルに使用される製品コードは、ESBAPP です。

**注：** 移行定義ファイルで正しい構文が使用されていない場合、「MDFファイルのフォーマットが正しくありません」というエラーが表示されます。

### ファイル・システムへのエクスポート

---

```
<xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="Application" product="ESBAPP" project="EssbaseCluster-1"
application="Sample" />
    <Target type="FileSystem" filePath="/ESB-Sample" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Configuration" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Databases" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Substitution Variables" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

---

### ファイル・システムからのインポート

---

```
<xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="FileSystem" filePath="/ESB-Sample" />
    <Target type="Application" product="ESBAPP" project="EssbaseCluster-1"
application="Sample" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Configuration" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Databases" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Substitution Variables" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

---

## ライフサイクル管理のログ・ファイル

Essbase のライフサイクル管理のログ・ファイルについては、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide に記載されています。



# Essbase Studioとライフサイクル管理

## この付録の内容

Essbase Studio アーティファクトについて .....	101
Essbase Studio の役割の要件 .....	101
Essbase Studio の移行の前提条件 .....	102
Essbase Studio のアーティファクト・リスト .....	102
Essbase Studio の移行に関する考慮事項 .....	103
Essbase Studio アプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係 .....	103
移行におけるエクスポートとインポートのオプション .....	103
サンプルの移行定義ファイル .....	104
ライフサイクル管理のログ・ファイル .....	105

## Essbase Studio アーティファクトについて

Essbase Studio カタログ・アーティファクトを移行するには、ライフサイクル管理を使用します。カタログ・アーティファクトには、次元、階層、データ・ソース、フォルダ、および Essbase Studio 内のすべてのアーティファクトが含まれます。カタログ・アーティファクトは Shared Services Console のリポジトリ・フォルダの下に一覧表示されます。103 ページの「Essbase Studio アーティファクト」を参照してください。

## Essbase Studio の役割の要件

Essbase Studio のライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります。

- LCM 管理者
- Essbase Studio 管理者

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

## Essbase Studio の移行の前提条件

- Shared Services と Essbase Studio をインストールして構成し、これらが実行されていることを確認します。Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに、LCM 管理者および Essbase Studio 管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。
- Essbase Studio 製品固有のアーティファクトを移行する前に、Shared Services ネイティブ・ディレクトリ・アーティファクト(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)を移行します。56 ページの「ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行」を参照してください。Shared Services ネイティブ・ディレクトリのアーティファクト・リストについては、付録 M「Shared Services とライフサイクル管理」を参照してください。

## Essbase Studio のアーティファクト・リスト

### サブトピック

- [アーティファクト・リストについて](#)
- [Essbase Studio アーティファクト](#)

**注：** Shared Services Console に表示されるアーティファクトは、実装ごとに異なります。

## アーティファクト・リストについて

アーティファクト・リストについて次のことに注意してください:

- **アーティファクト - アーティファクト名**
- **説明** - アーティファクトの説明
- **最終変更時間** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトがインポートされた時間を反映します。アーティファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終変更ユーザー** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーティファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能** - 「はい」の場合、アーティファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーティファクトは製品内でのみ編集できます。

## Essbase Studio アーティファクト

Essbase Studio アーティファクトは、Shared Services Console の「リポジトリ・」フォルダの下に「カタログ」と呼ばれる 1 つのアーティファクトにパッケージ化されます。

表 19 Essbase Studio アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
カタログ	次元、階層、データ・ソース、フォルダ、および Essbase Studio 内のすべてのアーティファクトが含まれます。	はい	はい	いいえ	なし

## Essbase Studio の移行に関する考慮事項

Essbase Studio の移行に関する特定の考慮事項はありません。

## Essbase Studio アプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係

Essbase Studio には、Essbase Studio アーティファクトとともに移行される、次の Shared Services からのアーティファクトが必要です。

- Shared Services セキュリティ(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)

## 移行におけるエクスポートとインポートのオプション

サブトピック

- [移行のエクスポート・オプション](#)
- [移行のインポート・オプション](#)

## 移行のエクスポート・オプション

Essbase Studio には、製品固有のエクスポート・オプションはありません。

## 移行のインポート・オプション

Essbase Studio には、次のインポート・オプションがあります。

- 「インポート・モード」: オプションを選択します。
  - 「置換」: 要素がカタログ・データベースにすでに存在する場合は、カタログ・ファイルの新しい要素で上書きされます。

- 「マージ」:要素がカタログ・データベースにすでに存在する場合は、その要素が保持され、XML ファイルの重複する要素は使用されません。XML ファイルを使用して、カタログ・データベースが作成されます。少なくとも1つのインポートされたオブジェクトがカタログに存在する場合、インポート・プロセスは終了します。
- 「要素が存在する場合は中止」:XML ファイルを使用してカタログ・データベースが作成されます。少なくとも1つのインポートされたオブジェクトがカタログに存在する場合、インポート・プロセスは終了します。

**注:** エクスポートおよびインポートのオプションにアクセスするには、Shared Services Console を起動し、「管理」、「移行オプション」を選択します。

## サンプルの移行定義ファイル

Essbase Studio の移行定義ファイルに使用される製品コードは、BPM です。

**注:** 移行定義ファイルで正しい構文が使用されていない場合、「MDFファイルのフォーマットが正しくありません」というエラーが表示されます。

### ファイル・システムへのエクスポート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password=""/>
  <Task>
    <Source type="Application" product="BPM" project="Essbase Studio Server 11.1.2 Servers" application="Essbase Studio Server1"/>
    <Target type="FileSystem" filePath="/BPM-Essbase Studio Server1"/>
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Repository" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

---

### ファイル・システムからのインポート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password=""/>
  <Task>
    <Source type="FileSystem" filePath="/BPM-Essbase Studio Server1"/>
    <Target type="Application" product="BPM" project="Essbase Studio Server 11.1.2 Servers" application="Essbase Studio Server1"/>
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Repository" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

---



## ライフサイクル管理のログ・ファイル

Oracle Essbase Studio のライフサイクル管理のログ・ファイルについては、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide に記載されています。





# FDMEEおよびライフサイクル管理

## この付録の内容

FDMEE アーティファクトについて.....	107
FDMEE の役割の要件.....	108
FDMEE の移行の前提条件 .....	108
FDMEE のアーティファクト・リスト .....	109
FDMEE の移行に関する考慮事項.....	112
FDMEE アプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係.....	112
移行におけるエクスポートとインポートのオプション.....	112
サンプルの移行定義ファイル .....	113
ライフサイクル管理のログ・ファイル.....	113

## FDMEE アーティファクトについて

次のタイプの FDMEE アーティファクトを移行するには、ライフサイクル管理を使用します。

### アプリケーション・データ・アーティファクト

- アプリケーション・カテゴリのマッピング
- アプリケーション定義
- アプリケーション期間マッピング
- バッチ定義
- エンティティ・グループのチェック
- ルール・グループのチェック
- データ・ロード・マッピング
- データ・ロード・ルール
- HR データ・ロード・ルール
- インポート・フォーマット
- 場所
- 論理グループ
- メタデータ・ルール
- ライトバック・マッピング
- ライトバック・ルール

## グローバル設定アーティファクト

- アプリケーション設定
- カテゴリ・マッピング
- 期間マッピング
- クエリ定義
- レポート定義
- レポート・グループ
- セキュリティ設定
- ソース会計エンティティ
- ソース・アダプタ
- ソース期間マッピング
- システム設定
- ユーザー設定

これらの FDMEE アーティファクトの詳細は、[109 ページの「FDMEE のアーティファクト・リスト」](#)を参照してください。

## FDMEE の役割の要件

FDMEE のライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります。

- FDMEE 管理者
- LCM 管理者

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

## FDMEE の移行の前提条件

- Shared Services と FDMEE をインストールして構成し、これらが実行されていることを確認します。Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに、LCM 管理者および FDMEE アプリケーション管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。
- FDMEE 製品固有のアーティファクトを移行する前に、Shared Services のネイティブ・ディレクトリのアーティファクト(ユーザー、グループおよびプロビジョニング)を移行します。[56 ページの「ネイティブ・ディレクトリ\(セキュリティ\)の移行」](#)を参照してください。Shared Services ネイティブ・ディレクトリ

のアーティファクト・リストについては、付録 M「[Shared Services とライフサイクル管理](#)」を参照してください。

- **FDMEE 製品固有のアーティファクトを移行する前に、ターゲット環境のすべてのソース・システムの登録を手動で作成し、初期化します。**

## FDMEE のアーティファクト・リスト

### サブトピック

- [アーティファクト・リストについて](#)
- [アプリケーション・データ・アーティファクト](#)
- [グローバル設定アーティファクト](#)

FDMEE のアーティファクトは、Shared Services Console の FDM アプリケーション・グループの FDMEE ノードにリストされています。

**注：** Shared Services Console に表示されるアーティファクトは、実装ごとに異なります。

## アーティファクト・リストについて

アーティファクト・リストについて次のことに注意してください：

- **アーティファクト - アーティファクト名**
- **説明** - アーティファクトの説明
- **最終変更時間** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトが最後に変更された時間を反映します。アーティファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終変更ユーザー** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーティファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能** - 「はい」の場合、アーティファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーティファクトは製品内でのみ編集できます。
- **依存** - アーティファクトの依存関係を一覧表示します。たとえば、ユーザー・プリファレンス・アーティファクトを移行する場合は、ユーザー変数アーティファクトも移行する必要があります。

## アプリケーション・データ・アーティファクト

アプリケーション・データ・ディレクトリには、連結アプリケーションと Planning アプリケーションのアーティファクトが含まれます。

表 20 アプリケーション・データ

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
アプリケーション・カテゴリのマッピング	ソース・システムのデータを分類し、アプリケーションごとの特定のターゲット・シナリオ次元にマッピングします。このマッピングにより、グローバル・カテゴリ・マッピングはオーバーライドされます。	いいえ	いいえ	はい	アプリケーション定義、カテゴリ・マッピング
アプリケーション定義	ターゲット・アプリケーションの定義	いいえ	いいえ	はい	なし
アプリケーション期間マッピング	ソース FDMEE システム期間と、ターゲット EPM System アプリケーション期間の間の期間マッピング。このマッピングにより、グローバル期間マッピングはオーバーライドされます。	いいえ	いいえ	はい	アプリケーション定義、期間マッピング
バッチ定義	FDMEE バッチ処理の定義およびパラメータ	いいえ	いいえ	はい	データ・ロード・ルール、HR データ・ロード・ルール、ライトバック・ルール、メタデータ・ルール
エンティティ・グループのチェック	場所ごとに検証レポートに表示されるターゲット・システム・エンティティを分類します	いいえ	いいえ	はい	アプリケーション定義
ルール・グループのチェック	検証レポート・プロセスの一部である詳細な検証ロジックを定義します	いいえ	いいえ	はい	アプリケーション定義
データ・ロード・マッピング	単次元内のソース次元メンバーとターゲット次元メンバー間の関係	いいえ	いいえ	はい	場所
データ・ロード・ルール	FDMEE のソース・システムからデータを抽出するルール	いいえ	いいえ	はい	場所
HR データ・ロード・ルール	Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting アプリケーションにデータおよびメタデータを移入するルール	いいえ	いいえ	はい	場所
インポート・フォーマット	ソースのセグメントまたはチャート・フィールドからターゲットのアプリケーション次元またはフラット・ファイルのフィールドへのマッピング	いいえ	いいえ	はい	アプリケーション定義、ソース・アダプタ、ソース会計エンティティ
場所	ソース会計エンティティおよびターゲット・アプリケーションのマッピング	いいえ	いいえ	はい	インポート・フォーマット
論理グループ	ロジック勘定科目を分類します	いいえ	いいえ	はい	アプリケーション定義

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
メタデータ・ルール	ソース・システム次元メンバーをターゲット EPM System アプリケーションにロードするルール	いいえ	いいえ	はい	場所
ライトバック・マッピング	ソース FDMEE システムへのライトバック中に、送信中の EPM System の次元メンバーをソース・セグメント・メンバーで置き換えるためのマッピング	いいえ	いいえ	はい	場所
ライトバック・ルール	アプリケーションから一般会計インスタンスまたは元帳ソースに予算データを抽出するルール	いいえ	いいえ	はい	場所

## グローバル設定アーティファクト

グローバル設定ディレクトリには、ソース会計エンティティ、ソース期間マッピング、カテゴリ・マッピング、期間マッピングおよびソース・アダプタのアーティファクトが含まれます。

表 21 グローバル設定アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
アプリケーション設定	EPM アプリケーション・レベルで設定された構成設定	いいえ	いいえ	はい	アプリケーション定義
カテゴリ・マッピング	ソース・システムのデータをグローバルに分類し、特定のターゲット EPM System シナリオ次元メンバーにマッピングします。	いいえ	いいえ	はい	なし
期間マッピング	ソース FDMEE システム期間と、ターゲット EPM System アプリケーション期間の間のグローバル期間マッピング	いいえ	いいえ	はい	なし
クエリー定義	FDMEE レポートのクエリー定義。これらのクエリー定義エントリは、FDMEE に付属している BI Publisher テンプレートにより使用されます	いいえ	いいえ	はい	なし
レポート定義	FDMEE レポート・テンプレート。これらのテンプレートは、クエリー定義セクションに定義されているクエリーを使用します。	いいえ	いいえ	はい	クエリー定義、レポート・グループ
レポート・グループ	レポートを分類し、ユーザー・インタフェース内のレポートのリストをフィルタします	いいえ	いいえ	はい	なし
セキュリティ設定	システム機能または場所ごとにセキュリティを定義します	いいえ	いいえ	はい	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
ソース会計エンティティ	統合で使用されるソース元帳または事業部門	いいえ	いいえ	はい	なし
ソース・アダプタ	外部システムからデータをプルするアダプタ。	いいえ	いいえ	はい	なし
ソース期間マッピング	ソース FDMEE システム期間と、ソース・システム別に編成されたターゲット EPM System アプリケーション期間の間の期間マッピング	いいえ	いいえ	はい	期間マッピング
システム設定	FDMEE に対してシステム・レベルで有効になっている構成設定	いいえ	いいえ	はい	なし
ユーザー設定	特定のユーザーに対して有効になっている構成設定	いいえ	いいえ	はい	なし

## FDME の移行に関する考慮事項

- ソース・システムはソース・システムおよび FDMEE の両方で初期化される必要があります。
- ターゲット・アプリケーションは、それぞれのターゲット製品すべてに存在する必要があります。

## FDME アプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係

FDME のアーティファクトをある環境から別の環境へ移行する場合(開発からテストまたはテストから本番環境)、FDME には、FDME に固有のアーティファクトとともに移行される他の製品からのアーティファクトが必要です。

FDME クラシック製品間アーティファクトには、Shared Services ネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループおよびプロビジョニング)が含まれます。

## 移行におけるエクスポートとインポートのオプション

インポート時に、FDME アーティファクトは、宛先環境での既存のアーティファクトを検証します。

FDME インポート・オプションは次のとおりです。

- 「検証のスキップ」 - インポート中に宛先の場所でのターゲット次元メンバーの検証をスキップします。



**注：** エクスポートおよびインポートのオプションにアクセスするには、Shared Services Console を起動し、「管理」、「移行オプション」を選択します。

## サンプルの移行定義ファイル

ここで提供されているサンプル移行定義ファイルは、FDMEE アプリケーションの移行用です。FDMEE の移行定義ファイルに使用される製品コードは、AIF です。

**注：** 移行定義ファイルで正しい構文が使用されていない場合、「MDFファイルのフォーマットが正しくありません」というエラーが表示されます。

### ファイル・システムへのエクスポート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="Application" product="AIF" project="FDM" application="FDMEE" />
    <Target type="FileSystem" filePath="/FDMEE" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Setup Artifacts" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

---

### ファイル・システムへのインポート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="FileSystem" filePath="/FDMEE" />
    <Target type="Application" product="AIF" project="FDM" application="FDMEE" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Setup Artifacts" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

---

## ライフサイクル管理のログ・ファイル

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Enterprise Edition のライフサイクル管理のログ・ファイルについては、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide に記載されています。





# Financial Close Management とライフサイクル管理

## この付録の内容

Financial Close Management アーティファクト .....	115
Financial Close Management 役割の要件 .....	116
Financial Close Management 移行の前提条件 .....	116
Financial Close Management のアーティファクト・リスト .....	117
Financial Close Management 移行の考慮事項 .....	122
Financial Close Management アプリケーションの移行と製品間アーティファクト の依存関係.....	122
移行におけるエクスポートとインポートのオプション.....	122
サンプルの移行定義ファイル .....	123
ライフサイクル管理のログ・ファイル.....	124

## Financial Close Management アーティファクト

次のタイプの Financial Close Management アーティファクトのリポジトリ・コンテンツを移行するには、ライフサイクル管理を使用します:

### Close Manager アーティファクト

- アラート・タイプ
- カスタム属性
- フィルタ
- グローバル統合トークン
- 統合アプリケーション
- 統合タイプ
- 期間
- タスク・タイプ
- テンプレート
- ユーザー・プリファレンス
- 年

### Account Reconciliation Manager アーティファクト

- 勘定科目タイプ
- 経過期間プロファイル

- 通貨
- カスタム属性
- カスタム通貨
- ダッシュボード定義
- フィルタ
- フォーマット
- 頻度
- グローバル統合トークン
- グローバル設定
- 期間
- パワー・ユーザーのセキュリティ
- プロセス
- プロファイル・セグメント
- プロファイル
- レート・タイプ
- リスク評価
- チーム
- ユーザー・プリファレンス

これらのアーティファクトの説明については、[117 ページの「Financial Close Management のアーティファクト・リスト」](#)を参照してください。

## Financial Close Management 役割の要件

Financial Close Management のライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります:

- FCM 管理者
- LCM 管理者

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

## Financial Close Management 移行の前提条件

- Shared Services と Financial Close Management をインストールおよび構成し、稼働していることを確認します。Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに、LCM 管理者および FCM 管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion

Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

- Financial Close Management 製品に固有のアーティファクトを移行する前に、Shared Services ネイティブ・ディレクトリのアーティファクト(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)を移行してください。56 ページの「[ネイティブ・ディレクトリ\(セキュリティ\)の移行](#)」を参照してください。Shared Services ネイティブ・ディレクトリのアーティファクト・リストについては、[付録 M「Shared Services とライフサイクル管理](#)」を参照してください。
- Close Manager の場合、統合タイプを移行する前に、次のプログラムが稼働していることを確認します。
  - 移行されるシステムで自動化された統合タイプの外部非同期 Web サービス
  - 管理サーバー
  - Oracle SOA Suite サーバー
- Account Reconciliation Manager の場合、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Enterprise Edition が稼働してデータが入力されている必要があります。
- Account Reconciliation Manager の場合、ユーザーや役割などの Shared Services データを、Account Reconciliation Manager データのインポート前にインポートする必要があります。

## Financial Close Management のアーティファクト・リスト

### サブトピック

- [アーティファクト・リストについて](#)
- [Close Manager アーティファクト](#)
- [Account Reconciliation Manager アーティファクト](#)

Financial Close Management アーティファクトは、Shared Services Console の Financial Close Management アプリケーション・グループにリストされます。

**注：** Shared Services Console に表示されるアーティファクトは、実装ごとに異なります。

## アーティファクト・リストについて

アーティファクト・リストについて次のことに注意してください:

- **アーティファクト** - アーティファクト名
- **説明** - アーティファクトの説明

- **最終変更時間** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトがインポートされた時間を反映します。アーティファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終変更ユーザー** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーティファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能** - 「はい」の場合、アーティファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーティファクトは製品内でのみ編集できます。
- **依存** - アーティファクトの依存関係を一覧表示します。たとえば、Financial Close Management 統合タイプのアーティファクトを移行する場合は、Financial Close Management 統合アプリケーションのアーティファクトも移行する必要があります。

## Close Manager アーティファクト

表 22 Financial Close Management Close Manager アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
アラート・タイプ	アラートをハードウェア障害、ソフトウェアの問題、システム障害などのタイプに分類します	はい	いいえ	はい - XML	なし
カスタム属性	テンプレート、スケジュール、タスク・タイプおよびタスクを分類します	はい	いいえ	はい - XML	なし
フィルタ	リスト・ビュー、ダッシュボードおよびレポート・バイндаに表示されるレコードを制御します。	はい	いいえ	はい - XML	テンプレート
グローバル統合トークン	パラメータ化された URL の作成を有効にします	はい	いいえ	はい - XML	カスタム属性 注： グローバル統合トークンはカスタム属性に依存している可能性があります。常にそうとはかぎりません。
統合アプリケーション	Financial Close Management が統合される外部アプリケーションを表します	はい	いいえ	はい - XML	なし
統合タイプ	Financial Close Management と統合されるアプリケーションによって提供されるサービスの定義。	はい	いいえ	はい - XML	統合アプリケーション
期間	月や四半期など、決算アクティビティが適用される期間を指定する階層次元	はい	いいえ	はい - XML	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
タスク・タイプ	データ入力や G/L 抽出など、決算期間によく行われるタスクを識別し、分類します	はい	いいえ	はい - Zip 注意: アーティファクトは抽出される必要があり、圧縮されたコンテンツの形式は保持される必要があるため、編集は推奨されません。	期間、年、アラート・タイプ、カスタム属性、統合アプリケーション、統合タイプ
テンプレート	複数の決算期間で反復できるタスクのセット。管理者は、月次や四半期など、様々なタイプの決算期間のテンプレートを作成できます。	はい	いいえ	はい - Zip 注意: アーティファクトは抽出される必要があり、圧縮されたコンテンツの形式は保持される必要があるため、編集は推奨されません。	期間、年、アラート・タイプ、カスタム属性、統合アプリケーション、統合タイプ、タスク・タイプ
ユーザー・プリファレンス	Financial Close Management アプリケーションに使用される、タイムゾーンに固有のプリファレンス	はい	いいえ	はい - XML	なし
年	2009、2010、FY09 や FY10 など、決算アクティビティが適用される年を指定するフラット・リスト。	はい	いいえ	はい - XML	なし

## Account Reconciliation Manager アーティファクト

表 23 Financial Close Management Account Reconciliation Manager アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
勘定科目タイプ	階層構造に従って、プロファイルおよび調整を分類します	はい	いいえ	はい - XML	なし
経過期間プロファイル	経過期間バケットのコレクション	はい	いいえ	はい - XML	なし
通貨	一般的に受け入れられる換算の手段。Financial Close Management は、ISO に準拠している通貨コードおよび記号などの通貨の詳細をシードします。	はい	いいえ	はい - XML	なし

アーティ ファクト	説明	最終 変更 時間	最終 変更 ユー ザー	ファイル・ システムで 編集可能?	依存
カスタム属 性	フィルタ処理や検索を容易にするために情報を分類します。カスタム属性は、テンプレート、スケジュール、タスク・タイプおよびタスクに割り当てられます。たとえば、特定のカスタム属性を持つタスクのみが含まれるように、タスク・リストをフィルタ処理できます。	はい	いいえ	はい - XML	なし
カスタム通 貨	ISO に準拠していない通貨	はい	いいえ	はい - XML	なし
ダッシュ ボード定義	スケジュールおよびタスク・リストのビュー、詳細にドリルダウンできる概要	はい	いいえ	はい - XML	フィルタ、 CSS ユー ザー、経過期 間のプロファ イル
フィルタ	リスト・ビュー、ダッシュボードおよびレポート・バイндаに表示されるレコードを制御します。	はい	いいえ	はい - XML	カスタム属性
フォーマッ ト	調整の方法と、調整をレビュー用に送信する前に提供する必要がある情報を決定します	はい	いいえ	はい - Zip  注意: アー ティファク トは抽出さ れる必要が あり、圧縮 されたコン テンツの形 式は保持さ れる必要が あるため、 編集は推奨 されません。	カスタム属性
頻度	調整を準備および更新する頻度。頻度は、システム設定で定義され、プロファイルと期間に関連付けられます。	はい	いいえ	はい - XML	なし
グローバル 統合トーク ン	パラメータ化された URL の作成を有効にします	はい	いいえ	はい - XML	カスタム属性  注: グロー バル統合ト ークンはカス タム属性に依 存している可 能性がありま すが、常にそ うとはかぎり ません。
グローバル 設定	アップロード・ファイルの最大サイズ、データロード・コンテキストおよび「期限までの日数」システム設定を含みます。これらの設定は、管理者によって確立され、Financial Close Management ユーザー・ベース全体に適用されます。	はい	いいえ	はい - XML	なし



アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
期間	勘定科目調整が完了する時間の単位(2013年1月、2013年2月など)	はい	いいえ	はい - XML	頻度
パワー・ユーザーのセキュリティ	パワー・ユーザーによりアクセスされる勘定科目セグメントのセキュリティ・フィルタ	はい	いいえ	はい - XML	プロファイル・セグメント、CSS ロール
プロセス	プロファイルを特定の調整プロセス(貸借対照表調整プロセスやローカル GAAP 調整プロセスなど)に関連付けます	はい	いいえ	はい - XML	なし
プロファイル・セグメント	値のフィルタ処理およびレポートを容易にするための、セグメントに格納されたプロファイル勘定科目 ID	はい	いいえ	はい - XML	なし
プロファイル	調整が発生する方法と時期を決定する構成設定が含まれます	はい	いいえ	はい - Zip 注意: アーティファクトは抽出される必要があり、圧縮されたコンテンツの形式は保持される必要があるため、編集は推奨されません。	カスタム属性、フォーマット、期間、勘定科目タイプ、レポート・タイプ、プロファイル・セグメント
レート・タイプ	プロファイルまたは調整で使用するために、外国為替レートに関連付けられます	はい	いいえ	はい - XML	なし
リスク評価	リスク・レベルに従ったプロファイルと調整の分類を可能にします。リスク評価を使用して、レポート用の勘定科目を選択することや、策定者、頻度または他の属性を簡単に割り当てることができます。	はい	いいえ	はい - XML	なし
チーム	策定者、レビュー担当者、参照者、およびコメント作成者の役割を使用して定義およびプロビジョニングされます。次に、プロファイルまたは調整のこれらの役割を名前付きユーザーに割り当てる代わりに、役割がチームに割り当てられます。	はい	いいえ	はい - XML	なし
ユーザー・プリファレンス	Financial Close Management アプリケーションに使用される、タイムゾーンに固有のプリファレンス	はい	いいえ	はい - XML	なし

## Financial Close Management 移行の考慮事項

- すべての Financial Close Management ユーザーは Shared Services の一部として移行されます。
- Close Manager で、次のアーティファクトは移行できません。
  - フィルタ
  - ユーザー・プリファレンス
  - スケジュール
  - アラート
- Account Reconciliation Manager で、次のアーティファクトは移行できません。
  - 調整
  - トランザクション
  - 通貨レート

## Financial Close Management アプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係

Financial Close Management には、製品間アーティファクトの依存関係はありません。

## 移行におけるエクスポートとインポートのオプション

### サブトピック

- [移行のエクスポート・オプション](#)
- [移行のインポート・オプション](#)

## 移行のエクスポート・オプション

Financial Close Management には、製品固有のエクスポート・オプションはありません。

## 移行のインポート・オプション

Financial Close Management には、次のインポート・オプションがあります:

- 「インポート・モード」
  - 「置換」 - インポートしたアーティファクトで選択したアーティファクトを上書きします
  - 「すべて置換」 - インポートしたアーティファクトで既存のアーティファクトをすべて上書きします

**注：** エクスポートおよびインポートのオプションにアクセスするには、Shared Services Console を起動し、「管理」、「移行オプション」を選択します。

## サンプルの移行定義ファイル

Financial Close Management の移行定義ファイルで使用される製品コードは FCC です。

**注：** 移行定義ファイルで正しい構文が使用されていない場合、「MDFファイルのフォーマットが正しくありません」というエラーが表示されます。

### ファイル・システムへのエクスポート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="Application" product="FCC" project="Financial Close"
application="Financial Close Management" />
    <Target type="FileSystem" filePath="/FCM-Financial Close Management" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Alert Types" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Custom Attributes" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Integration Applications" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Integration Types" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Periods" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Task Types" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Templates" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Years" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

---

### ファイル・システムからのインポート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="FileSystem" filePath="/FCM-Financial Close Management" />
    <Target type="Application" product="FCC" project="Financial Close"
application="Financial Close Management" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Alert Types" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Custom Attributes" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Integration Applications" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Integration Types" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Periods" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Task Types" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Templates" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

```
<Artifact recursive="true" parentPath="/Years" pattern="*" />  
</Task>  
</Package>
```

---

## ライフサイクル管理のログ・ファイル

Oracle Hyperion Financial Close Management のライフサイクル管理のログ・ファイルについては、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide に記載されています。



# Financial Managementとライフサイクル管理

## この付録の内容

Financial Management アーティファクトについて .....	125
Financial Management の役割の要件 .....	126
Financial Management 移行の前提条件 .....	126
Financial Management のアーティファクト・リスト .....	127
Financial Management の移行に関する考慮事項.....	133
Financial Management アプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係 .....	133
移行におけるエクスポートとインポートのオプション.....	133
サンプルの移行定義ファイル .....	134
ライフサイクル管理のログ・ファイル.....	135

## Financial Management アーティファクトについて

次のタイプの Financial Management アーティファクトのリポジトリのコンテンツを移行するには、ライフサイクル管理を使用します。

- アプリケーションのベース・レベル・データ
- アプリケーションのスナップショット
- 構成
- ドキュメント
- 次元
- フォーム
- 内部取引
- 仕訳
- メンバー・リスト
- フェーズ送信
- ルール
- セキュリティ

Financial Management アーティファクトのリストについては、[127 ページの「Financial Management のアーティファクト・リスト」](#)を参照してください。

## Financial Management の役割の要件

Financial Management のライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります:

- LCM 管理者
- アプリケーション管理者

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

## Financial Management 移行の前提条件

- Shared Services と Financial Management をインストールして構成し、実行されていることを確認します。Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに、LCM 管理者およびアプリケーション管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。
- Financial Management 製品固有のアーティファクトを移行する前に、Shared Services ネイティブ・ディレクトリ・アーティファクト(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)を移行します。56 ページの「ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行」を参照してください。Shared Services アーティファクトのリストについては、付録 M 「Shared Services とライフサイクル管理」を参照してください。
- 次のセクションの Financial Management アーティファクト移行情報を確認します。
  - 126 ページの「Financial Management クラシック・アプリケーションの移行」
  - 127 ページの「Financial Management Performance Management Architect のアプリケーションの移行」

## Financial Management クラシック・アプリケーションの移行

- 移行する前に、アプリケーションをネイティブ Financial Management に作成する必要があります。
- Financial Management クラシックでは、Financial Management 固有のアーティファクトとともに、他の製品から次のアーティファクトを移行する必要があります。
  - Shared Services ネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)とタスクフロー
  - Reporting and Analysis(Financial Reporting と Web Analysis)

# Financial Management Performance Management Architect のアプリケーションの移行

- 最初に移行の場合は、まず Performance Management Architect 次元を移行して配置する必要があります。その後、非次元アーティファクトを移行できます。
- Financial Management Performance Management Architect では、Financial Management 固有のアーティファクトとともに、他の製品から次のアーティファクトを移行する必要があります。
  - Performance Management Architect
  - Shared Services ネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループ、およびプロセスフロー)とタスクフロー
  - Calculation Manager
  - Reporting and Analysis(Financial Reporting と Web Analysis)

## Financial Management のアーティファクト・リスト

### サブトピック

- [アーティファクト・リストについて](#)
- [アプリケーションのベース・レベル・データ・アーティファクト](#)
- [構成アーティファクト](#)
- [ドキュメント・アーティファクト](#)
- [次元アーティファクト](#)
- [フォーム・アーティファクト](#)
- [内部取引アーティファクト](#)
- [仕訳アーティファクト](#)
- [メンバー・リストのアーティファクト](#)
- [フェーズ送信アーティファクト](#)
- [ルールのアーティファクト](#)
- [セキュリティのアーティファクト](#)

Financial Management アーティファクトは、Shared Services Console の Financial Management アプリケーション・グループにリストされます。

Performance Management Architect が使用可能になったアプリケーションは、Foundation アプリケーション・グループの EPMA ノードの下に次元をリストします。その他の非次元アーティファクトはすべて、Financial Management アプリケーション・グループの下にリストされます。

**注：** Shared Services Console に表示されるアーティファクトは、実装ごとに異なります。

## アーティファクト・リストについて

アーティファクト・リストについて次のことに注意してください:

- **アーティファクト** - アーティファクト名
- **説明** - アーティファクトの説明
- **最終変更時間** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトがインポートされた時間を反映します。アーティファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終変更ユーザー** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーティファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能** - 「はい」の場合、アーティファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーティファクトは製品内でのみ編集できます。
- **依存** - アーティファクトの依存関係を一覧表示します。たとえば、Financial Management イベントのアーティファクトを移行する場合は、Financial Management カレンダのアーティファクトも移行する必要があります。

## アプリケーションのベース・レベル・データ・アーティファクト

表 24 ベース・レベル・データ・アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
データ	所有者情報や為替レートなどを含むベース・レベル・データ。	いいえ	いいえ	はい	セキュリティ・クラス、次元

**注:** 分散 EPM インストールの Financial Management のデータ・アーティファクトをエクスポートまたはインポートするには、ライフサイクル管理に共有ファイル・システム・パスが必要です。この共有/ディスク・フォルダへのアクセス権を持つドメイン・アカウントを使用して、サービスを起動する必要があります。このドメイン・アカウントで hfmLcmServiceAppPool (IIS) を構成します。

## 構成アーティファクト

表 25 構成アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
アプリケーション定義	クラシック・アプリケーションのアプリケーション・シェルを作成するために使用します	いいえ	いいえ	はい	なし



アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
アプリケーション・モジュール構成	システム管理者は、アプリケーションのすべてのユーザーに対して Financial Management モジュールを使用不可にできます	はい	はい	はい	なし

## ドキュメント・アーティファクト

表 26 ドキュメント・アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
カスタム文書	Microsoft Word や Excel ドキュメントなどの、ユーザー定義ドキュメント	はい	いいえ	いいえ	セキュリティ・クラス
データ・エクスプローラ・レポート	データ・グリッドに含まれている情報を示します	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス、次元、メンバー・リスト
フォルダ	他のファイルを含んで階層を形成するファイル	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス
リンク	リポジトリ・オブジェクトへの参照です。リンクはフォルダ、ファイル、ショートカット、および他のリンクなどの参照に使用できます。	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス
関連コンテンツ	レポートなどの別の Oracle 製品のコンテンツへのリンク	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス
タスク・リスト	特定のユーザーについて、タスクの詳細ステータスを示すリスト	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス

## 次元アーティファクト

表 27 次元アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
Account	高機能の会計を可能にする次元タイプ。勘定科目として定義可能な次元は 1 つのみです。	はい	いいえ	はい - XML	セキュリティ・クラス
Appsettings	メタデータの属性	はい	いいえ	はい - XML	セキュリティ・クラス
ConsolMethod	メタデータの属性	はい	いいえ	はい - XML	セキュリティ・クラス

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
Currency	メタデータの属性	はい	いいえ	はい - XML	セキュリティ・クラス
Custom (1 - 4)	ユーザーが作成および定義する次元です。チャンネル、製品、部署、プロジェクト、または地域がカスタム次元になることがあります。	はい	いいえ	はい - XML	セキュリティ・クラス
エンティティ	部門、子会社、工場、地域、製品など、組織での財務報告単位となる組織単位を示す次元です。	はい	いいえ	はい - XML	セキュリティ・クラス
ICP	勘定科目に存在するすべての内部取引残高を表す次元です。この次元は、Account 次元と任意のカスタム次元を組み合わせて使用する予約次元です。	はい	いいえ	はい - XML	セキュリティ・クラス
Period	四半期や月などの期間を示す次元	はい	いいえ	はい - XML	セキュリティ・クラス
Scenario	データを分類するための次元(Actuals、Budget、Forecast1、Forecast2 など)	はい	いいえ	はい - XML	セキュリティ・クラス
Value	アプリケーションに保管されている様々なタイプの値を表し、入力通貨、親通貨、調整、および連結の詳細(比例、消去、および貢献の詳細など)を含められる次元	はい	いいえ	はい - XML	セキュリティ・クラス
View	期別、年次累計および四半期累計の期間単位など、カレンダーに関する機能の様々なモードを示す次元	はい	いいえ	はい - XML	セキュリティ・クラス
Year	データの会計年度や暦年を示す次元	はい	いいえ	はい - XML	セキュリティ・クラス

## フォーム・アーティファクト

表 28 フォーム・アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
Web フォーム	ユーザーがデータベースにデータを入力できるようにする、Web 上のグリッド表示	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス、次元、メンバー・リスト
Web グリッド	データを入力および表示するためのオブジェクト	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス、次元、メンバー・リスト

## 内部取引アーティファクト

表 29 内部取引アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
内部取引照合テンプレート	内部取引照合プロセスの一連の事前定義コンポーネント	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス、次元、メンバー・リスト
内部取引理由コード	内部取引のステータスの説明	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	なし
内部取引システム・レポート	内部取引照合プロセスの情報	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス、次元、メンバー・リスト
内部取引システム・レポート	内部取引の情報	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス、次元、メンバー・リスト
勘定科目別に内部取引照合	選択した勘定科目別の内部取引照合レポート	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス、次元、メンバー・リスト
取引 ID 別に内部取引照合	取引 ID 別の内部取引照合レポート	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス、次元、メンバー・リスト

## 仕訳アーティファクト

表 30 仕訳アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
仕訳グループ	ユーザー定義の要素の 1 つ	いいえ	いいえ	はい - テキスト、XML	なし
仕訳システム・レポート	仕訳の情報を表示します	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス、次元、メンバー・リスト
仕訳テンプレート	各期間に共通する調整情報を転記するために使用する仕訳の機能です。たとえば、共通する勘定科目 ID、エンティティ ID、または金額を含む標準テンプレートを作成すると、これを多数の通常仕訳の基準として使用できます。	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス、次元、メンバー・リスト、仕訳グループ

## メンバー・リストのアーティファクト

表 31 メンバー・リストのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
メンバー・リスト	次元のメンバー、関数、他のメンバー・リストを示す名前付きのグループです。システムまたはユーザーにより定義されます	はい	いいえ	はい - XML	次元

## フェーズ送信アーティファクト

**注:** フェーズ送信アーティファクトを移行するには、ソースと宛先の両方でフェーズ送信を使用可能にしておく必要があります。

表 32 フェーズ送信アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
フェーズ送信	プロセス管理単位のステージ	はい	いいえ	はい - XML	なし

## ルールのアーティファクト

表 33 ルールのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
ルール	アプリケーション内のデータの計算を自動化します	はい	いいえ	はい - XML	次元

## セキュリティのアーティファクト

表 34 セキュリティのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
セキュリティ・クラス	ユーザーのアクセス権を指定する次元メンバーの属性	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	なし
セキュリティ・クラス・アクセス	セキュリティ・クラスのユーザーに割り当てられた権限	いいえ	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス

## Financial Management の移行に関する考慮事項

- 必要な依存関係を手動で選択する必要があります。
- Financial Management がターゲット環境にない場合、ライフサイクル管理によってアプリケーション・シェルが作成されます。アプリケーション・シェルを作成するには、アプリケーション定義アーティファクトを選択する必要があります。
- 分散 Financial Management 環境では、その環境内のすべての Financial Management アプリケーション・サーバーに、読取り/書込みアクセス権のある UNC パスのインポート/エクスポート・フォルダを構成します。

## Financial Management アプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係

Financial Management には、製品間アーティファクトの依存関係はありません。

## 移行におけるエクスポートとインポートのオプション

### サブトピック

- [移行のエクスポート・オプション](#)
- [移行のインポート・オプション](#)

**注：** 以前のリリースでは、Shared Services Console において、Financial Management 用に「依存アーティファクトを含む」オプションが提供されていました。このオプションは使用できなくなりました。かわりに、必要な依存関係を手動で選択する必要があります。

## 移行のエクスポート・オプション

Financial Management には、製品固有のエクスポート・オプションはありません。

## 移行のインポート・オプション

インポート時に、次元アーティファクトとフェーズ送信アーティファクトには、宛先環境で既存のアーティファクトを置換またはマージするオプションがあります。その他の Financial Management アーティファクトはいずれも、インポート時に既存のアーティファクトを置換します。

Financial Management のインポート・オプションは次のとおりです：

- **次元のインポート・モード**
  - 「置換」 - アーティファクトをインポートしたアーティファクトで上書きします。

- 「マージ」 - アーティファクトをインポートしたアーティファクトとマージします。

**注：** このオプションは、移行で定義されたすべての次元に適用できます。

- フェーズ送信割当てインポート・モード

- 「置換」 - アーティファクトをインポートしたアーティファクトで上書きします。
- 「マージ」 - アーティファクトをインポートしたアーティファクトとマージします。

**注：** エクスポートおよびインポートのオプションにアクセスするには、Shared Services Console を起動し、「管理」、「移行オプション」を選択します。

## サンプルの移行定義ファイル

提供されているサンプル定義ファイルは、Financial Management クラシック・アプリケーションの移行用です。Financial Management の移行定義ファイルで使用されている製品コードは HFM で、サンプル・アプリケーションは COMMA です。

**注：** 移行定義ファイルで正しい構文が使用されていない場合、「MDFファイルのフォーマットが正しくありません」というエラーが表示されます。

### ファイル・システムへのエクスポート

---

```
<Package>
<LOCALE>en</LOCALE>
<User name="" password="" />
<Task>
  <Target type="FileSystem" filePath="/HFM-LINSCRIPT" />
  <Source type="Application" product="HFM" project="Default Application Group"
application="LINSCRIPT" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Forms" pattern="*" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Configuration" pattern="*" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Rules" pattern="*" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Documents" pattern="*" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Dimensions" pattern="*" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/InterCompany" pattern="*" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Member Lists" pattern="*" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Journals" pattern="*" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Security" pattern="*" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Phased Submission" pattern="*" />
</Task>
</Package>
```

### ファイル・システムからのインポート

---

```
<Package>
```

```
<LOCALE>en</LOCALE>
<User name="" password="" />
<Task>
  <Target type="Application" product="HFM" project="Default Application Group"
application="LINSRIPT" />
  <Source type="FileSystem" filePath="/HFM-LINSRIPT" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Security" pattern="*" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Configuration" pattern="*" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Forms" pattern="*" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Rules" pattern="*" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Documents" pattern="*" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Dimensions" pattern="*" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/InterCompany" pattern="*" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Member Lists" pattern="*" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Journals" pattern="*" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Phased Submission" pattern="*" />
</Task>
</Package>
```

---

## ライフサイクル管理のログ・ファイル

Financial Management のライフサイクル管理のログ・ファイルについては、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide に記載されています。







# Performance Management Architectとライフサイクル管理

## この付録の内容

Performance Management Architect のアーティファクトについて .....	137
Performance Management Architect の役割の要件 .....	137
Performance Management Architect の移行の前提条件 .....	138
Performance Management Architect のアーティファクト・リスト .....	138
Performance Management Architect の移行に関する考慮事項 .....	142
Performance Management Architect アプリケーションの移行および製品間のアーティファクトの依存関係 .....	143
移行におけるエクスポートとインポートのオプション .....	143
サンプルの移行定義ファイル .....	144
ライフサイクル管理のログ・ファイル .....	145

## Performance Management Architect のアーティファクトについて

ライフサイクル管理は、次の Performance Management Architect アーティファクト・タイプのリポジトリのコンテンツを移行する場合に使用します:

- アプリケーション・メタデータ
- 共有ライブラリ次元
- 次元アクセス
- データの同期

Performance Management Architect のアーティファクトについては、[138 ページの「Performance Management Architect のアーティファクト・リスト」](#)を参照してください。

## Performance Management Architect の役割の要件

Performance Management Architect のライフサイクル管理操作を行うユーザーには、LCM 管理者の役割が割り当てられている必要があります。

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

# Performance Management Architect の移行の前提条件

- Shared Services および Performance Management Architect をインストールして構成し、これらが実行中であることを確認します。Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに LCM 管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。
- Performance Management Architect に固有のアーティファクトを移行する前に、Shared Services のネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループおよびプロビジョニング)を移行する必要があります。56 ページの「[ネイティブ・ディレクトリ\(セキュリティ\)の移行](#)」を参照してください。Shared Services ネイティブ・ディレクトリのアーティファクト・リストについては、[付録 M 「Shared Services とライフサイクル管理」](#)を参照してください。

## Performance Management Architect のアーティファクト・リスト

### サブトピック

- [アーティファクト・リストについて](#)
- [アプリケーション・メタデータのアーティファクト](#)
- [共有ライブラリ次元のアーティファクト](#)
- [次元アクセスのアーティファクト](#)
- [データ同期のアーティファクト](#)

次のことに注意してください。

- Performance Management Architect アーティファクトは Shared Services Console の Foundation アプリケーション・グループにリストされます。
- Shared Services Console に表示されるアーティファクトは、実装ごとに異なります。
- インタフェース・データ・ソース・アーティファクトはエクスポートまたはインポートがサポートされていないアーティファクトです。

### アーティファクト・リストについて

アーティファクト・リストについて次のことに注意してください:

- **アーティファクト** - アーティファクト名
- **説明** - アーティファクトの説明

- **最終変更時間** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトがインポートされた時間を反映します。アーティファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終変更ユーザー** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーティファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能** - 「はい」の場合、アーティファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーティファクトは製品内でのみ編集できます。
- **依存** - アーティファクトの依存関係を一覧表示します

## アプリケーション・メタデータのアーティファクト

「アプリケーション・メタデータ」ディレクトリには、集計アプリケーション、Planning アプリケーション、Essbase アプリケーション、収益性アプリケーションおよび汎用アプリケーションのアーティファクトが含まれています。

表 35 アプリケーション・メタデータのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
集計アプリケーション: ローカル次元: Entity	組織単位を示す次元。たとえば、部門、子会社、工場、地域、製品、またはその他の財務報告単位	はい	はい	はい - XML	なし
集計アプリケーション: ローカル次元: Account	高機能の会計を可能にする次元タイプです。勘定科目として定義可能な次元は 1 つのみです。	はい	はい	はい - XML	なし
集計アプリケーション: アプリケーション・プロパティ	アプリケーションが作成されると、デフォルトのプロパティとプロパティ値のセットが投入されます。プロパティ値は、文字列、整数、ブルなどです。	はい	はい	はい - XML	なし
集計アプリケーション: インポート・プロファイル	新しい次元、既存の次元をマージまたは置換するかどうか、および次元のプロパティなどのインポートする次元に関する重要情報が含まれます。	はい	はい	はい - XML	なし
Planning アプリケーション: ローカル次元: Entity	部門、子会社、工場、地域、製品など、組織での財務報告単位となる組織単位を示す次元です	はい	はい	はい - XML	なし
Planning アプリケーション: ローカル次元: Account	高機能の会計を可能にする次元タイプです。勘定科目として定義可能な次元は 1 つのみです。	はい	はい	はい - XML	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
Planning アプリケーション: アプリケーション・プロパティ	アプリケーションが作成されると、デフォルトのプロパティとプロパティ値のセットが投入されます。プロパティ値は、文字列、整数、ブールなどです	はい	はい	はい - XML	なし
Planning アプリケーション: インポート・プロファイル	新しい次元、既存の次元をマージまたは置換するかどうか、および次元のプロパティなどのインポートする次元に関する重要情報	はい	はい	はい - XML	なし
Essbase アプリケーション: ローカル次元: Entity	部門、子会社、工場、地域、製品など、組織での財務報告単位となる組織単位を示す次元です	はい	はい	はい - XML	なし
Essbase アプリケーション: ローカル次元: Account	高機能の会計を可能にする次元タイプです。勘定科目として定義可能な次元は1つのみです	はい	はい	はい - XML	なし
Essbase アプリケーション: アプリケーション・プロパティ	アプリケーションが作成されると、デフォルトのプロパティとプロパティ値のセットが投入されます。プロパティ値は、文字列、整数、ブールなどです	はい	はい	はい - XML	なし
Essbase アプリケーション: インポート・プロファイル	新しい次元、既存の次元をマージまたは置換するかどうか、および次元のプロパティなどのインポートする次元に関する重要情報	はい	はい	はい - XML	なし
収益性アプリケーション: インポート・プロファイル	新しい次元、既存の次元をマージまたは置換するかどうか、および次元のプロパティなどのインポートする次元に関する重要情報	はい	はい	はい - XML	なし
収益性アプリケーション: ローカル次元	アプリケーションに対してローカルなすべての次元のメンバー	はい	はい	はい	共有ライブラリ次元、アプリケーション設定
収益性アプリケーション: 収益性設定	アプリケーション・レベル・プロパティ、共有次元、フィルタ、およびプロパティのオーバーライドなどのアプリケーション設定	はい	はい	はい - XML	共有ライブラリ次元
汎用アプリケーション: ローカル次元: Entity	部門、子会社、工場、地域、製品など、組織での財務報告単位となる組織単位を示す次元です	はい	はい	はい - XML	なし
汎用アプリケーション: ローカル次元: Account	高機能の会計を可能にする次元タイプです。勘定科目として定義可能な次元は1つのみです。	はい	はい	はい - XML	なし
汎用アプリケーション: アプリケーション・プロパティ	アプリケーションが作成されると、デフォルトのプロパティとプロパティ値のセットが投入されます。プロパティ値は、文字列、整数、ブールなどです。	はい	はい	はい - XML	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
汎用アプリケーション: インポート・プロファイル	新しい次元、既存の次元をマージまたは置換するかどうか、および次元のプロパティなどのインポートする次元に関する重要情報	はい	はい	はい - XML	なし

## 共有ライブラリ次元のアーティファクト

共有ライブラリ次元ディレクトリには、次のような共有ライブラリ次元のアーティファクトが含まれます; Entity、Account および Product など。

表 36 共有ライブラリ次元のアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
エンティティ	部門、子会社、工場、地域、製品など、組織での財務報告単位となる組織単位を示す次元です	はい	はい	はい - XML	なし
Account	高機能の会計を可能にする次元タイプです。勘定科目として定義可能な次元は 1 つのみです。	はい	はい	はい - XML	なし
Product	企業によって作られる製品またはサービスを表す次元。製品は、一般に「汎用」タイプの次元として表示されます。	はい	はい	はい - XML	なし

## 次元アクセスのアーティファクト

次元アクセス・ディレクトリには、共有ライブラリ次元に関連するインポート・プロファイルが含まれます。

表 37 次元アクセスのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
インポート・プロファイル	新規次元などのインポートされた次元、既存の次元をマージするか置換するかどうか、および次元プロパティに関する重要な情報。  インポート・プロファイルは、ソースでのインポート・プロファイルの作成方法に基づき、フラット・ファイル、インタフェース・テーブルおよび Data Relationship Management に関連します。	はい	はい	はい - XML	なし

## データ同期のアーティファクト

「データの同期」ディレクトリには、同期、マッピング・テーブル、外部のファイル定義およびインタフェース・テーブル定義のアーティファクトが含まれています。

表 38 データ同期のアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
外部のファイル定義	データ同期でソースとして使用される外部ファイル	はい	はい	はい - XML	なし
フィルタ定義	ソース・アプリケーションから使用可能なメンバーのセットを制限するために必要です。同期の実行時に、ソース・メンバーにフィルタを適用します。	はい	はい	はい - XML	アプリケーション
マッピング・テーブル	データ同期で再利用できるマッピング。マッピング・テーブルを作成してある場合は、それらのテーブルを同期に挿入できます。	はい	はい	はい - XML	なし
インタフェース・テーブル定義	外部のシステムから Performance Management Architect にデータおよびメタデータをインポートする際に使用されるデータベース・テーブル	はい	はい	はい - XML	インタフェース・データ・ソース
同期	EPM System アプリケーション、インタフェース・テーブルおよび外部ファイル間でデータを同期およびマップできます	はい	はい	はい - XML	アプリケーション

## Performance Management Architect の移行に関する考慮事項

次元状態が共有またはローカルである宛先のインポート結果は、ソースで選択されたアーティファクトによって異なります。考慮事項については、次の表を参照してください。

表 39 共有およびローカル次元の移行に関する考慮事項

ソースの選択	ソース・アプリケーションの次元の状態	宛先のアクション	アプリケーション・プロパティが選択されている場合
アプリケーションのメタデータのみ	ローカル	次元は宛先アプリケーション内に「ローカル」としてインポートされます。次元は作成、マージまたは置換されます。共有次元ライブラリは影響を受けません。	アプリケーション・レベルのプロパティのみが更新される

ソースの選択	ソース・アプリケーションの次元の状態	宛先のアクション	アプリケーション・プロパティが選択されている場合
共有次元ライブラリのみ	共有	次元は、宛先の共有次元ライブラリ内で作成、マージまたは置換されます。次元は宛先アプリケーションには含まれません。	<ul style="list-style-type: none"> <li>アプリケーションレベルのプロパティが更新される</li> <li>次元は、選択されたアプリケーション内に「共有」として含まれる</li> <li>アプリケーションに関する次元およびメンバー・レベルのオーバーライドはインポートされます。オーバーライドには、メンバー・フィルタやアプリケーションに固有のプロパティ値が含まれます。</li> </ul>

## Performance Management Architect アプリケーションの移行および製品間のアーティファクトの依存関係

Performance Management Architect アプリケーションをある環境から他の環境(開発からテストまたはテストから本番環境)に移行する場合は、製品間のアーティファクトの依存関係が存在します。Performance Management Architect では、Shared Services ネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループおよびプロビジョニング)のアーティファクトを Performance Management Architect に固有のアーティファクトとともに移行する必要があります。56 ページの「[ネイティブ・ディレクトリ\(セキュリティ\)の移行](#)」を参照してください。

## 移行におけるエクスポートとインポートのオプション

### サブトピック

- [移行のエクスポート・オプション](#)
- [移行のインポート・オプション](#)

**注：** 以前のリリースでは、Shared Services Console において、Performance Management Architect 用に「依存アーティファクトを含む」オプションが提供されていました。このオプションは使用できなくなりました。かわりに、必要な依存関係を手動で選択する必要があります。

## 移行のエクスポート・オプション

Performance Management Architect には、製品に固有のエクスポート・オプションはありません。

## 移行のインポート・オプション

インポート時に、Performance Management Architect アーティファクトはすべて、宛先環境で既存のアーティファクトを置換します。次元アーティファクトのみが例外で、マージまたは置換のオプションがあります。

Performance Management Architect のインポート・オプション:

- 「次元のインポート・モード」 - 宛先の次元とプロパティをソース・インスタンスから抽出されたメタデータに置換します。デフォルト値は「マージ」です。

**注:** マージおよび置換のオプションはメンバー階層レベルのみで機能し、アプリケーションまたは次元レベルでは機能しません。プロパティがメンバー・レベルで更新される場合、マージまたは置換ではプロパティがソースに基づいて上書きされます。

**注:** エクスポートおよびインポートのオプションにアクセスするには、Shared Services Console を起動し、「管理」、「移行オプション」を選択します。

## サンプルの移行定義ファイル

Performance Management Architect の移行定義ファイルで使用される製品コードは BPMA です。

**注:** 移行定義ファイルで正しい構文が使用されていない場合、「MDFファイルのフォーマットが正しくありません」というエラーが表示されます。

### ファイル・システムへのエクスポート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="Application" product="BPMA" project="Foundation" application="EPM
Architect" />
    <Target type="FileSystem" filePath="/EPMA-EPM Architect" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Data Synchronization" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Dimension Access" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Shared Library Dimensions" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

---

### ファイル・システムからのインポート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
```



```
<LOCALE>en_US</LOCALE>
<User name="" password="" />
<Task>
  <Source type="FileSystem" filePath="/EPMA-EPM Architect" />
  <Target type="Application" product="BPMA" project="Foundation" application="EPM
Architect" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata" pattern="*" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Data Synchronization" pattern="*" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Dimension Access" pattern="*" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Shared Library Dimensions" pattern="*" />
</Task>
</Package>
```

---

## ライフサイクル管理のログ・ファイル

Performance Management Architect のライフサイクル管理のログ・ファイルは、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide に記載されています。





# Performance Scorecardとライフサイクル管理

## この付録の内容

Performance Scorecard のアーティファクトについて.....	147
Performance Scorecard の役割の要件.....	147
Performance Scorecard の移行の前提条件.....	148
Performance Scorecard のアーティファクト・リスト.....	148
Performance Scorecard アプリケーションの移行と製品間のアーティファクトの依存関係.....	149
移行におけるエクスポートとインポートのオプション.....	150
サンプルの移行定義ファイル.....	150
ライフサイクル管理のログ・ファイル.....	151

## Performance Scorecard のアーティファクトについて

次のタイプの Performance Scorecard アーティファクトを移行するには、ライフサイクル管理を使用します:

- 管理オプション
- オブジェクト

Performance Scorecard のアーティファクト・リストについては、[148 ページの「Performance Scorecard のアーティファクト・リスト」](#)を参照してください。

## Performance Scorecard の役割の要件

Performance Scorecard のライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります:

- LCM 管理者
- HPS パワー・マネージャ
- 管理者

**注：** Performance Scorecard アプリケーション・グループには、管理者セキュリティの役割が割り当てられている必要があります。

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

## Performance Scorecard の移行の前提条件

- Shared Services と Performance Scorecard をインストールして構成し、これらが実行されていることを確認します。Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに、LCM 管理者および HPS パワー・マネージャの役割が割り当てられていること、および Performance Scorecard アプリケーション・グループに管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

## Performance Scorecard のアーティファクト・リスト

### サブトピック

- [アーティファクト・リストについて](#)
- [管理オプションのアーティファクト](#)
- [オブジェクトのアーティファクト](#)

Performance Scorecard のアーティファクトは、Shared Services Console の Scorecard アプリケーション・グループにリストされています。

## アーティファクト・リストについて

アーティファクト・リストについて次のことに注意してください:

- **アーティファクト - アーティファクト名**
- **説明** - アーティファクトの説明
- **最終変更時間** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトがインポートされた時間を反映します。アーティファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終変更ユーザー** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーティファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能** - 「はい」の場合、アーティファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーティファクトは製品内でのみ編集できます。
- **依存** - アーティファクトの依存関係を一覧表示します

## 管理オプションのアーティファクト

表 40 管理オプションのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
モデル・セキュリティ	ユーザーおよびグループの Performance Scorecard のメタデータとデータへのアクセスを制御する、関連付けられた従業員、ユーザーのプライマリ・ドメイン、カスタム・セキュリティの役割の割当てなどの情報を含む CSV ファイル	いいえ	いいえ	はい - CSV	なし

**注：** また、ユーザーが移行できる Performance Scorecard の勘定科目には、勘定科目に割り当てられたセキュリティ設定(CSV ファイルに表示され、SR=セキュリティの役割、AE=関係付けられた従業員、PD=プライマリ・ドメイン、Object Name=セキュリティの役割名などがある)が含まれている場合があります。

## オブジェクトのアーティファクト

表 41 オブジェクトのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
アプリケーション・モデル	Performance Scorecard のメタデータを含む XML ファイルまたはコンテンツの文字列	いいえ	いいえ	いいえ	なし

**注：** アプリケーション・モデルのアーティファクトとして含まれる Performance Scorecard アプリケーション・モデル・メタデータ・オブジェクト全体の移行のみできます。ただし、増分エクスポート・オプションを使用すると、最後のエクスポート後に変更されたメタデータ・オブジェクトをエクスポートできます。アプリケーション・モデルのアーティファクトのエクスポート・ファイルは、ソース・サーバーに再インポートできません。

## Performance Scorecard アプリケーションの移行と製品間のアーティファクトの依存関係

Performance Scorecard には、製品間のアーティファクトの依存関係はありません。

# 移行におけるエクスポートとインポートのオプション

## サブトピック

- [移行のエクスポート・オプション](#)
- [移行のインポート・オプション](#)

## 移行のエクスポート・オプション

Performance Scorecard のエクスポート・オプションには、次があります。

- 「増分エクスポート」 - 最後にエクスポート操作を行ってから変更されたアーティファクトのみエクスポートします。

**注：** エクスポートおよびインポートのオプションにアクセスするには、Shared Services Console を起動し、「管理」、「移行オプション」を選択します。

## 移行のインポート・オプション

インポート時に、Performance Scorecard アーティファクトは、宛先環境で既存のアーティファクトとマージします。Performance Scorecard には、製品固有のインポート・オプションはありません。

## サンプルの移行定義ファイル

Performance Scorecard の移行定義ファイルに使用される製品コードは、HPS です。

**注：** 移行定義ファイルで正しい構文が使用されていない場合、「MDFファイルのフォーマットが正しくありません」というエラーが表示されます。

## ファイル・システムへのエクスポート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="Application" product="HPS" project="Scorecard" application="Hyperion Performance Scorecard" />
    <Target type="FileSystem" filePath="/HPS-Hyperion Performance Scorecard" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Administrative Options" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Objects" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

---

## ファイル・システムからのインポート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="FileSystem" filePath="/HPS-Hyperion Performance Scorecard" />
    <Target type="Application" product="HPS" project="Scorecard" application="Hyperion
Performance Scorecard" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Administrative Options" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Objects" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

---

## ライフサイクル管理のログ・ファイル

Oracle Hyperion Performance Scorecard のライフサイクル管理のログ・ファイルは、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide に記載されています。







# Planningとライフサイクル管理

## この付録の内容

Planning アーティファクトについて.....	153
Planning の役割の要件.....	153
Planning の移行の前提条件.....	154
Planning のアーティファクト・リスト.....	155
Planning の移行に関する考慮事項.....	162
Planning アプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係 .....	163
移行におけるエクスポートとインポートのオプション.....	163
サンプルの移行定義ファイル.....	164
ライフサイクル管理のログ・ファイル.....	165

## Planning アーティファクトについて

次のタイプの Planning アーティファクトを移行するには、ライフサイクル管理を使用します:

- 構成
- Essbase データ
- グローバル
- プラン・タイプ
- リレーショナル・データ
- セキュリティ

Planning のアーティファクト・リストについては、155 ページの「[Planning のアーティファクト・リスト](#)」を参照してください。

## Planning の役割の要件

Planning のライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります:

- LCM 管理者
- Planning 管理者
- アプリケーション作成者

**注：** ライフサイクル管理のリスト作成、エクスポートおよびインポート操作を実行するには、Planning 管理者の役割が必要です。また、Planning アプリケーションを作成するには、アプリケーション作成者の役割が必要です。

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

## Planning の移行の前提条件

- Shared Services と Planning をインストールして構成し、これらが実行されていることを確認します。Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに、LCM 管理者、Planning 管理者およびアプリケーション作成者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。
- タスク・リストの LCM 管理者に読取りアクセス権が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。
- Planning アプリケーションを移行する前に、Shared Services ネイティブ・ディレクトリのアーティファクト(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)を移行してください。56 ページの「[ネイティブ・ディレクトリ\(セキュリティ\)の移行](#)」を参照してください。Shared Services ネイティブ・ディレクトリのアーティファクト・リストについては、56 ページの「[ネイティブ・ディレクトリ\(セキュリティ\)の移行](#)」を参照してください。

**注：** Planning または Essbase のライフサイクル管理を使用するには、Essbase で従来のセキュリティ・モードではなく、Shared Services ネイティブ・ディレクトリを使用する必要があります。

- Planning Performance Management Architect アプリケーションの移行の場合、非次元アーティファクトを移行する前に、Performance Management Architect 次元を最初に移行して、「インポートしてから配置」する必要があります。Performance Management Architect アーティファクトのリストについては、[付録 H 「Performance Management Architect とライフサイクル管理」](#) を参照してください。
- 次のアプリケーション・レベルのカレンダ・プロパティは、ソースと宛先のアプリケーションで一致する必要があります：
  - 開始年
  - 基本期間(12 か月、四半期、カスタムなど)
  - 開始月
- 期間次元メンバーは、ソースと宛先のアプリケーションで一致する必要があります。たとえば、ソースの期間次元に Quarter 1 メンバーがある場合、宛先にも Quarter 1 メンバーが存在する必要があります。

- ソースと宛先のプラン・タイプは一致する必要があります(たとえば、ソース・アプリケーションにプラン1というプラン・タイプがある場合、宛先アプリケーションにもプラン1というプラン・タイプが存在する必要があります)。
- ソースと宛先のプラン・タイプは、同じ順序で割り当てられる必要があります(たとえば、ソース・アプリケーションにプラン1とプラン2というプラン・タイプがある場合、どちらも宛先アプリケーションでも同じ順序で現れる必要があります)。
- ソースに「単一通貨」アプリケーション・タイプがある場合は、宛先アプリケーションも同じタイプにする必要があります。
- アプリケーション・タイプ(全般、Project Financial Planning、Public Sector Planning and Budgeting)は、ソースと宛先アプリケーションの両方で一致している必要があります。
- Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting の場合、構成オプションは、ソースと宛先アプリケーションで一致している必要があります。たとえば、ソース・アプリケーションのタイプが「職階および従業員」の場合、宛先アプリケーションのタイプも「職階および従業員」である必要があります。
- 意思決定パッケージのオプションがソース・アプリケーションに対して有効になっている場合、宛先アプリケーションに対しても有効である必要があります。

## Planning のアーティファクト・リスト

### サブトピック

- [アーティファクト・リストについて](#)
- [構成アーティファクト](#)
- [Essbase データ・アーティファクト](#)
- [グローバル・アーティファクト](#)
- [プラン・タイプのアーティファクト](#)
- [リレーショナル・データのアーティファクト](#)
- [セキュリティのアーティファクト](#)

Planning のアーティファクトは、Shared Services Console の Planning アプリケーション・グループにリストされています。

Performance Management Architect が使用可能になったアプリケーションは、Foundation アプリケーション・グループの EPMA ノードの下に次元をリストします。その他のすべての非次元アーティファクトは、Planning アプリケーション・グループの下にリストされます。

**注：** Shared Services Console に表示されるアーティファクトは、実装ごとに異なります。

## アーティファクト・リストについて

アーティファクト・リストについて次のことに注意してください:

- **アーティファクト** - アーティファクト名
- **説明** - アーティファクトの説明
- **最終変更時間** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトが最後に変更された時間を反映します。アーティファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終変更ユーザー** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーティファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能** - 「はい」の場合、アーティファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーティファクトは製品内でのみ編集できます。
- **依存** - アーティファクトの依存関係を一覧表示します。たとえば、ユーザー・プリファレンス・アーティファクトを移行する場合は、ユーザー変数アーティファクトも移行する必要があります。

## 構成アーティファクト

表 42 構成アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
アドホック・オプション	抑制オプション、精度オプション、置換オプション、Web グリッドのデータに影響するその他のオプション	いいえ	いいえ	はい - XML	アドホック・フォーム
データ・ロードの設定	データを Essbase データベースに直接ロードできるようにするため、ユーザーが設定できるパラメータ	いいえ	いいえ	はい - XML	関連付けられた次元
プロパティ: アプリケーションの設定	ユーザーが、電子メール通知、別名テーブルおよび表示オプションなどのプリファレンスを設定できるようにする機能	いいえ	いいえ	はい - XML	なし
ユーザー・プリファレンス	ユーザーがアプリケーション、表示、印刷およびユーザー変数に設定できるプリファレンス	いいえ	いいえ	はい - XML	ユーザー変数
ユーザー変数	ユーザーのメンバー選択に基づいて、データ・フォームを動的に配置し、指定されたエンティティのみを表示します。たとえば、Department というユーザー変数を使用すると、特定の部署および従業員を表示できます。	いいえ	いいえ	はい - XML	関連付けられた次元

## Essbase データ・アーティファクト

表 43 Essbase データ・アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
Planning Essbase キューブ	Planning Essbase データ	いいえ	いいえ	いいえ	なし

## グローバル・アーティファクト

注： 複数のプラン・タイプに関連付けられた標準的な次元が共通次元にリストされます。この項には、関連付けられた属性次元も含まれています。

表 44 グローバル・アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
Calculation Manager ルールセット	同時または連続の計算が可能なルールおよびその他のルール・セットを含むオブジェクト	はい	はい	はい - XML	なし
共通次元-属性このアーティファクトは EPM Architect ベースのアプリケーションの Planning アプリケーションの下には表示されません。	次元のメンバーの属性や特質に基づいて分析できる次元タイプ。共通の標準次元に関連付けられています。	はい	いいえ	はい - CSV	なし
共通次元(標準-勘定科目)このアーティファクトは EPM Architect ベースのアプリケーションの Planning アプリケーションの下には表示されません。	高機能の会計を可能にする次元タイプ。勘定科目として定義可能な次元は 1 つのみです	はい	いいえ	はい - CSV	なし
共通次元(標準-通貨)このアーティファクトは EPM Architect ベースのアプリケーションの Planning アプリケーションの下には表示されません。	通貨を示す次元	はい	いいえ	はい - CSV	なし
共通次元(標準-エンティティ)このアーティファクトは EPM Architect ベースのアプリケーションの Planning アプリケーションの下には表示されません。	組織単位を示す次元。たとえば、部門、子会社、工場、地域、製品、またはその他の財務報告単位	はい	いいえ	はい - CSV	通貨次元は最初にロードされます。

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
共通次元(標準-期間)このアーティファクトは EPM Architect ベースのアプリケーションの Planning アプリケーションの下には表示されません。	四半期や月などの期間を示す次元	はい	いいえ	はい - CSV	Year
共通次元(標準-要求次元)このアーティファクトは EPM Architect ベースのアプリケーションの Planning アプリケーションの下には表示されません。	予算要求を表す次元	はい	いいえ	はい - CSV	なし
共通次元(標準-シナリオ)このアーティファクトは EPM Architect ベースのアプリケーションの Planning アプリケーションの下には表示されません。	データを分類するための次元。たとえば、Actuals、Budget、Forecast1、Forecast2	はい	いいえ	はい - CSV	期間および年の次元、為替レート
共通次元(標準-バージョン)このアーティファクトは EPM Architect ベースのアプリケーションの Planning アプリケーションの下には表示されません。	データのシナリオのコンテキスト内で使用される、起こりうる結果。たとえば、Budget - Best Case、Budget - Worst Case (Budget がシナリオ、Best Case および Worst Case がバージョン)など	はい	いいえ	はい - CSV	なし
共通次元(標準-年)このアーティファクトは EPM Architect ベースのアプリケーションの Planning アプリケーションの下には表示されません。	データの会計年度や暦年を示す次元	はい	いいえ	はい - CSV	なし
複合フォーム	複数のデータ・フォームのメンバーが同時に表示されるため、たとえば、あるグリッドにデータを入力して、別のグリッドで集約された結果(収益の合計など)を確認できます	はい	いいえ	はい - XML	関連データ・フォーム
カスタム・メニュー	管理者が作成する企業に固有またはアプリケーションに固有のメニューです。ユーザーはメンバーを右クリックして、メニュー・アイテムを選択し、URL、データ・フォームまたはワークフローを開くことができます。	はい	いいえ	はい - XML	メニューのタイプがワークフローの場合は、プランニング・ユニットになります
意思決定パッケージ	新しいサービス、プログラム、ビジネス目標、または結果ベースの管理の結果や結果ベースの予算策定の提案。意思決定パッケージには、意思決定パッケージの実施に含まれる費用を識別し正当化する予算要求が含まれます。	はい	はい	はい - XML	意思決定パッケージのタイプ
意思決定パッケージの属性	意思決定パッケージのグループ化、フィルタ、または並べ替えに使用するカスタム属性	はい	はい	はい - XML	スマート・リスト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
意思決定パッケージのタイプ	意思決定パッケージや予算策定者が作成可能な予算要求の種類を定義する基本的なデータや動作を指定するテンプレート	いいえ	いいえ	はい - XML	関連付けられたフォーム、マッピング、次元
為替レート	ある通貨から別の通貨に変換する際に使用する数値です。たとえば、1USD を EUR に変換する場合、為替レートの 0.8936 に米ドルを乗じます。これにより、\$1 に相当するユーロは 0.8936 と算出されます。	はい	いいえ	はい - CSV	通貨、期間、および年
プランニング・ユニット階層	予算プロセスの一部とするアプリケーションのプランニング・ユニットおよびメンバーを指定します	はい	はい	はい - XML	エンティティ、シナリオ、バージョンおよびその他の関連付けられた次元
レポート・マッピング	Planning アプリケーションとレポート・アプリケーションの間の次元をマッピングすると、集計のためにレポート・アプリケーションの Planning データに対するレポート、スマート・リストでの集約およびクエリー、および複数のレポート・アプリケーションへの Planning データのリンクが有効になります	はい	はい	はい - XML	関連付けられた次元およびスマート・リスト
スマート・リストこのアーティファクトは EPM Architect ベースのアプリケーションの Planning アプリケーションの下には表示されません。	ユーザーが、データを入力するかわりにセルのデータからアクセスするカスタム・ドロップダウン・リスト	いいえ	いいえ	はい - CSV	なし
拡散パターン	親から子へのデータを分散する方法を判別するカスタム拡散パターンです。パターンは、「一括割当て」および「グリッド分散」メニューから選択できます。	いいえ	いいえ	はい - XML	なし
代替変数	定期的に変更される情報のグローバル・プレースホルダ	いいえ	いいえ	いいえ	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
タスク・リスト	特定のユーザーについて、タスクの詳細ステータスを示すリスト	はい	いいえ	はい - XML	タスクのタイプがデータ・フォームの場合は、関連付けられたデータ・フォームになります。タスクのタイプがワークふとーの場合は、プランニング・ユニットになります。

## プラン・タイプのアーティファクト

プラン・タイプは Planning アプリケーション情報を Essbase データベースに保管するために使用されます。別のデータベースには、アプリケーションの各プラン・タイプのデータが保管されます。また、このデータベースには、アプリケーションの設計、サイズおよびパフォーマンスを最適化するためにこのプラン・タイプに関連した情報が含まれています。デフォルトの Planning プラン・タイプには、Plan1、Plan2、および Plan3 があります。

表 45 プラン・タイプのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
属性次元	次元のリスト。次元のメンバーの属性や特質に基づいて分析が可能	はい	いいえ	はい - CSV	なし
計算スクリプト	データベースの集計方法や集約方法を定義する一連のコマンドです。集計プロセスとは別に、割当てや他の計算ルールを指定するコマンドが計算スクリプトに含まれることもあります。	はい	いいえ	はい	なし
Calculation Manager ルール	コンポーネントでグループ化されたテンプレートと計算を含めることのできるオブジェクト	はい	はい	はい - XML	なし



アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
データ・フォーム	Web ブラウザなどのインターフェースからデータベースにデータを入力でき、データまたは関連テキストを表示して分析できるグリッド表示です。一部の次元メンバー値は固定され、データが特定の視点から表示されます。  データ・フォームには、ビジネス・ポリシーおよびプラクティスの実装に役立つ事前定義されたデータ検証ルールが含まれます。入力したデータが検証ルールに違反した場合は、データ・フォームにエラーまたは警告が生成されます。	はい	いいえ	はい - XML	関連付けられたメタデータ、ユーザー変数および次元
レポート・スクリプト	プロダクション・レポートを生成する、Planning レポート・ライター・コマンドを格納したテキスト・ファイル	はい	いいえ	はい	なし
ルール・ファイル	必要な一連の結果値を生成するためにアプリケーション内に作成される論理式または式	はい	いいえ	いいえ(はい - Oracle Essbase Administration Services)	なし
標準次元	1 つのプラン・タイプに関連付けられている次元のリスト	はい	いいえ	はい - CSV	属性次元 (存在する場合)
代替変数	定期的に変更される情報のグローバル・プロセスホルダ	いいえ	いいえ	いいえ	なし

## リレーショナル・データのアーティファクト

表 46 リレーショナル・データのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
勘定科目の注釈	プレーン・テキストまたは URL リンクになっている、勘定科目に関連付けられたコメント	いいえ	いいえ	はい - XML	Account、Entity、Scenario、および Version の各次元
セル・テキスト	セルに関連付けられたテキストの注釈	いいえ	いいえ	はい - XML	なし
プランニング・ユニット	シナリオ、バージョン、およびエンティティの交差におけるデータ・スライス。プラン・データの準備、確認、注釈付けおよび承認のための基本単位	いいえ	いいえ	はい - XML	Entity、Scenario、および Version の各次元
サポート詳細	セルの値を算出した計算および仮定	いいえ	いいえ	はい - XML	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
テキスト値	データ型がテキストのセルにデータを保管するテキスト	いいえ	いいえ	はい - XML	なし

## セキュリティのアーティファクト

注： アクセス権は、リソースに対してユーザーが実行できる一連の操作です。

表 47 セキュリティのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
アクセス権: ユーザー	有効なシステム・ユーザーとしてプロビジョニングされた企業の担当者	いいえ	いいえ	はい - XML	なし
アクセス権: グループ	複数のユーザーに同様のアクセス権を割り当てるためのコンテナ	はい	いいえ	はい - XML	なし

## Planning の移行に関する考慮事項

- ライフサイクル管理での Planning 間の移行操作は、時間がかかります。
- Planning アーティファクトには、フォームには次元の依存関係があるなど、依存関係があるものもあります。ライフサイクル管理では、フォームに必要な次元メンバーのみが移行されるのではなく、すべての次元が移行されます。必要な依存関係を手動で選択する必要があります。43 ページの「アーティファクトの移行」を参照してください。
- ソース・アプリケーションと宛先アプリケーションのプラン・タイプ、カレンダー、および単一通貨や複数通貨の設定はすべて同じである必要があります。
- Planning がターゲット環境にない場合、ライフサイクル管理によってアプリケーション・シェルが作成されます。
- ライフサイクル管理を使用するには、Essbase が Shared Services モードになっている必要があります。
- Essbase アーティファクトは Planning アプリケーション・ノードの下に表示され、データ・アーティファクトは Essbase データ・カテゴリの下に表示されます。
- テストから本番環境への最初の移行の場合、Planning ノードの下にあるすべての Planning 関連のアーティファクトを移行することをお勧めします。
- Essbase データの移行は、増分の移行ではなく、テストから本番環境への最初の移行の場合のみお勧めします。

- Planning のデータ・アーティファクトをエクスポートまたはインポートするには、ライフサイクル管理に共有ファイル・システム・パスが必要です。

## Planning アプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係

Planning アプリケーションをある環境から他の環境(開発からテストまたはテストから本番環境)に移行する場合は、製品間のアーティファクトの依存関係が存在します。Planning では、Planning 固有のアーティファクトとともに、他の製品からアーティファクトを移行する必要があります。

- Planning の製品間アーティファクトには、次のとおりです:

- Essbase

**注:** Planning アーティファクトと共に表示される Oracle Essbase アーティファクトは、ルール・ファイル、計算スクリプト、および代替変数です。

- オプション: Reporting and Analysis (Financial Reporting と Web Analysis)

- Planning Performance Management Architect には、次の製品間アーティファクトが必要です。

- Performance Management Architect

- Shared Services のネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループおよびプロビジョニング)

- Oracle Hyperion Calculation Manager

- Reporting and Analysis(Financial Reporting と Web Analysis)

**注:** Essbase アーティファクトは Planning アーティファクトと一緒に表示されます。

## 移行におけるエクスポートとインポートのオプション

インポート時に、Planning アーティファクトは、宛先環境で既存のアーティファクトを置換します。インポート時にアーティファクトをマージまたは削除できません。

Planning には、製品固有のエクスポート・オプションおよびインポート・オプションはありません。

**注:** 以前のリリースでは、Shared Services Console において、Planning 用に「依存アーティファクトを含む」オプションが提供されていました。このオプションは存在しません。かわりに、必要な依存関係を手動で選択する必要があります。

# サンプルの移行定義ファイル

ここで提供されているサンプル移行定義ファイルは、Planning アプリケーションの移行用です。Planning の移行定義ファイルで使用されている製品コードは HP で、サンプル・アプリケーションは SampApp です。

**注：** 移行定義ファイルで正しい構文が使用されていない場合、「MDFファイルのフォーマットが正しくありません」というエラーが表示されます。

## ファイル・システムへのエクスポート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="Application" product="HP" project="Default Application Group"
application="HPAuto1" />
    <Target type="FileSystem" filePath="/HP-HPAuto1" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Configuration" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Plan Type" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Relational Data" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Security" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

---

## ファイル・システムからのインポート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="FileSystem" filePath="/HP-HPAuto1" />
    <Target type="Application" product="HP" project="Default Application Group"
application="HPAuto1" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Configuration" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Plan Type" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Relational Data" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Security" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

---

# ライフサイクル管理のログ・ファイル

Oracle Hyperion Planning のライフサイクル管理のログ・ファイルは、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide に記載されています。





# Profitability and Cost Managementとライフサイクル管理

## この付録の内容

Profitability and Cost Management アーティファクトについて.....	167
Profitability and Cost Management の役割の要件.....	169
Profitability and Cost Management の移行の要件.....	169
Profitability and Cost Management のアーティファクト・リスト.....	170
Profitability and Cost Management の移行と製品間アーティファクトの依存関係.....	174
移行におけるエクスポートとインポートのオプション.....	175
サンプルの移行定義ファイル .....	175
ライフサイクル管理のログ・ファイル.....	176

## Profitability and Cost Management アーティファクトについて

Profitability and Cost Management には、メタデータまたは次元アーティファクトとモデル・アーティファクトの2つのタイプのアーティファクトがあります。

メタデータまたは次元アーティファクトは、Performance Management Architect 対応です。Profitability and Cost Management の Performance Management Architect 対応のアーティファクトは、Foundation アプリケーション・グループの EPMA ノードの下にリストされます。このアーティファクトについては、[付録 H 「Performance Management Architect とライフサイクル管理」](#) で説明されています。

モデル・アーティファクトは、Performance Management Architect からの Profitability and Cost Management の配置の際にユーザーによって定義されたフォルダにリストされます。

Profitability and Cost Management アプリケーションには次の2種類があります: 標準 Profitability and Cost Management と詳細 Profitability and Cost Management です。ライフサイクル管理を使用して、これらの両方のアプリケーションのモデル・アーティファクトのリポジトリ・コンテンツを移行します。

### 標準 Profitability and Cost Management モデル・アーティファクト

- AssignmentRules
- Drivers
- Model

- AssignmentRuleSelections
- DriverExceptions
- DriverRules
- RegularAssignments
- POV
- Preferences
- SmartViewQueries
- Stages

#### 詳細 Profitability and Cost Management モデル・アーティファクト

- AssignmentRules
- CalculationConfig
- Drivers
- Model
  - POV1
    - Stage 1
      - CalculationRules
      - AssignmentRuleSelections
      - DriverExceptions
      - DriverRules
  - POV2
    - Stage 1
      - CalculationRules
      - AssignmentRuleSelections
      - DriverExceptions
      - DriverRules
- POV
- Preferences
- Processes
- Scripts
- SQLTemplates
- Stages
- TableRegistration
  - Tables
  - TableJoins
- Tasks



Profitability and Cost Management のモデル・アーティファクト・リストについては、170 ページの「[Profitability and Cost Management のアーティファクト・リスト](#)」を参照してください。

## Profitability and Cost Management の役割の要件

Profitability and Cost Management のライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります:

- LCM 管理者
- パワー・ユーザー
- 管理者

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

## Profitability and Cost Management の移行の要件

- Shared Services と Profitability and Cost Management をインストールして構成し、これらが実行されていることを確認します。Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに、LCM 管理者、パワー・ユーザー、およびアプリケーション管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。
- Performance Management Architect から Profitability and Cost Management にアプリケーションを配置します(すべての次元が使用可能なことを確認してください)。
- Profitability and Cost Management Performance Management Architect アプリケーションの場合 - 非次元アーティファクトを移行する前に、まず Performance Management Architect 次元を移行する必要があります。Performance Management Architect アーティファクトのリストについては、[付録 H 「Performance Management Architect とライフサイクル管理」](#)を参照してください。

# Profitability and Cost Management のアーティファクト・リスト

## サブトピック

- [アーティファクト・リストについて](#)
- [標準 Profitability and Cost Management モデル・アーティファクト](#)
- [詳細 Profitability and Cost Management モデル・アーティファクト](#)

Profitability and Cost Management モデル・アーティファクトは、Performance Management Architect からの Profitability and Cost Management の配置の際にユーザーによって定義されたフォルダにリストされます。

**注：** Shared Services Console に表示されるアーティファクトは、実装ごとに異なります。

## アーティファクト・リストについて

アーティファクト・リストについて次のことに注意してください：

- **アーティファクト - アーティファクト名**
- **説明** - アーティファクトの説明
- **最終変更時間** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトがインポートされた時間を反映します。アーティファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終変更ユーザー** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーティファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能** - 「はい」の場合、アーティファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーティファクトは製品内でのみ編集できます。NA の場合、アーティファクトは編集できません。
- **依存** - アーティファクトの依存関係を一覧表示します。たとえば、Profitability and Cost Management の割当てルール・アーティファクトを移行する場合は Profitability and Cost Management のステージ定義アーティファクトも移行する必要があります。

# 標準 Profitability and Cost Management モデル・アーティファクト

表 48 標準 Profitability and Cost Management モデル・アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
AssignmentRules	単一の宛先ステージのメンバー・セットおよびオプションのフィルタ・セットの集合。これらは、同じパラメータを使用する複数の割当てに対して作成および再利用できます。	はい	いいえ	N/A	Stages
Drivers	Profitability and Cost Management モデル内で、割当ての値を計算します。ドライバ定義は、ソース交差値を宛先交差に割り当てる式を提供します。	はい	いいえ	N/A	なし
Model	<p>選択した POV に基づく特定の標準 Profitability モデルのモデル要素。次のモデル・コンポーネントがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● AssignmentRuleSelections - ソースから宛先へのデータ・フローを定義します。宛先は、ソース交差を1つ以上の宛先割当てルールにマッピングすることで定義します。</li> <li>● DriverExceptions - ドライバの作成後にドライバに適用されます。ドライバは、適用先の単一交差に関連付ける必要があります。</li> <li>● DriverRules - ドライバの作成後にドライバに適用されます。ドライバは、適用先のドライバ次元メンバーに関連付ける必要があります。</li> <li>● RegularAssignments - ソースから宛先へのデータ・フローを定義します。宛先は、ソース交差を単一の宛先交差にマッピングすることで定義します。</li> </ul>	N/A	いいえ	N/A	POV、Stages
POV	年、期間、ステータスなど、選択したスナップショット用のモデルのバージョン。	はい	いいえ	N/A	なし
Preferences	モデル全体に適用される設定。プリファレンスには、ステージ内の割当てを許可するか、または多次元ステージを持つことができるかどうかなどが含まれます。選択したモデルの Essbase 接続情報は、アプリケーション・プリファレンスで指定します。	はい	いいえ	N/A	なし
SmartViewQueries	Profitability and Cost Management アプリケーションに留まることにより、Essbase キューブ(ASO および BSO)のデータのクエリーを実行します。	はい	はい	いいえ	なし
Stages	Profitability and Cost Management モデルでの、モデル内のプロセスまたはアクティビティ。	はい	いいえ	N/A	なし

# 詳細 Profitability and Cost Management モデル・アーティファクト

表 49 詳細 Profitability and Cost Management モデル・アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
AssignmentRules	宛先ステージまたはソース・ステージ内のセットを識別するオプションのフィルタ・セットおよびメンバー・セットの集合。	はい	いいえ	N/A	Stages、TableRegistration
CalculationConfig	バルク編集拡張、ドライバ操作タイプなど、使用可能な計算処理。  注： CalculationConfig アーティファクトのインポートまたはエクスポートはお勧めしません。管理者にこのタイプのアーティファクトが必要かどうかを確認してください。	はい	いいえ	N/A	Processes
Drivers	詳細 Profitability モデルで使用可能なドライバ。ドライバは割当ての値を計算し、ソース交差値を宛先交差に割り当てる式を提供します。	はい	いいえ	N/A	Preferences、CalculationConfig
Model	選択した POV に基づく特定の詳細 Profitability モデルのモデル要素。次のモデル・コンポーネントがあります。  <ul style="list-style-type: none"> <li>割当てと計算フローの定義に使用される CalculationRules 最上位モデル定義のアーティファクト。CalculationRules のタイプは、計算済メジャー、単一ソース割当て、複数ソース割当てです。</li> <li>AssignmentRuleSelections - ソースから宛先へのデータ・フローを定義します。宛先は、ソース交差を 1 つ以上の宛先割当てルールにマッピングすることで定義します。</li> <li>DriverExceptions - ドライバの作成後にドライバに適用されます。ドライバは、適用先の単一交差に関連付ける必要があります。</li> <li>DriverRules - ドライバの作成後にドライバに適用されます。ドライバは、適用先のドライバ次元メンバーに関連付ける必要があります。</li> </ul>	N/A	いいえ	N/A	Stages、AssignmentRules、Drivers、POV
POV	年、期間、ステータスなど、選択したスナップショット用の、モデルの特定のバージョン。	はい	いいえ	N/A	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
Preferences	モデル全体に適用される設定。 <b>注：</b> アプリケーションをインポートする前に、 <code>model.data.schema</code> プリファレンスをターゲット・システムでの正しい値に設定することをお勧めします。ターゲット・システムにこのプリファレンスの値が設定されていると、インポート時に上書きされません。	はい	いいえ	N/A	なし
Processes	計算のタイプごとに定義されているプロセスの定義。 <b>注：</b> Processes アーティファクトのインポートまたはエクスポートはお勧めしません。管理者にこのタイプのアーティファクトが必要かどうかを確認してください。	はい	いいえ	N/A	Tasks
スクリプト	計算の前後に実行される <code>HPM_SQL_SCRIPT</code> テーブルの HPM 製品スキーマに保存されているカスタムの SQL スクリプト。	N/A	いいえ	N/A	なし
SQLTemplates	各計算タイプ内でタスクを実行するように発行された SQL の定義。 <b>注：</b> SQLTemplates アーティファクトのインポートまたはエクスポートはお勧めしません。管理者にこのタイプのアーティファクトが必要かどうかを確認します。	はい	いいえ	N/A	なし
Stages	詳細 Profitability モデルでは、ソース・ステージと宛先ステージがあります。	はい	いいえ	N/A	Preferences、TableRegistration
TableRegistration	ユーザー定義テーブルの詳細 Profitability アプリケーションへの登録およびマッピング。アプリケーションのソースおよび宛先テーブルの定義、関連する参照テーブルのテーブル結合。	N/A	いいえ	N/A	Preferences
Tasks	計算のタイプごとに実行されるタスクの定義。 <b>注：</b> Tasks アーティファクトのインポートまたはエクスポートはお勧めしません。管理者にこのタイプのアーティファクトが必要かどうかを確認します。	はい	いいえ	N/A	SQLTemplates

## 計算制御アーティファクト

詳細 Profitability and Cost Management アプリケーションでは、計算プロセスと呼ばれる高度な新しい構成を使用して、モデルの計算方法を定義したり、リレーショナル・データベース内で実行する特定の他の処理操作を定義します。これらの計算制御アーティファクトは、ドライバ操作タイプおよびその他のプロセス・タイプに関連しています。詳細は、Oracle Hyperion Profitability and Cost Management Administrator's Guide の詳細計算オプションを参照してください。

次の Lifecycle Management 計算制御アーティファクトは、計算プロセス定義および管理に関連しています:

- CalculationConfig
- Processes
- SQLTemplates
- Tasks

これらのアーティファクトの変更は、高度でドキュメントに記載されていないアクティビティであり、Oracle サポートの指示がある場合のみ実行できます。そのため、Oracle サポートによる指示があった時にのみ、計算制御アーティファクトをエクスポートまたはインポートすることが適切です。Oracle サポートからそれ以外の指示がないかぎり、Shared Services Console を使用してアプリケーション・アーティファクトをエクスポートまたはインポートする場合には、これらの計算プロセス・アーティファクトは無視してください。

異なるデータベース・プラットフォーム(Oracle または SQL Server など)または異なるバージョンの製品を使用している可能性がある環境でアプリケーションを移行する場合、これらのアーティファクトをエクスポートおよびインポートの対象から除外することが特に重要です。エクスポートする前にこれらのアーティファクトを選択解除してエクスポート・ファイルから除外します。これらのアーティファクトのいずれかを含む以前のエクスポートからアプリケーション・アーティファクトをインポートしている場合、インポートする前に確実に選択解除してください。

## Profitability and Cost Management の移行と製品間アーティファクトの依存関係

Profitability and Cost Management アプリケーションをある環境から他の環境(開発からテストまたはテストから本番環境)に移行する場合は、製品間のアーティファクトの依存関係が存在します。Profitability and Cost Management では、Profitability and Cost Management 固有のアーティファクトとともに、次の他の製品からアーティファクトを移行する必要があります。

- Shared Services のネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループおよびプロビジョニング)
- Essbase(標準 Profitability and Cost Management のみ)

# 移行におけるエクスポートとインポートのオプション

## サブトピック

- [移行のエクスポート・オプション](#)
- [移行のインポート・オプション](#)

## 移行のエクスポート・オプション

Profitability and Cost Management には、製品固有のエクスポート・オプションはありません。

**注：** 標準 Profitability and Cost Management の場合、Essbase アーティファクトが Essbase アプリケーションの下にエクスポートされます(アウトライン、データ、計算スクリプト)。

## 移行のインポート・オプション

Profitability and Cost Management には、製品固有のエクスポート・オプションはありません。

**注：** ライフサイクル管理により、ターゲット・モデルに存在しない場合のみ、アーティファクトがインポートされます。既存のアーティファクトは置換またはマージされません。

## サンプルの移行定義ファイル

Profitability and Cost Management の移行定義ファイルに使用される製品コードは HPM です。

**注：** 移行定義ファイルで正しい構文が使用されていない場合、「MDFファイルのフォーマットが正しくありません」というエラーが表示されます。

## ファイル・システムへのエクスポート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="Application" product="HPM" project="Default Application Group"
application="Bikes72" />
    <Target type="FileSystem" filePath="/HPCM-Bikes72" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/AssignmentRules" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Drivers" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Model" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

```
<Artifact recursive="true" parentPath="/POV" pattern="*" />
<Artifact recursive="true" parentPath="/Preferences" pattern="*" />
<Artifact recursive="true" parentPath="/Stages" pattern="*" />
</Task>
</Package>
```

---

## ファイル・システムからのインポート

---

```
<xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="FileSystem" filePath="/HPCM-Bikes72" />
    <Target type="Application" product="HPM" project="Default Application Group"
application="Bikes72" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/AssignmentRules" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Drivers" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Model" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/POV" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Preferences" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Stages" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

---

## ライフサイクル管理のログ・ファイル

Profitability and Cost Management のライフサイクル管理のログ・ファイルは、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide に記載されています。

**注：** 詳細は、S9 ロギングのロギング・セクションで説明されています。





# Reporting and Analysisとライフサイクル管理

## この付録の内容

Reporting and Analysis のアーティファクトについて .....	177
Reporting and Analysis の役割の要件 .....	177
Reporting and Analysis の移行の前提条件 .....	178
Reporting and Analysis のアーティファクト・リスト .....	179
ファイル・システム上での個別の Reporting and Analysis アーティファクトの編集 .....	186
Reporting and Analysis のアーティファクト・タイプ .....	187
Reporting and Analysis の移行に関する考慮事項 .....	189
Reporting and Analysis アプリケーションの移行および製品間のアーティファクトの依存関係 .....	189
移行におけるエクスポートとインポートのオプション .....	190
サンプルの移行定義ファイル .....	190
ライフサイクル管理のログ・ファイル .....	191

## Reporting and Analysis のアーティファクトについて

Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理を使用して、これらの Reporting and Analysis モジュールのリポジトリのコンテンツを移行します。

- Financial Reporting
- Interactive Reporting
- Production Reporting
- Web Analysis

Reporting and Analysis のアーティファクトについては、[179 ページの「Reporting and Analysis のアーティファクト・リスト」](#)を参照してください。

## Reporting and Analysis の役割の要件

Reporting and Analysis のライフサイクル管理操作を実行するユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります:

- LCM 管理者
- Reporting and Analysis グローバル管理者

**注：** Reporting and Analysis グローバル管理者の役割は、Financial Reporting のアーティファクトをリリース 9.3.x からエクスポートする場合に必要です。

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

## Reporting and Analysis の移行の前提条件

- Shared Services および Reporting and Analysis をインストールして構成し、これらが実行中であることを確認します。Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに LCM 管理者および Reporting and Analysis グローバル管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。
- Shared Services ネイティブ・ディレクトリのアーティファクト(ユーザー、グループ、役割および割り当てられた役割)を移行します。56 ページの「[ネイティブ・ディレクトリ\(セキュリティ\)の移行](#)」を参照してください。
- 宛先ホストの Production Reporting でのジョブ・サービス・プロパティを構成します。178 ページの「[宛先アプリケーションにおける Production Reporting ジョブ・サービス・プロパティの構成](#)」を参照してください。
- Interactive Reporting のジョブにデータ・アクセス・サービスのデータ・ソースを作成します。179 ページの「[宛先アプリケーションでの Interactive Reporting データ・アクセス・サービスのデータ・ソースの作成](#)」を参照してください。

## 宛先アプリケーションにおける Production Reporting ジョブ・サービス・プロパティの構成

Production Reporting のアーティファクトをインポートする前に、Production Reporting の宛先ホストのジョブ・サービス・プロパティを構成する必要があります。

- ▶ Production Reporting のジョブ・サービス・プロパティを構成するには:
  - 1 EPM Workspace に Reporting and Analysis 管理者としてログインします。
  - 2 「ナビゲート」>「管理」>「Reporting and Analysis」>「Production Reporting エンジン」を選択します。
  - 3 PR エンジンが存在しない場合、「Production Reporting エンジン」タブの空の領域を右クリックし、「新規 PR エンジンの作成」を選択します。

- 4 「エンジン・タイプ」に **SQR** 製品バイナリの場所を追加し、「OK」をクリックします。

## 宛先アプリケーションでの Interactive Reporting データ・アクセス・サービスのデータ・ソースの作成

Interactive Reporting ジョブの宛先アプリケーションに、データ・アクセス・サービス(DAS)のデータ・ソースを作成します。

▶ Interactive Reporting の DAS データ・ソースを作成するには:

- 1 Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace に Reporting and Analysis 管理者としてログインします。
- 2 「ナビゲート」>「管理」>「Reporting and Analysis」>「サービス」を選択します。
- 3 Interactive Reporting のデータ・アクセス・サービスのプロパティを編集します。
- 4 「データ・ソース」タブを選択します。「新規」をクリックして、データ・ソースを作成します。
- 5 データ・ソースの詳細を追加します。

**注：** DAS データ・ソースの名前は、ソース・アプリケーションでの名前と一致している必要があります。名前が一致しない場合、DAS サービスは該当するデータ・ソースを検出できません。これは、その名前が Interactive Reporting 接続ファイル(.oce)で使用されているためです。このファイルは、移行時にも変更されません。

## Reporting and Analysis のアーティファクト・リスト

### サブトピック

- [アーティファクト・リストについて](#)
- [物理リソースのアーティファクト](#)
- [セキュリティのアーティファクト](#)
- [スケジュール・オブジェクトのアーティファクト](#)
- [製品プリファレンスのアーティファクト](#)
- [リポジトリ・オブジェクトのアーティファクト](#)
- [管理オプションのアーティファクト](#)

Reporting and Analysis のアーティファクトは、Shared Services Console 内の Reporting and Analysis アプリケーション・グループに一覧表示されます。

**注：** Shared Services Console に表示されるアーティファクトは、実装ごとに異なります。

## アーティファクト・リストについて

アーティファクト・リストについて次のことに注意してください:

- **アーティファクト** - アーティファクト名
- **説明** - アーティファクトの説明
- **最終変更時間** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトがインポートされた時間を反映します。アーティファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終変更ユーザー** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーティファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能** - 「はい」の場合、アーティファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーティファクトは製品内でのみ編集できます。

**注:** Reporting and Analysis のアーティファクトを編集する場合の考慮事項があります。186 ページの「[ファイル・システム上での個別の Reporting and Analysis アーティファクトの編集](#)」を参照してください。

- **依存** - アーティファクトの依存関係を一覧表示します。たとえば、反復タイム・イベントのアーティファクトを移行する場合は、カスタム・カレンダーのアーティファクトも移行する必要があります。

## 物理リソースのアーティファクト

「物理リソース」ディレクトリには、プリンタや出力ディレクトリなどのシステムによって管理されるオブジェクトを表すアーティファクトが含まれています。

表 50 物理リソースのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
定義済のプリンタ	ジョブが実行中の場合に印刷サーバーで使用可能なプリンタ	いいえ	いいえ	はい - XML	なし
出力ディレクトリ	エクスポート・ファイルまたは Interactive Reporting のドキュメントを保存するディレクトリ	いいえ	いいえ	はい - XML	なし

## セキュリティのアーティファクト

「セキュリティ」ディレクトリには、ユーザー・プリファレンスのアーティファクトが含まれています。

表 51 セキュリティのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
ユーザー・プリファレンス	デフォルトの起動オプション	いいえ	いいえ	はい - XML	関連するリポジトリ・オブジェクト

## スケジュール・オブジェクトのアーティファクト

スケジュール・オブジェクト・ディレクトリには、イベント、カレンダー、ジョブ・スケジュールおよびジョブ・パラメータなどのスケジュール済のオブジェクトを表すアーティファクトが含まれています。

表 52 スケジュール・オブジェクトのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
外部でトリガーされるイベント	ジョブを実行するトリガー	はい	はい	はい - XML	なし
反復タイム・イベント	ジョブを実行するトリガー	はい	はい	はい - XML	カスタム・カレンダー、外部でトリガーされるイベント
カレンダー	ユーザー定義の期間、およびその関係です。カレンダー会計年度は、Q1、Q2、Q3 および Q4 から構成されます。	いいえ	いいえ	はい - XML	なし
ジョブのスケジュール	実行するジョブと、ジョブを実行する時刻やジョブ・パラメータ・リストを指定します	はい	はい	はい - XML	イベント、ジョブ・パラメータ、ジョブ
ジョブ・パラメータ	ジョブ・パラメータには「個人」と「パブリック」の2つがあります。個人はその所有者のみがアクセスでき、パブリックはジョブ・パラメータの ACL にアクセス権があるすべてのユーザーがアクセスできます。	いいえ	はい	はい - XML	ジョブ、物理リソース

## 製品プリファレンスのアーティファクト

製品プリファレンスのディレクトリには、お気に入り、個人用ページ、サブスクリプションなどの製品プリファレンスを表すアーティファクトが含まれています。

表 53 製品プリファレンスのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
お気に入り	ユーザーが頻繁に使用するドキュメントを特別なメニューに追加できる機能	いいえ	いいえ	はい - XML	なし
個人用ページ	リポジトリ情報を参照するための個人用ウィンドウです。表示する情報、およびレイアウトと色を選択します。	いいえ	いいえ	はい - XML	なし
サブスクリプション	新しいコンテンツに登録できるようにするコントロール	いいえ	はい	はい - XML	関連するリポジトリ・オブジェクト

## リポジトリ・オブジェクトのアーティファクト

「リポジトリ・オブジェクト」ディレクトリには、フォルダ、サード・パーティのコンテンツ、ショートカット、URL などの、リポジトリ・オブジェクトを表すアーティファクトと、Oracle Hyperion Financial Reporting、Interactive Reporting および Web Analysis に特有なアーティファクトが含まれています。

表 54 リポジトリ・オブジェクトのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能? <sup>1</sup>	依存
フォルダ	他のファイルを含んで階層を形成するファイル	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	なし
サード・パーティのコンテンツ	Microsoft Word や Excel などの補助的な製品からインポートされたコンテンツ	はい	はい	はい - XML <sup>2</sup>	なし
ショートカット	既存のリポジトリ・オブジェクトへのショートカット	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	対応する既存のリポジトリ・オブジェクト
URL	別のオブジェクトとしてパブリッシュされた Web リンク	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能? <sup>1</sup>	依存
Oracle Hyperion Financial Reporting, Fusion Edition の注釈	特定のレポート・オブジェクトおよびデータで共有できるコラボレーション情報	はい	はい	いいえ	次のタイプの Financial Reporting オブジェクト: <ul style="list-style-type: none"> <li>データ・ソース</li> <li>グリッド: データ・ソース(次元 POV なし)</li> <li>テキスト、チャート、グリッドまたはイメージ</li> <li>セルまたは部分的な POV (たとえば、レポートの行または列)</li> </ul>
Financial Reporting のブック	同じ種類の Financial Reporting ドキュメントのグループを保持するコンテナ。ブックでは、次元セクションや次元変更を指定できます。	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	レポート、サード・パーティのドキュメント
Financial Reporting のバッチ	転送または印刷を目的とした 1 つのグループにまとめられたファイルの累積	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	レポート、ブック、関連する Financial Reporting のリポジトリ・オブジェクト
Financial Reporting チャート	棒グラフ、折れ線グラフ、複合グラフまたは円グラフを使用してデータをグラフィカルに表示するレポート・オブジェクト	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	なし
Financial Reporting のグリッド	行、列およびページ軸にデータを取得するレポート・オブジェクト	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	なし
Financial Reporting のイメージ	グラフィックまたはイメージ・ファイルを含むレポート・オブジェクト	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	なし
Financial Reporting のレポート	テキスト・ボックス、イメージ、グリッドおよびチャートなどの動作や外観が事前定義された Financial Reporting ドキュメント	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	イメージ、グリッド、テキストボックス、グラフ
Financial Reporting の行と列のテンプレート	グリッド内の行や列に基づいたテンプレート	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	なし
Financial Reporting のスケジュール済バッチ・ジョブ	実行するバッチ・ジョブと、ジョブを実行する時刻やジョブ・パラメータ・リスト	はい	はい	いいえ	財務レポート、Financial Reporting ブック

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能? <sup>1</sup>	依存
Financial Reporting スナップショット・ブック	同じ種類の Financial Reporting ドキュメントのグループを保持するコンテナ。すべての Financial Reporting ドキュメントはその期間の静的データを含んでいるスナップショットに変換されます。	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	なし
Financial Reporting スナップショット・レポート	ドキュメントに静的データを含む Financial Reporting ドキュメントは、データ・ソースから切断され、データが変更されたときに更新されません。	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	なし
Financial Reporting のテキスト	Financial Reporting レポートに関連付けることができるテキスト・オブジェクト	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	なし
Financial Reporting のユーザー POV	データ・ソースのユーザー固有の視点 (POV)	はい	はい	いいえ	財務レポート
汎用ジョブ	汎用ジョブ・ファクトリに対して実行中のジョブ	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	汎用ジョブ、必要なファイル、カスタム・フォーム
汎用ジョブの出力	汎用ジョブからの出力	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	汎用ジョブ
Interactive Reporting のドキュメント	データベースから情報を取得し、情報を分析し、レポートを構築するために作成および使用するファイル	はい	はい	いいえ <sup>3</sup>	OCE ファイル
Interactive Reporting ジョブの出力	Interactive Reporting ジョブからの出力	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	Interactive Reporting ジョブ
OCE ファイル	Interactive Reporting データベース接続	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	接続メタデータが含まれるその他の OCE ファイル
Production Reporting のジョブ	出力を生成するために起動できる特別なプロパティを持つドキュメント	はい	はい	はい - XML	データソース、必要なファイル(データ・ファイル、イメージなど)
Production Reporting ジョブの出力	Production Reporting ジョブからの出力	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	Production Reporting のジョブ
Web Analysis データベース接続	Web Analysis データソースに接続するためのメタデータ・オブジェクト	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	なし



アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能? <sup>1</sup>	依存
Web Analysis のドキュメント	データ・オブジェクト内のデータ・ソースから戻されたデータの値を表示するドキュメント。複数のデータ・オブジェクトを複数の表示タイプで1つのドキュメントに表示できます。	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	なし
Web Analysis リンク	他の Web Analysis オブジェクトにリンクされている Web Analysis オブジェクト	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	対応する Web Analysis オブジェクト
Web Analysis プレゼンテーション	Web Analysis レポートの集合	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	対応する Web Analysis レポート
Web Analysis ユーザー・プリファレンス	Web Analysis 固有のユーザー・プリファレンスを示すオブジェクト	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	なし
Web Analysis ショートカット	他の Web Analysis オブジェクトをポイントする Web Analysis オブジェクト	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	対応する Web Analysis オブジェクト

<sup>1</sup>ほとんどのリポジトリ・オブジェクトのアーティファクトの場合、ファイル・システム上で編集できるのは、アーティファクト・メタデータ(それぞれのオブジェクト・メタデータを含む XML ファイル)のみです。詳細は、186 ページの「ファイル・システム上での個別の Reporting and Analysis アーティファクトの編集」を参照してください。

<sup>2</sup>サードパーティ製オブジェクトは、適切なエディタで編集する必要があります。たとえば、.doc ファイルのコンテンツは、Microsoft Word で編集できます(ファイル名を変更してから編集し、ファイル名を元の名前に戻します)。

<sup>3</sup>Interactive Reporting ドキュメントのバイナリは、Interactive Reporting クライアントで編集できます(ファイル名を .bqy に変更してから編集し、名前を元に戻す必要があります)が、この方法は使用しないでください。ファイルがそのメタデータと不整合を起こす可能性があるためです。Interactive Reporting ドキュメントの編集は、製品内のみで行うことを強くお勧めします。

## 管理オプションのアーティファクト

管理オプションのディレクトリには、Production Reporting のデータソースおよび汎用ジョブ構成などの管理上のオプションを表すアーティファクトが含まれています。

**注：** コンピュータに固有のアーティファクトは移行できません。これらのアーティファクトは移行を開始する前に、宛先環境で手動定義する必要があります。

表 55 製品プリファレンスのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
Production Reporting データ・ソース	Reporting and Analysis 内の Production Reporting ジョブで使用されるデータ・ソースの定義。データベース接続タイプ(ODBC など)、データベース接続名(ODBC データ・ソース名など)およびオプションの環境変数などとして定義されます。	いいえ	いいえ	はい - XML	なし
汎用ジョブの構成 <sup>1</sup>	サード・パーティのアプリケーションなど、汎用の Reporting and Analysis ジョブを実行する場合に使用する汎用アプリケーションの定義	いいえ	いいえ	はい - XML	なし

<sup>1</sup> 共通の定義は移行できますが、実行可能ファイルは移行できません。実行可能ファイルは、汎用ジョブを移行した後に汎用ジョブの構成ごとに手動で定義する必要があります。

## ファイル・システム上での個別の Reporting and Analysis アーティファクトの編集

ファイル・システム上で編集するために Reporting and Analysis のアーティファクトをエクスポートする場合、アーティファクトは次のようにエクスポートされません。

- 一般的なオブジェクト(ドキュメント、PDF ファイルなど)、BQY ファイルとジョブ、OCE ファイル、SQR ジョブと汎用ジョブ

編集目的のこれらのファイルは、ZIP 形式のアーカイブのファイル・セットとしてエクスポートされます。ZIP アーカイブには、オブジェクトのメタデータを含む 1 つの XML ファイルと、FS リポジトリからの 1 つ以上のバイナリ・ファイルが含まれます。

これらのファイルを編集するには:

1. アーティファクトをエクスポートします。53 ページの「編集する個々のアーティファクトのエクスポートとインポート」を参照してください。
2. コンテンツを unzip します。
3. バイナリ・ファイルの名前を書き留めてから名前を変更することで、オペレーティング・システムで適切なアプリケーションを使用してファイルを展開できるようにします(たとえば、拡張子.BQY を追加します)。
4. アーティファクトを編集します。
5. バイナリ・ファイルの名前を手順 3 で書き留めた元の名前に変更します。
6. 置換オプションを使用して、編集済のファイルをアーカイブに追加します。
7. アーカイブを元のアプリケーションにインポートします。54 ページの「編集後の個々のアーティファクトのインポート」を参照してください。

- Financial Reporting のオブジェクト

Financial Reporting のオブジェクトは、これまでに示したオブジェクトと同様にエクスポートされます。編集目的で Financial Reporting オブジェクトをエクスポートすることで生成された ZIP アーカイブには、メタデータを含む 1 つの XML ファイルと Reporting and Analysis 内の Financial Reporting オブジェクトを内部的に表すファイルのセットが含まれます。バイナリ表記は編集できないため、編集できるのはオブジェクトのメタデータのみです。

- Web Analysis のオブジェクト

これらのオブジェクトは、zip 形式で圧縮された XML ファイルとして表示され、Web Analysis アーティファクトのメタデータと実際のコンテンツが含まれます。これらは編集できますが、ファイル・システム上のオブジェクトを操作するツールは提供されていません。また、ファイルが編集され、アプリケーションに戻された後の整合性の維持は保証されていません。

## Reporting and Analysis のアーティファクト・タイプ

ライフサイクル管理ユーティリティでは、アーティファクト・タイプに基づく Reporting and Analysis のアーティファクトの移行をサポートしています。次の表に、Reporting and Analysis の有効なアーティファクト・タイプを示します。

**注：** アーティファクト・タイプのパラメータは、Shared Services Console でも、その他の EPM System 製品でもサポートされていません。アーティファクト・タイプは、ライフサイクル管理ユーティリティでのみの機能です。

表 56 Reporting and Analysis のアーティファクト・タイプ

アーティファクト	アーティファクト・タイプ
カスタム・カレンダー	Calendar
外部でトリガーされたイベント	ExternallyTriggeredEvent
フォルダ	Folder
汎用製品の構成	GenericProduct
ジョブ・パラメータ	JobParameter
ジョブ・スケジュール	JobSchedule
ユーザーのお気に入りのリスト	Favorites
OCE ファイル	OCEFile
出力ディレクトリ定義	OutputDirectory
個人用ページ	PersonalPageContent
プリンタ定義	Printer

アーティファクト	アーティファクト・タイプ
反復タイム・イベント	RecurringTimeEvent
サブスクリプション	Subscription
ユーザー・プリファレンス	UserPreferences
汎用ジョブ	ProgramCollection
汎用ジョブの出力	OutputCollection
ショートカット	ショートカット
サード・パーティのコンテンツ	application/pdf、image/gif、image/jpeg(など)
URL	URL
Oracle Hyperion Financial Reporting, Fusion Edition の注釈	application/hyperion-annotation
Financial Reporting バッチ	application/hyperion-reports-batch
Financial Reporting ブック	application/hyperion-reports-book
Financial Reporting のチャート・オブジェクト	application/hyperion-reports-chart
Financial Reporting のデータベース接続	application/hyperion-reports-data_source
Financial Reporting のグリッド・オブジェクト	application/hyperion-reports-grid
Financial Reporting のイメージ・オブジェクト	application/hyperion-reports-image
Financial Reporting レポート	application/hyperion-reports-report
Financial Reporting のスケジュール済バッチ	application/hyperion-reports-batch_job_object
Financial Reporting のテキスト・オブジェクト	application/hyperion-reports-text
Financial Reporting スナップショット・ブック	application/hyperion-reports-snapshot_book
Financial Reporting スナップショット・レポート	application/hyperion-reports-snapshot_report
Financial Reporting のユーザー POV	application/hyperion-reports-pov
Financial Reporting の行と列のテンプレート・オブジェクト	application/hyperion-reports-row_column
Interactive Reporting ドキュメントとジョブ	application/x-brioquery
Oracle Hyperion Interactive Reporting ジョブの出力	BrioQueryOutputCollection
Production Reporting のジョブ	application/x-SQR
Production Reporting ジョブの出力	SQRProgramOutput
Oracle Hyperion SQR Production Reporting サブサービス	PRSubService
Web Analysis DB 接続 - Essbase	application/hyperion-analyzer-db-essbase
Web Analysis DB 接続 - Financial Management	application/hyperion-analyzer-db-hfm

アーティファクト	アーティファクト・タイプ
Web Analysis DB 接続 - Relational	application/hyperion-analyzer-db-sql
Web Analysis DB 接続 - SAP - Infocube	application/hyperion-analyzer-db-sap-infocube
Web Analysis DB 接続 - SAP - Infoset	application/hyperion-analyzer-db-sap-infoset
Web Analysis DB 接続 - SAP - Multiprovider	application/hyperion-analyzer-db-sap-multiprovider
Web Analysis DB 接続 - SAP - ODS	application/hyperion-analyzer-db-sap-ods
Web Analysis DB 接続 - SAP - Querycube	application/hyperion-analyzer-db-sap-querycube
Web Analysis DB 接続 - SSAS	application/hyperion-analyzer-db-ssas
Web Analysis レポート	application/hyperion-analyzer-report
Web Analysis プレゼンテーション	application/hyperion-analyzer-presentation
Web Analysis ユーザー・プリファレンス	application/hyperion-analyzer-preferences
Web Analysis リンク	application/hyperion-analyzer-link
Oracle Hyperion Web Analysis のショートカット	application/hyperion-analyzer-shortcut

## Reporting and Analysis の移行に関する考慮事項

Financial Reporting データ・ソースは Oracle Hyperion Financial Reporting レポート定義とともに移行されます。ただし、それらに対応するレポートが最初に開かれたときにのみターゲットで作成されます。データ・ソースはレポートが呼び出されたときに作成された後でのみデータベース接続マネージャで表示されます。

## Reporting and Analysis アプリケーションの移行および製品間のアーティファクトの依存関係

Reporting and Analysis アプリケーションをある環境から他の環境(開発からテストまたはテストから本番環境)に移行する場合は、製品間のアーティファクトの依存関係が存在します。Reporting and Analysis では、Shared Services ネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループおよびプロビジョニング)のアーティファクトを Reporting and Analysis 固有のアーティファクトとともに移行する必要があります。

# 移行におけるエクスポートとインポートのオプション

## サブトピック

- [移行のエクスポート・オプション](#)
- [移行のインポート・オプション](#)

エクスポートおよびインポートのオプションにアクセスするには、Shared Services Console を起動し、「管理」、「移行オプション」を選択します。

**注：** 以前のリリースでは、Shared Services Console において、Reporting and Analysis 用に「依存アーティファクトを含む」オプションが提供されていました。このオプションは使用できなくなりました。かわりに、必要な依存関係を手動で選択する必要があります(たとえば、以前の移行でインポートされなかった依存オブジェクト)。

## 移行のエクスポート・オプション

Reporting and Analysis のエクスポート・オプション:

- 「ジョブ出力付きのエクスポート」 - 「はい」の場合は、ジョブはその出力がエクスポート・フィルタと一致しない場合でも、出力とともにエクスポートされます。デフォルト値は「はい」です。

## 移行のインポート・オプション

Reporting and Analysis のインポート・オプション

- 「インポートでジョブ出力を除外」 - 「はい」の場合、インポート・フィルタに一致している場合でもインポートではすべてのジョブ出力がスキップされます。デフォルト値は「いいえ」です。
- 「新規アーティファクトのみ置換」 - 「はい」の場合、リポジトリ内のアーティファクトと比較してファイル・システムの最終変更のタイムスタンプがより新しいアーティファクトのみがインポートおよび置換されます。デフォルト値は「いいえ」で、最終変更のタイムスタンプに関係なく、宛先環境の既存のアーティファクトが置換されます。

## サンプルの移行定義ファイル

Reporting and Analysis の移行定義ファイルで使用される製品コードは HAVA です。

**注：** 移行定義ファイルで正しい構文が使用されていない場合、「MDFファイルのフォーマットが正しくありません」というエラーが表示されます。

## ファイル・システムへのエクスポート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="Application" product="HAVA" project="Reporting and Analysis"
application="Reporting and Analysis" />
    <Target type="FileSystem" filePath="/RnA-Reporting and Analysis" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Admin Options" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Physical Resources" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Product Preferences" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Repository Objects" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Schedule Objects" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Security" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

## ファイル・システムからのインポート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="FileSystem" filePath="/RnA-Reporting and Analysis" />
    <
Target type="Application" product="HAVA" project="Reporting and Analysis"
application="Reporting and Analysis" /
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Admin Options" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Physical Resources" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Product Preferences" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Repository Objects" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Schedule Objects" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Security" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

## ライフサイクル管理のログ・ファイル

Reporting and Analysis のライフサイクル管理のログ・ファイルは、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide に記載されています。

**注：** ライフサイクル管理のログ・ファイルは、MIDDLEWARE\_HOME/  
user\_projects/epmsystem1/diagnostics/logs/migration にあります。  
製品のログ・ファイル(Oracle Hyperion Reporting and Analysis のエクスポート・インポート・エンジン)は、MIDDLEWARE\_HOME/user\_projects/  
epmsystem1/diagnostics/logs/ReportingAnalysis/eiengine.log にあります。





# Shared Servicesとライフサイクル管理

## この付録の内容

Shared Services のアーティファクトについて .....	193
Shared Services の役割の要件 .....	194
Shared Services の移行の前提条件.....	194
Shared Services のアーティファクト・リスト .....	195
Shared Services アプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係 .....	196
Shared Services ネイティブ・ディレクトリの移行オプション.....	197
Shared Services タスク・フロー移行のエクスポート・オプションとインポート・オプション.....	203
サンプルの移行定義ファイル .....	204
ライフサイクル管理のログ・ファイル.....	205

## Shared Services のアーティファクトについて

次のタイプの Shared Services のアーティファクトを移行するには、ライフサイクル管理を使用します。

- **ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ):** Shared Services ネイティブ・ディレクトリのアーティファクトを使用して、ユーザー、グループ、委任リスト、カスタム集約の役割、および割り当てられた役割を移行できます。製品固有のセキュリティ・アーティファクト(Oracle Hyperion Planning アクセス権や Oracle Essbase フィルタなど)は、Oracle Hyperion Shared Services Console の製品アプリケーション・グループに個別にリストされます。製品別のアプリケーションのセキュリティ・アーティファクト・リストについては、このガイドの付録を参照してください。
- **タスク・フロー:** Shared Services タスク・フローのアーティファクトを使用して、任意の環境から別の環境へタスク・フローの定義を移行したり、ファイル・システムでタスク・フローを編集したりできます。タスク・フローを使用する EPM System 製品は、Financial Management、Performance Management Architect、および Profitability and Cost Management です。

Shared Services のアーティファクト・リストについては、[195 ページの「Shared Services のアーティファクト・リスト」](#)を参照してください。

## Shared Services の役割の要件

Shared Services のライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、LCM 管理者の役割が割り当てられている必要があります。

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

## Shared Services の移行の前提条件

- Shared Services と Oracle Enterprise Performance Management System をインストールして構成し、これらが実行されていることを確認します。Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに LCM 管理者の役割が割り当てられていることを確認します。Oracle Enterprise Performance Management System User Security Administration Guide を参照してください。
- Shared Services ネイティブ・ディレクトリのアーティファクトを移行するときは、ソース・アプリケーションと宛先アプリケーションの名前が一致していることを確認してください。ソースと宛先の名前が違う場合は、次のアクションを行います:
  1. ソース・アプリケーションのプロビジョニング・アーティファクトをエクスポートし、それらをシステムにダウンロードします。
  2. ソース・アプリケーションの CSV ファイル(sourceapp.csv など)で、ソース・アプリケーション・グループ名を宛先アプリケーション・グループ名に置換した後、ソース・アプリケーション名を宛先アプリケーション名に置換します。
  3. ファイル名を変更して、宛先アプリケーションの名前を使用します (destinationapp.csv など)。
  4. 更新した LCM ファイル・システム・フォルダをアップロードし、宛先アプリケーションにインポートし直します。
- Shared Services のネイティブ・ユーザーを環境間で移行するとき、ソース環境のユーザーをターゲット環境に移行できない場合は、エクスポートしたコンテンツを編集してこれらのユーザーを削除してからインポートする必要があります。ファイル・システムで、Users.csv アーティファクトを開き、移行しない行を削除します。(各行は 1 人のユーザーに対応します。)編集の後、Users.csv アーティファクトをターゲット環境にインポートでき、除外されたユーザーは作成されません。

# Shared Services のアーティファクト・リスト

## サブトピック

- [アーティファクト・リストについて](#)
- [ネイティブ・ディレクトリ\(セキュリティ\)のアーティファクト](#)
- [タスクフローのアーティファクト](#)

Shared Services のアーティファクトは、Shared Services Console の Foundation アプリケーション・グループにリストされています。Foundation アプリケーション・グループの Shared Services アーティファクトを表示できるのは、LCM 管理者のみです。

**注：** Oracle Hyperion Shared Services Console に表示されるアーティファクトは、実装ごとに異なります。

## アーティファクト・リストについて

アーティファクト・リストについて次のことに注意してください：

- **アーティファクト - アーティファクト名**
- **説明** - アーティファクトの説明
- **最終変更時間** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトがインポートされた時間を反映します。アーティファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終変更ユーザー** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーティファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能** - 「はい」の場合、アーティファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーティファクトは製品内でのみ編集できます。
- **依存** - アーティファクトの依存関係を一覧表示します。たとえば、ネイティブ・ディレクトリ・グループのアーティファクトを移行する場合は、ネイティブ・ディレクトリ・ユーザーのアーティファクトも移行する必要があります。

## ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)のアーティファクト

**注：** ネイティブ・ディレクトリは、Shared Services で使用されるデフォルトの LDAP ベースのユーザー・ディレクトリです。

表 57 ネイティブ・ディレクトリのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
ユーザー	ユーザーを識別するユーザー・ディレクトリ項目	はい	いいえ	はい - CSV	なし
グループ	複数のユーザーに同様のアクセス権を割り当てるためのコンテナ	はい	いいえ	はい - CSV	ユーザー
役割	システムのアーティファクトおよび機能にアクセス権を与える権限	はい	いいえ	はい - CSV	ユーザー、グループ
委任リスト	委任管理者が管理できるユーザーおよびグループを識別するリスト	はい	いいえ	はい - CSV	ユーザー、グループ
割り当てられた役割(製品およびアプリケーション別)	プロビジョニング・プロセスでユーザーおよびグループに付与された役割	はい	いいえ	はい - CSV	ユーザー、グループ

## タスクフローのアーティファクト

表 58 タスクフローのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
プロセス定義	ステージ、リンク、アプリケーション詳細などのタスクフローの全情報	はい	いいえ	はい - XML	ネイティブ・ディレクトリ・ユーザー、ネイティブ・ディレクトリ・グループ
タスクフロー ACL	タスクフローでの ACL 情報	はい	いいえ	はい - プロパティ	ネイティブ・ディレクトリ・ユーザー、ネイティブ・ディレクトリ・グループ
タスクフロー・スケジューラ	タスクフローでのスケジューラ情報	はい	いいえ	はい - XML	ネイティブ・ディレクトリ・ユーザー、ネイティブ・ディレクトリ・グループ

## Shared Services アプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係

Shared Services には、製品間のアーティファクトの依存関係はありません。

# Shared Services ネイティブ・ディレクトリの移行オプション

## サブトピック

- [ネイティブ・ディレクトリの移行インポート・オプション](#)
- [ネイティブ・ディレクトリの CSV ファイル](#)

## ネイティブ・ディレクトリの移行インポート・オプション

次に、Shared Services ネイティブ・ディレクトリのインポート・オプションを示します:

- **インポート操作** - オプションを選択します:
    - 「作成」 - ユーザー、グループおよび役割がターゲットに存在しない場合、作成します。ターゲットに存在する場合、作成操作は失敗します。グループ、役割およびプロビジョニングの関係を強化します。
    - 「更新」 - ユーザー、グループおよび役割を更新します。グループ、役割およびプロビジョニングの関係を置換します。
    - 「作成/更新」 - ファイル内のエンティティごとに作成操作を試行します。操作が失敗すると、更新操作が試行されます。
    - 「削除」 - インポートされるユーザー、グループおよび役割を更新します。グループ、役割およびプロビジョニングの関係を削除します。
- 注:** 非アクティブ化されたネイティブ・ディレクトリのユーザーを削除するには、ユーザーを最初にアクティブ化してから削除する必要があります。
- 「**インポートを停止する前の最大エラー数**」: インポート・プロセスを停止する前に許可するエラー数を指定します。

## ネイティブ・ディレクトリの CSV ファイル

ネイティブ・ディレクトリのインポート・ソース・ファイルは、CSV ファイルです。

CSV ファイル・フォーマットは、カンマで区切られたフィールドを含んだ表データ・フォーマットで、二重引用符で囲まれています。ライフサイクル管理は、Excel 対応の CSV ファイルのみサポートしています。Excel で出力する CSV ファイルは、標準の CSV ファイルとは次のように異なります:

- 前後の空白が大きい
- バックスラッシュは特殊文字ではなく、エスケープしません。
- 引用符で囲まれた文字列内の引用符は、バックスラッシュではなく二重引用符でエスケープします。

Excel はデータを CSV フォーマットにする前に変換する

Excel は CSV ファイルで次のような変換を行います。

- タブはシングル・スペースに変換される
- 改行は UNIX の改行("\n")として常に示される
- 12 桁以上の桁数は切り捨てられた科学表記で示される

次のエンティティに対して別々の CSV ファイルを使用できます:

- ユーザー
- グループ
- 役割
- プロビジョニング情報
- 委任リスト

CSV ファイル内の各セクションは、エンティティとヘッダーの 2 つの必須の行により識別されます。エンティティ行は、頭に#(シャープ)文字の付いた事前定義エンティティ名により識別されます。ヘッダー行は、エンティティ行に続きます。ヘッダー行は、カンマで区切られたエンティティの事前定義属性のリストです。

ヘッダー行の属性の順序に意味はありません。ただし、ヘッダー行に続くデータ行では、ヘッダー行が属性を提示する順序でデータを提示する必要があります。データが指定されていない場合は、カンマを使用して値が設定されていないことを示します。エンティティ行、ヘッダー行、およびデータ行には、処理に必要な情報が表示されます。

CSV ファイルで作成、更新、および削除の操作を行うために、次の境界が適用されます。

- ユーザー、グループおよび役割が処理されるのは、一度に 1 行のデータ・ラインである
- グループ・メンバーは、1 つのヘッダーと 1 つの親グループの下では複数のデータ・ラインが処理される
- 役割メンバーは、1 つのヘッダーと 1 つの親役割の下では複数のデータ・ラインが処理される
- ユーザー・プロビジョニングは、1 つのヘッダーと 1 つのグループまたはユーザーの下では複数のデータ・ラインが処理される

エラー処理は、プロセスの境界に基づいて行われます。プロセスの境界では、1 つのエラーは 1 回の失敗としてカウントされます。

サンプルの CSV ファイルおよび属性情報については、次の項を参照してください:

- [200 ページの「グループの CSV ファイル」](#)

## ユーザーの CSV ファイル

### ユーザーの CSV ファイルのサンプル

```
#user

id,provider,login_name,first_name,last_name,description,email,internal_id,password,active

admin,Native Directory,admin,administrator,user,hss admin
user,admin@hyperion.com,"native://DN=cn=911,ou=People,dc=css,dc=hyperion,dc=com?USER",\{SHA\}W6ph5Mm5Pz8GgiULbPgZG37mj9g=,true
```

このサンプルでは、ユーザーの CSV ファイルを使用して、次のようなユーザー admin をネイティブ・ディレクトリに作成します: ログイン名: admin、名前: administrator、姓: user、説明: hss admin user、電子メール ID: admin@hyperion.com、内部 ID: "native://DN=cn=911,ou=People,dc=css,dc=hyperion,dc=com?USER"、暗号化パスワード: {SHA}W6ph5Mm5Pz8GgiULbPgZG37mj9g=、およびアクティブ: true:

**注:** CSV ファイルで指定されているプレーン・テキスト・パスワードは、暗号化されています。

表 59 ユーザー・エンティティの属性

属性	説明と例
id	ユーザーの ID 例: admin
provider	オプション: ソース・ユーザー・ディレクトリ 例: ネイティブ・ディレクトリ
login_name	ユーザーのログイン名 例: admin
first_name	オプション: ユーザーの名前 例: administrator
last_name	オプション: ユーザーの姓 例: user
description	オプション: ユーザーの説明 例: hss admin user

属性	説明と例
email	<b>オプション:</b> ユーザーの電子メール・アドレス <b>例:</b> admin@hyperion.com
internal_id	ネイティブ・ディレクトリ・ユーザーの自動生成された内部 ID <b>例:</b> "native://DN=cn=911,ou=People,dc=css,dc=hyperion,dc=com?USER"
password	ユーザーのパスワード <b>例:</b> {SHA}W6ph5Mm5Pz8GgiULbPgZG37mj9g=
active	ユーザーがアクティブ(true)か非アクティブ(false)かを示します <b>例:</b> true

## グループの CSV ファイル

### グループの CSV ファイルのサンプル

```
#group

id,provider,name,description, internal_id

WORLD,Native Directory,WORLD,Contains all users,611
```

このサンプルのグループの CSV ファイルでは、ネイティブ・ディレクトリにグループ ID: WORLD、説明: Contains all users、および内部 ID: 611 を持つ WORLD グループが作成されます。

表 60 グループ・エンティティの属性

属性	説明と例
id	グループの識別子 <b>例:</b> WORLD
provider	<b>オプション:</b> グループのソース・ユーザー・ディレクトリ <b>例:</b> ネイティブ・ディレクトリ
name	グループ名 <b>例:</b> WORLD
description	<b>オプション:</b> グループの説明 <b>例:</b> Contains all users



属性	説明と例
internal_id	ネイティブ・ディレクトリ・グループの自動生成された内部 ID <b>例:</b> 611 <b>注:</b> エクスポートされたコンテンツの内部 ID 列データを変更しないでください。

## 役割の CSV ファイル

### 役割の CSV ファイルのサンプル

```
#role

id,product_type,name,description

Designer_rep,hava-11.1.1,Designer_rep,Report Designer
```

このサンプルの役割の CSV ファイルでは、ネイティブ・ディレクトリに製品 hava-11.1.1 (Oracle Hyperion Reporting and Analysis、バージョン 11.1.1)の役割 ID: Designer\_rep、役割名: Designer\_rep、および説明: Report Designer の集約役割が作成されます。製品のタイプは、集約役割が属する製品を示します。

**表 61** 役割エンティティの属性

属性	説明と例
id	役割の識別子 <b>例:</b> Designer_rep
product_type	役割が属する製品のタイプ(製品コード-製品のバージョンと指定) <b>例:</b> hava-11.1.1
name	役割名 <b>例:</b> Designer_rep
description	<b>オプション:</b> 役割の説明 <b>例:</b> Report Designer

## プロビジョニングの CSV ファイル

### プロビジョニングの CSV ファイルのサンプル

```
#provisioning
```

```
app_id,product_type,role_id,user_id,group_id
```

```
WebAnalysis,hava-11.1.1,Provisioning Manager,pturner,testgroup
```

このサンプルのプロビジョニングの CSV ファイルでは、アプリケーション名: WebAnalysis の役割割当てが作成されます。役割 ID は、Provisioning Manager で、この役割は製品タイプ:hava-11.1.1 に属します。ユーザー:pturner およびグループ:testgroup に、この役割がプロビジョニングされます。

表 62 プロビジョニング・エンティティの属性

属性	説明と例
app_id	役割が属するアプリケーション 例: WebAnalysis
product_type	役割が属する製品のタイプ(製品コード-製品のバージョンと指定) 例: hava-11.1.1
role_id	一意の役割 ID 例: native://DN=cn=HUB:2,ou=HUB,ou=Roles,dc=css,dc=hyperion,dc=com?ROLE
user_id	この役割にプロビジョニングされたユーザーの一意の ID 例: pturner
group_id	この役割にプロビジョニングされたグループの一意の ID 例: testgroup

## 委任リストの CSV ファイル

### 委任リストの CSV ファイルのサンプル

```
#delegated list

id,name,description,manager_id,manager_provider,user_id,user_provider,group_id,group_provider

testlist,testlist,my_list,admin,Native Directory,,testGroup,NativeDirectory
```

このサンプルの委任リストの CSV ファイルでは、リスト ID とリスト名: testlist、および説明:my\_list を持つ委任リストが作成されます。ネイティブ・ディレクトリで定義されたユーザー admin は、このリストの委任管理者です。このリストにより、admin はネイティブ・ディレクトリで定義されたグループ testGroup を管理できます。

表 63 委任リスト・エンティティの属性

属性	説明と例
id	リスト ID、通常はリスト名と同じ 例: testlist
name	委任リスト名 例: testlist
description	委任リストの説明 例: my_list
manager_id	リストを管理するユーザーまたはグループの一意の ID。各マネージャは、別の定義で識別されている必要があります。 例: admin
manager_provider	マネージャの勘定科目を保管するユーザー・ディレクトリ 例: ネイティブ・ディレクトリ
user_id	リストのユーザー・メンバーの一意の ID。各メンバーは、別の定義で識別されている必要があります。 例: admin
user_provider	ユーザー・メンバーの勘定科目を保管するユーザー・ディレクトリ 例: ネイティブ・ディレクトリ
group_id	リストのメンバーであるグループの一意の ID。各メンバーは、別の定義で識別されている必要があります。 例: myGroup
group_provider	グループの勘定科目を保管するユーザー・ディレクトリ 例: ネイティブ・ディレクトリ

## Shared Services タスク・フロー移行のエクスポート・オプションとインポート・オプション

Shared Services には、タスクフロー固有のエクスポートまたはインポート・オプションはありません。ただし、すべてのインポートは宛先アーティファクトを自動的に上書きします。

タスクフローを使用する Oracle Enterprise Performance Management System 製品は、Financial Management、Performance Management Architect および Profitability and Cost Management です。タスク・フローには、タスク・フローとともにエクスポートされる関連付けられたアプリケーションおよびユーザーがあります。

タスクフローの詳細は、Oracle Hyperion Financial Management、Oracle Hyperion EPM Architect および Oracle Hyperion Profitability and Cost Management の製品ドキュメントを参照してください。

## サンプルの移行定義ファイル

Oracle Hyperion Shared Services の移行定義ファイルに使用される製品コードは、HUB です。

**注：** 移行定義ファイルで正しい構文が使用されていない場合、「MDFファイルのフォーマットが正しくありません」というエラーが表示されます。

### ファイル・システムへのエクスポート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="Application" product="HUB" project="Foundation" application="Shared
Services" />
    <Target type="FileSystem" filePath="/HSS-Shared Services" />
    <Artifact recursive="false" parentPath="/Native Directory" pattern="Users" />
  </Task>
  <Task>
    <Source type="Application" product="HUB" project="Foundation"
application="Deployment Metadata" />
    <Target type="FileSystem" filePath="/HSS-Deployment Metadata" />
    <Artifact recursive="false" parentPath="/Shared Services Registry"
pattern="Properties" />
  </Task>
</Package>
```

### ファイル・システムからのインポート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="FileSystem" filePath="/HSS-Shared Services" />
    <Target type="Application" product="HUB" project="Foundation" application="Shared
Services" />
    <Artifact recursive="false" parentPath="/Native Directory" pattern="Users" />
  </Task>
  <Task>
    <Source type="FileSystem" filePath="/HSS-Deployment Metadata" />
    <Target type="Application" product="HUB" project="Foundation"
application="Deployment Metadata" />
    <Artifact recursive="false" parentPath="/Shared Services Registry"
```

```
pattern="Properties" />
</Task>
</Package>
```

---

## ライフサイクル管理のログ・ファイル

Oracle Hyperion Shared Services の Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理のログ・ファイルは、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide に記載されています。



---

# 用語集

---

**ID** 外部認証におけるユーザーまたはグループの一意の識別です。

**Shared Services レジストリ** ほとんどの EPM System 製品の EPM System 配置情報(インストール・ディレクトリ、データベース設定、コンピュータ名、ポート、サーバー、URL、依存サービス・データなど)を管理する Shared Services レジストリの一部です。

**アクセス権** リソースに対してユーザーが実行できる一連の操作です。

**アップグレード** ソフトウェアのリリースを新しいリリースに置き換えるプロセスです。アップグレードという用語は、メンテナンス・リリースのインストールに対しては使用されません。「メンテナンス・リリース」、「移行」も参照してください。

**アプリケーション** 1)特定のタスクまたはタスクのグループを実行するために設計されたソフトウェア・プログラムです(スプレッドシート・プログラム、データベース管理システムなど)。2)必要とされる特定の分析のセットまたはレポートのセット、あるいはその両方に対応するために使用される、次元および次元メンバーの関連するセットです。

**アーティファクト** 個別のアプリケーションまたはレジストリ・アイテムです(スクリプト、フォーム、ルール・ファイル、Interactive Reporting ドキュメント、財務レポートなど)。オブジェクトとも呼ばれます。

**移行** アプリケーション、アーティファクト、またはユーザーを、別の環境またはコンピュータにコピーするプロセスです。たとえば、テスト環境から本番環境にコピーします。

**移行監査レポート** 移行ログから生成されるレポートです。アプリケーションの移行に関する追跡情報を提供します。

**移行スナップショット** アプリケーションの移行のスナップショットです。移行ログに取込まれます。

**移行定義ファイル(.mdf)** アプリケーションの移行に使用される移行パラメータを含むファイルです。これによりバッチ・スクリプトを処理できます。

**移行ログ** アプリケーションの移行のすべてのアクションとメッセージを取込むログ・ファイルです。

**管理対象サーバー** 内蔵された Java 仮想マシン(Java Virtual Machine (JVM))で実行されるアプリケーション・サーバー・プロセスです。

**外部認証** Oracle EPM System 製品にアプリケーション外に格納されているユーザー情報でログオンします。ユーザー・アカウントは、EPM System によって維持されますが、パスワード管理およびユーザー認証は、Oracle Internet Directory (OID)または Microsoft Active Directory (MSAD)などの企業ディレクトリを使用して、外部サービスによって実行されます。

**グループ** 複数のユーザーに同様のアクセス権を割り当てるためのコンテナです。

**コンテキスト変数** タスクフロー・インスタンスのコンテキストを特定するために、特定のタスクフローに定義される変数です。

**集約役割** Hyperion 製品内の複数の事前定義された役割を集約するカスタム役割です。

**手動ステージ** ユーザーの操作が必要なステージです。

**シングル・サインオン(SSO)** 一度ログオンすると、再度認証を要求されることなしに複数のアプリケーションにアクセスできる機能です。

**自動ステージ** ユーザーの操作を必要としないステージです(データ・ロードなど)。

**ステージ** 1)通常は個別のユーザーにより実行される、タスクフロー内の1つの論理ステップを形成するタスクの説明です。ステージには手動と自動の2つのタイプがあります。2)Profitability では、組織内での割当てプロセスのステップを表す、モデル内の論理区分です。

**ステージ・アクション** 自動ステージで、ステージを実行するために呼び出されたアクションです。

**製品** Shared Services における、Planning や Performance Scorecard などのアプリケーション・タイプです。

**セキュリティ・エージェント** Web アクセス管理プロバイダ(Oracle Access Manager、Oracle Single Sign-On、CA SiteMinder など)です。企業の Web リソースを保護します。

**セキュリティ・プラットフォーム** Oracle EPM System 製品で外部認証とシングル・サインオン機能を使用するためのフレームワークです。

**タスクフロー** ビジネス・プロセスの自動化を指します。手続きのルールに従って、あるタスクフロー参加者から別の参加者にタスクが渡されます。

**タスクフロー・インスタンス** タスクフローの状態と関連データが含まれる、タスクフローの単一のインスタンスです。

**タスクフロー管理システム** タスクフローを定義および作成し、その実行を管理するシステムです。定義付け、ユーザーまたはアプリケーションのやりとり、およびアプリケーションの実行可能ファイルが含まれます。

**タスクフロー参加者** 手動ステージおよび自動ステージの両方について、タスクフローのステージのインスタンスに関連付けられているタスクを実行するリソースです。

**タスクフロー定義** ステージとステージ間の関係のネットワーク、タスクフローの開始と終了を示す基準、および個別のステージに関する情報(参加者、関連アプリケーション、関連アクティビティなど)から構成される、タスクフロー管理システムのビジネス・プロセスです。

**タスク・リスト** 特定のユーザーについて、タスクの詳細ステータスを示すリストです。

**統合** Shared Services を使用して Oracle Hyperion アプリケーションでデータを移動するために実行されるプロセスです。データ統合の定義によりソース・アプリケーションと宛先アプリケーションの間でのデータの移動が指定され、データの動きのグループ化、順序付けおよびスケジュールが決定されます。

**トークン** 外部認証システム上の1つの有効なユーザーまたはグループの暗号化された識別です。

**同期** Shared Services とアプリケーション・モデルの同期です。

**同期済** モデルの最新バージョンがアプリケーションと Shared Services の両方に存在する状態を指します。「モデル」も参照してください。

**認証** 安全対策としての ID の確認です。一般に、認証はユーザー名およびパスワードに基づきます。パスワードおよびデジタル・シグネチャは認証のフォームです。

**バックアップ** アプリケーション・インスタンスの重複コピーです。

**ビジネス・プロセス** 集合的にビジネス上の目標を達成するための一連のアクティビティです。

**フィルタ** データ・セットで、特定の基準に従って値を制限する制約です。たとえば、特定のテーブル、メタデータ、または値を除外したり、アクセスをコントロールしたりする場合に使用されます。

**プロジェクト** 実装でグループ化された Oracle Hyperion 製品のインスタンスです。たとえば、Planning プロジェクトには Planning アプリケーション、Essbase キューブ、Financial Reporting サーバー・インスタンスが含まれることがあります。

**プロビジョニング** ユーザーおよびグループに対して、リソースへのアクセス権を付与するプロセスです。

**変換** 1)アプリケーションの移行後も宛先環境で正しく機能するように、アーティファクトを変換するプロセスです。2)データ・マイニングで、キューブおよびアルゴリズムのセルの間で(双方向に)流れるデータを変更することです。



**モデル** 1)データ・マイニングで、アルゴリズムにより検査されたデータに関する情報の集合です。より広範なデータ・セットにモデルを適用することにより、データに関する有用な情報を生成できます。2)アプリケーション固有の方法で示したデータが含まれるファイルまたはコンテンツの文字列です。モデルは Shared Services により管理される基本データであり、次元と非次元のアプリケーション・オブジェクトという 2 つの主要なタイプがあります。3) Business Modeling で、検査対象の領域からの業務および財務上のフローを示し、また計算するために接続されたマシン・ネットワークです。

**役割** リソースへのアクセス権をユーザーおよびグループに付与する際に使用される手段です。

**ユーザー・ディレクトリ** ユーザーおよびグループの情報を集中管理する場所で、リポジトリまたはプロバイダとも呼ばれます。最も普及したユーザー・ディレクトリとして、Oracle Internet Directory (OID)、Microsoft Active Directory (MSAD)、Sun Java System Directory Server などがあります。

**ライフサイクル管理** 製品環境間でのアプリケーション、リポジトリ、または個別のアーティファクトの移行プロセスです。

**リポジトリ** ビューおよびクエリーに使用するためのメタデータ、フォーマットおよび注釈の情報のストレージの場所です。

**リンク** (1)リポジトリ・オブジェクトへの参照です。リンクは、フォルダ、ファイル、ショートカットおよび他のリンクを参照できます。(2)タスクフローで、あるステージのアクティビティが終了して次のアクティビティが開始するポイントです。

**リンク条件** タスクフローのステージを順序付けるためにタスクフロー・エンジンにより評価される論理式です。

**ロード・バランシング** 複数のサーバーに要求を分散すること。これによって、エンド・ユーザーのパフォーマンスが最適化されます。



## 索引

## A - Z

## Calculation Manager

- LCM ログ・ファイル, 92
- アプリケーションの移行, 90
- アーティファクト・リスト, 88
- 移行オプション, 91
- 移行の前提条件, 88
- インポート・オプション, 91
- エクスポート・オプション, 91
- サンプルの移行定義ファイル, 91
- 式のアーティファクト, 90
- 情報, 87
- スクリプトのアーティファクト, 90
- 製品間のアーティファクトの依存関係, 90
- 製品の役割, 87
- テンプレートのアーティファクト, 90
- ルール・セットのアーティファクト, 89
- ルールのアーティファクト, 89

CSV ファイル、Shared Services ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)用, 197

EPM System のコンテンツのリスト, 77

EPM System レジストリ。「Shared Services レジストリ」を参照

## Essbase

- Essbase Server アーティファクト, 95
- Essbase データ・アーティファクト, 157
- LCM ログ・ファイル, 100
- アプリケーション・アーティファクト, 96
- アプリケーションの移行, 98
- アーティファクト・リスト, 95
- 移行オプション, 99
- 移行に関する考慮事項, 98
- 移行の前提条件, 94
- インポート・オプション, 99
- エクスポート・オプション, 99
- サンプルの移行定義ファイル, 100, 104
- 情報, 93
- 製品間のアーティファクトの依存関係, 98

製品の役割, 94

データベース・アーティファクト, 96

Essbase Server アーティファクト, 95

## Essbase Studio

Essbase Studio アーティファクト, 103

LCM ログ・ファイル, 105

アプリケーションの移行, 103

アーティファクト・リスト, 102

移行オプション, 103

移行に関する考慮事項, 103

移行の前提条件, 102

インポート・オプション, 103

エクスポート・オプション, 103

情報, 101

製品間のアーティファクトの依存関係, 103

製品の役割, 101

Essbase Studio アーティファクト, 103

Essbase アプリケーション・アーティファクト, 96

Essbase データベース・アーティファクト, 96

## Essbase の役割

計算, 94

サーバー・アクセス, 94

データベース・マネージャ, 94

## FDMEE

LCM ログ・ファイル, 113

アプリケーション・データ, 109

アプリケーションの移行, 112

アーティファクト・リスト, 109

移行に関する考慮事項, 112

移行の前提条件, 108

エクスポートとインポートのオプション, 112

グローバル設定アーティファクト, 111

サンプルの移行定義ファイル, 113

情報, 107

製品間のアーティファクトの依存関係, 112

製品の役割, 108

## Financial Close Management

Account Reconciliation Manager アーティファクト, [119](#)  
 Close Manager アーティファクト, [118](#)  
 LCM ログ・ファイル, [124](#)  
 アーティファクト・リスト, [117](#)  
 移行オプション, [122](#)  
 移行に関する考慮事項, [122](#)  
 移行の前提条件, [116](#)  
 インポート・オプション, [122](#)  
 エクスポート・オプション, [122](#)  
 サンプルの移行定義ファイル, [123](#)  
 情報, [115](#)  
 製品の役割, [116](#)

## Financial Management

LCM ログ・ファイル, [135](#)  
 Performance Management Architect アプリケーションの移行, [127](#)  
 アーティファクト・リスト, [127](#)  
 移行オプション, [133](#)  
 移行に関する考慮事項, [133](#)  
 移行の前提条件, [126](#)  
 インポート・オプション, [133](#)  
 エクスポート・オプション, [133](#)  
 クラシック・アプリケーションの移行, [126](#)  
 構成アーティファクト, [128](#)  
 サンプルの移行定義ファイル, [134](#)  
 仕訳アーティファクト, [131](#)  
 次元アーティファクト, [129](#)  
 情報, [125](#)  
 製品の役割, [126](#)  
 セキュリティのアーティファクト, [132](#)  
 ドキュメント・アーティファクト, [129](#)  
 内部取引アーティファクト, [131](#)  
 フェーズ送信アーティファクト, [132](#)  
 フォーム・アーティファクト, [130](#)  
 ベース・レベル・データ・アーティファクト, [128](#)  
 メンバー・リストのアーティファクト, [132](#)  
 ルールのアーティファクト, [132](#)

Financial Management の役割、アプリケーション管理者, [126](#)

LCM 管理者の役割, [16](#), [24](#), [69](#)

LCM コマンドライン・ユーティリティ。「ライフサイクル管理ユーティリティ」を参照

LCM デザイナーの役割, [16](#), [27](#)

LCM ホーム, [21](#), [69](#)

## LCM ログ・ファイル

Calculation Manager, [92](#)  
 Essbase Studio 用, [105](#)  
 Essbase 用, [100](#)  
 FDMEE の場合, [113](#)  
 Financial Close Management 用, [124](#)  
 Financial Management について, [135](#)  
 Performance Management Architect, [145](#)  
 Performance Scorecard 用, [151](#)  
 Planning 用, [165](#)  
 Profitability and Cost Management 用, [176](#)  
 Reporting and Analysis, [191](#)  
 Shared Services 用, [205](#)  
 配置メタデータ, [86](#)

## Performance Management Architect

Financial Management のアプリケーションの移行, [127](#)  
 LCM ログ・ファイル, [145](#)  
 アプリケーションの移行, [143](#)  
 アプリケーション・メタデータのアーティファクト, [139](#)  
 アーティファクト・リスト, [138](#)  
 移行オプション, [143](#)  
 移行に関する考慮事項, [142](#)  
 移行の前提条件, [138](#)  
 インポート・オプション, [143](#)  
 エクスポート・オプション, [143](#)  
 共有ライブラリ次元のアーティファクト, [141](#)  
 サンプルの移行定義ファイル, [144](#)  
 次元アクセスのアーティファクト, [141](#)  
 情報, [137](#)  
 製品間のアーティファクトの依存関係, [143](#)  
 製品の役割, [137](#)  
 データ同期のアーティファクト, [142](#)

## Performance Management Architect アプリケーションの移行

Planning 用, [154](#)

## Performance Scorecard

LCM ログ・ファイル, [151](#)  
 アプリケーションの移行, [149](#)  
 アーティファクト・リスト, [148](#)  
 移行オプション, [150](#)  
 移行の前提条件, [148](#)  
 インポート・オプション, [150](#)  
 エクスポート・オプション, [150](#)  
 オブジェクトのアーティファクト, [149](#)

- 管理オプションのアーティファクト, 149
- サンプルの移行定義ファイル, 150
- 情報, 147
- 製品間のアーティファクトの依存関係, 149
- 製品の役割, 147
- Planning
  - Essbase データ・アーティファクト, 157
  - LCM ログ・ファイル, 165
  - Performance Management Architect アプリケーションの移行, 154
  - アプリケーションの移行, 163
  - アーティファクト・リスト, 155
  - 移行オプション, 163
  - 移行に関する考慮事項, 162
  - 移行の前提条件, 154
  - インポート・オプション, 163
  - エクスポート・オプション, 163
  - グローバル・アーティファクト, 157
  - 構成アーティファクト, 156
  - サンプルの移行定義ファイル, 164
  - 情報, 153
  - 製品間のアーティファクトの依存関係, 163
  - 製品の役割, 153
  - セキュリティのアーティファクト, 162
  - プランのタイプのアーティファクト, 160
  - リレーショナル・データのアーティファクト, 161
- Planning 管理者の役割, 154
- Planning の役割
  - Planning 管理者, 154
  - アプリケーション作成者, 154
- Profitability and Cost Management
  - LCM ログ・ファイル, 176
  - アプリケーションの移行, 174
  - アーティファクト・リスト, 167, 170
  - 移行オプション, 175
  - 移行の前提条件, 169
  - インポート・オプション, 175
  - エクスポート・オプション, 175
  - サンプルの移行定義ファイル, 175
  - 詳細アーティファクト, 172
  - 情報, 167
  - 製品間のアーティファクトの依存関係, 174
  - 製品の役割, 169
  - 標準アーティファクト, 171
  - モデル・アーティファクト, 167
- Reporting and Analysis
  - LCM ログ・ファイル, 191
  - アプリケーションの移行, 189
  - アーティファクト・タイプ, 187
  - アーティファクト・リスト, 179
  - 移行オプション, 190
  - 移行の前提条件, 178
  - インポート・オプション, 190
  - エクスポート・オプション, 190
  - 管理オプションのアーティファクト, 185
  - サンプルの移行定義ファイル, 190
  - 情報, 177
  - ジョブ・サービス・プロパティ構成, 178
  - スケジュール・オブジェクトのアーティファクト, 181
  - 製品間のアーティファクトの依存関係, 189
  - 製品の役割, 177
  - 製品プリファレンスのアーティファクト, 181
  - セキュリティのアーティファクト, 180
  - データ・アクセス・サービスのデータ・ソース作成, 179
  - 物理リソースのアーティファクト, 180
  - リポジトリ・オブジェクトのアーティファクト, 182
- Shared Services
  - LCM ログ・ファイル, 205
  - アプリケーションの移行, 196
  - アーティファクト・リスト, 195
  - 移行の前提条件, 194
  - 高可用性とライフサイクル管理, 22
  - サンプルの移行定義ファイル, 204
  - 情報, 193
  - 製品の役割, 194
  - セキュリティのアーティファクト, 195
  - タスク・フローのアーティファクト, 196
  - タスク・フローの移行オプション, 203
  - ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の CSV ファイル, 197
  - ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行オプション, 197
  - ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)のインポート・オプション, 197
  - ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)のエクスポート・オプション, 197
  - ネイティブ・ディレクトリのアーティファクト, 195
- Shared Services Console

- アプリケーション監査レポートの生成, 64
  - アーティファクトの移行, 43
  - アーティファクトの検索, 42
  - アーティファクトの表示, 41
  - アーティファクトの変更レポートの生成, 65
  - 移行ステータスの表示, 63
  - 移行データの削除, 64
  - 移行の前提条件, 19
  - 概要, 33
  - 起動, 33
  - 情報, 34
  - ツールバー・ボタン, 33
  - ネイティブ・ディレクトリ・アーティファクトの移行, 56
  - ファイル・システムからのインポート, 46
  - ファイル・システムへの移行, 44
  - 編集後の個々のアーティファクトのインポート, 54
  - 編集のための Shared Services レジストリ・データの移行, 58
  - 編集のための個々のアーティファクトのエクスポート, 53
  - メニュー, 33
  - Shared Services サーバー、移行先, 43
  - Shared Services レジストリ
    - データのインポート, 60
    - データのエクスポート, 59
    - データの表示, 59
    - データの編集, 60
    - 編集用のデータの移行, 58
  - Shared Services レジストリのアーティファクト, 85
- あ行**
- アクティビティの変更レポート
    - ライフサイクル管理ユーティリティ, 80
  - アップグレード、定義, 15
  - 宛先オプション, 43
  - アプリケーション
    - 宛先オプションの定義, 43
    - 宛先の定義, 43
    - アプリケーション・グループからの除去, 37
    - アーティファクトの検索, 42
    - 移行, 43
    - 移動, 38
    - 監査, 64
  - 既存のアプリケーション・グループへの追加, 37
  - 削除, 39
  - 新規アプリケーション・グループへの追加, 36
  - すべて表示, 42
  - 選択済のみ表示, 42
  - ソース・オプションの定義, 43
  - 定義, 35
  - アプリケーション管理者の役割, 126
  - アプリケーション・グループ
    - アプリケーションを新規に追加, 36
    - 削除, 37
    - 作成, 36
    - 定義, 35
    - 名前変更, 37
  - アプリケーション作成者の役割, 154
  - アプリケーションの移行
    - Calculation Manager, 90
    - Essbase Studio 用, 103
    - Essbase 用, 98
    - FDMEET の場合, 112
    - Performance Management Architect, 143
    - Performance Scorecard 用, 149
    - Planning 用, 163
    - Profitability and Cost Management 用, 174
    - Reporting and Analysis, 189
    - Shared Services 用, 196
  - アプリケーションの移動, 38
  - アプリケーションの監査, 64
  - アプリケーション・メタデータのアーティファクト, 139
  - アーティファクト
    - Calculation Manager について, 87
    - Essbase Studio について, 101
    - Essbase について, 93
    - FDMEET の場合, 109, 111
    - Financial Close Management 用, 118, 119
    - Performance Scorecard について, 147
    - Profitability and Cost Management について, 167
    - Profitability and Cost Management 用, 171, 172
    - Shared Services Console での検索, 42
    - Shared Services について, 193
    - 宛先オプションの定義, 43
    - 宛先の定義, 43
    - 移行, 43

- 検索対象, 42
- 個々の編集, 53
- すべて表示, 42
- 選択済のみ表示, 42
- ソース・オプションの定義, 43
- ダウンロードおよびアップロード, 54
- 定義, 15
- 配置メタデータについて, 83
- 表示, 41
- ファイル・システム上での個別の Reporting and Analysis の編集, 186
- 編集後に Reporting and Analysis をインポート, 186
- 編集後の個々のインポート, 54
- 編集目的での個別の Reporting and Analysis アーティファクトのエクスポート, 186
- 編集用に個々をエクスポート, 53
- アーティファクト・タイプ、Reporting and Analysis, 187
- アーティファクトの検索, 42
- アーティファクトの検索オプション, 42
- アーティファクトの参照, 41
- アーティファクトのダウンロードおよびアップロード, 54
- アーティファクトの調査, 41
- アーティファクトの表示, 41
- アーティファクトの変更レポート, 65
- アーティファクト・リスト
  - Calculation Manager, 88
  - Essbase Studio 用, 102
  - Essbase 用, 95
  - FDMEET の場合, 109
  - Financial Close Management 用, 117
  - Financial Management について, 127
  - Performance Management Architect, 138
  - Performance Scorecard 用, 148
  - Planning 用, 155
  - Profitability and Cost Management 用, 167, 170
  - Reporting and Analysis, 179
  - Shared Services 用, 195
  - 配置メタデータ, 84
- アーティファクト・リスト・オプション, 42
- 移行
  - Shared Services サーバーに, 43
  - アプリケーションとアーティファクト, 43
  - 委任リスト, 56
  - グループ, 56
  - スケジュール, 69
  - ステータスの表示, 63
  - ステータス・レポートの削除, 63
  - セキュリティ, 56
  - ネイティブ・ディレクトリ, 56
  - 役割, 56
  - ユーザー, 56
- 移行オプション
  - Calculation Manager, 91
  - Essbase Studio 用, 103
  - Essbase 用, 99
  - FDMEET の場合, 112
  - Financial Close Management 用, 122
  - Financial Management について, 133
  - Performance Management Architect, 143
  - Performance Scorecard 用, 150
  - Planning 用, 163
  - Profitability and Cost Management 用, 175
  - Reporting and Analysis, 190
  - Shared Services タスク・フロー用, 203
  - Shared Services ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)用, 197
  - 配置メタデータ, 86
- 移行ステータス・レポート
  - 削除, 63
  - 表示, 63
- 移行、定義, 15
- 移行定義
  - Calculation Manager のサンプル・ファイル, 91
  - Essbase Studio のサンプル・ファイル, 104
  - Essbase のサンプル・ファイル, 100
  - FDMEET のサンプル・ファイル, 113
  - Financial Close Management のサンプル・ファイル, 123
  - Financial Management のサンプル・ファイル, 134
  - Performance Management Architect のサンプル・ファイル, 144
  - Performance Scorecard のサンプル・ファイル, 150
  - Planning のサンプル・ファイル, 164
  - Profitability and Cost Management のサンプル・ファイル, 175
  - Reporting and Analysis のサンプル・ファイル, 190
  - Shared Services のサンプル・ファイル, 204

- XML スキーマ, 70
  - サンプル, 74
  - ファイルの要素, 70
  - 移行データ
    - 削除, 64
  - 移行に関する考慮事項
    - Essbase Studio 用, 103
    - Essbase 用, 98
    - FDMEET の場合, 112
    - Financial Close Management 用, 122
    - Financial Management について, 133
    - Performance Management Architect, 142
    - Planning 用, 162
    - 配置メタデータ, 85
  - 移行の前提条件
    - Calculation Manager, 88
    - Essbase Studio 用, 102
    - Essbase 用, 94
    - FDMEET の場合, 108
    - Financial Close Management 用, 116
    - Financial Management について, 126
    - Performance Management Architect, 138
    - Performance Scorecard 用, 148
    - Planning 用, 154
    - Profitability and Cost Management 用, 169
    - Reporting and Analysis, 178
    - Shared Services Console, 19
    - Shared Services 用, 194
    - 配置メタデータ, 84
    - ライフサイクル管理ユーティリティ, 19
  - 移行の定義, 43
  - 移行プロパティ, 60
  - 委任リスト、移行, 56
  - インストール
    - ライフサイクル管理, 21
    - ライフサイクル管理ユーティリティ, 69
  - インポート
    - Shared Services レジストリ・データ, 60
    - セキュリティ, 56
    - ファイル・システムから, 46
    - 編集後の個々のアーティファクト, 54
    - 編集後の個別 Reporting and Analysis アーティファクト, 186
  - インポート・オプション
    - Calculation Manager, 91
    - Essbase Studio 用, 103
    - Essbase 用, 99
  - Financial Close Management 用, 122
  - Financial Management について, 133
  - Performance Management Architect, 143
  - Performance Scorecard 用, 150
  - Planning 用, 163
  - Profitability and Cost Management 用, 175
  - Reporting and Analysis, 190
  - Shared Services ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)用, 197
  - エクスポート
    - Shared Services レジストリ・データ, 59
    - セキュリティ, 56
    - ネイティブ・ディレクトリ, 56
    - ファイル・システムへ, 44
    - 編集目的での個別の Reporting and Analysis アーティファクト, 186
    - 編集用の個別アーティファクト, 53
  - エクスポート・オプション
    - Calculation Manager, 91
    - Essbase Studio 用, 103
    - Essbase 用, 99
    - Financial Close Management 用, 122
    - Financial Management について, 133
    - Performance Management Architect, 143
    - Performance Scorecard 用, 150
    - Planning 用, 163
    - Profitability and Cost Management 用, 175
    - Reporting and Analysis, 190
    - Shared Services ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)用, 197
  - オブジェクトのアーティファクト, 149
- か行**
- 監査レポート, 64
  - 管理オプションのアーティファクト, 149, 185
  - 起動
    - Shared Services Console, 33
  - 共有ライブラリ次元のアーティファクト, 141
  - クイック・スタート, 22
  - クラシック・アプリケーションの移行
    - Financial Management について, 126
  - グループ、移行, 56
  - グローバル・アーティファクト, 157
  - 計算制御アーティファクト, 173
  - 計算の役割, 94
  - 構成アーティファクト, 128, 156



コマンドライン・ユーティリティ。「ライフサイクル管理ユーティリティ」を参照

## さ行

削除

アプリケーション, 39

アプリケーション・グループ, 37

アプリケーション・グループのアプリケーション, 37

作成

アプリケーション・グループ, 36

「参照」タブ, 33

サーバー・アクセスの役割, 94

式のアートifacts, 90

使用開始, 19

仕訳アर्टifacts, 131

次元アクセスのアर्टifacts, 141

次元アर्टifacts

Financial Management について, 129

ジョブ・サービス・プロパティ構成、Reporting and Analysis, 178

スクリプトのアर्टifacts, 90

スケジュール・オブジェクトのアर्टifacts, 181

スケジュール済の移行, 69

製品の役割

Calculation Manager, 87

Essbase Studio 用, 101

Essbase 用, 94

FDMEE の場合, 108

Financial Close Management 用, 116

Financial Management について, 126

Performance Management Architect, 137

Performance Scorecard 用, 147

Planning 用, 153

Profitability and Cost Management 用, 169

Reporting and Analysis, 177

Shared Services 用, 194

製品プリファレンスのアर्टifacts, 181

セキュリティ

移行, 56

ライフサイクル管理ユーティリティ, 24

セキュリティのアर्टifacts

Financial Management について, 132

Planning 用, 162

Reporting and Analysis, 180

Shared Services 用, 195

選択済アर्टifacts・オプション, 42

前提条件, 19

ソース・アर्टifactsまたはアプリケーション、定義, 43

ソース・オプション、定義, 43

## た行

タスク・タブ, 33

タスク・フローのアर्टifacts, 196

ターゲット・オプション、定義, 43

テンプレートのアर्टifacts, 90

データ

移行の削除, 64

データ・アクセス・サービスのデータ・ソース作成、Reporting and Analysis, 179

データ同期のアर्टifacts, 142

データの移行

Financial Management について, 133

Planning 用, 162

データベース・マネージャの役割, 94

登録アर्टifacts, 85

ドキュメント・アर्टifacts, 129

## な行

内部取引アर्टifacts, 131

名前変更、アプリケーション・グループアプリケーション・グループ, 37

ネイティブ・ディレクトリ、移行, 56

ネイティブ・ディレクトリのアर्टifacts, 195

## は行

配置メタデータ

LCM ログ・ファイル, 86

Shared Services レジストリのアर्टifacts, 85

アर्टifacts・リスト, 84

移行オプション, 86

移行に関する考慮事項, 85

エクスポートおよびインポートの前提条件, 84

情報, 83

登録アर्टifacts, 85

役割, 84

バックアップおよびリカバリ, 22, 24

表示

Shared Services レジストリ・データ, 59  
 ビュー・ペイン, 33  
 ファイル・システム  
   移行先, 43  
   インポート元, 46  
   エクスポート先, 44  
   エクスポートの繰返し, 45  
 「ファイル・システム」ノード  
   インポート元, 46  
   エクスポート先, 44  
   再エクスポート先, 45  
 ファイル・システムへのエクスポートの繰返し, 45  
 フェーズ送信アーティファクト, 132  
 フォーム・アーティファクト  
   Financial Management について, 130  
 物理リソースのアーティファクト, 180  
 プランのタイプのアーティファクト  
   Planning 用, 160  
 プロジェクト。「アプリケーション・グループ」を参照  
 プロパティ、移行, 60  
 変更、アプリケーション・グループ, 37  
 編集  
   Shared Services レジストリ・データ, 60  
   個々のアーティファクト, 53  
   ファイル・システム上の個別 Reporting and Analysis アーティファクト, 186  
 ベース・パス、ライフサイクル管理ユーティリティを使用して指定する, 76  
 ベース・レベル・データ・アーティファクト, 128

## ま行

メンバー・リストのアーティファクト, 132  
 モデル・アーティファクト, 167, 171, 172

## や行

役割

Calculation Manager, 87  
 Essbase Studio 用, 101  
 Essbase 用, 94  
 FDMEE の場合, 108  
 Financial Close Management 用, 116  
 Financial Management について, 126  
 LCM 管理者, 16  
 LCM デザイナの役割, 16, 27

Performance Management Architect, 137  
 Performance Scorecard 用, 147  
 Planning 管理者, 154  
 Planning 用, 153  
 Profitability and Cost Management 用, 169  
 Reporting and Analysis, 177  
 Shared Services 用, 194  
   アプリケーション管理者, 126  
   アプリケーション作成者, 154  
   移行, 56  
   計算, 94  
   サーバー・アクセス, 94  
   データベース・マネージャ, 94  
   配置メタデータ, 84  
   例外, 16  
 ユーザー、移行, 56  
 ユーザー管理コンソール。「Shared Services Console」を参照  
 要件, 19  
 要素、移行定義, 70  
 用途, 25

## ら行

ライフサイクル管理

  インストール, 21  
   機能, 15  
   クイック・スタート, 22  
   コンポーネント, 16  
   サポートする製品, 17  
   使用開始, 19  
   情報, 15  
   製品コード・リスト, 18  
   セキュリティ, 24  
   前提条件, 19  
   用途, 25  
 高可用性、ライフサイクル管理の構成, 22  
 ライフサイクル管理ユーティリティ  
   EPM System のコンテンツのリスト, 77  
   EPMExportAll, 81  
   EPMImportAll, 81  
   Foundation Services 以外のマシンから実行, 76  
   LCM ホーム, 69  
   アクティビティの変更レポート, 80  
   アーティファクト要素, 73  
   移行定義, 69

移行定義の作成, 69  
 移行の前提条件, 19  
 インストール, 69  
 オプション要素, 74  
 機能, 69  
 最終エクスポート時間以降に変更されたアーティファクトのリスト, 78  
 サーバー・コンポーネントのインストールの場所, 69  
 使用, 67  
 実行, 75  
 ソース要素, 71  
 タスク要素, 71  
 ターゲット要素, 72  
 ベース・パスの指定, 76  
 役割, 69  
 ユーザーおよびパスワード要素, 70  
 ユーザーによって変更されたアーティファクトのリスト, 79  
 ロケール要素, 70  
 リポジトリ・オブジェクトのアーティファクト, 182  
 リレーショナル・データのアーティファクト, 161  
 ルール・セットのアーティファクト, 89  
 ルールのアーティファクト, 89  
   Financial Management について, 132  
 レポート  
   アプリケーション監査レポート, 64  
   アーティファクトの変更レポート, 65  
   移行ステータス, 63  
 ログ・ファイル  
   Calculation Manager, 92  
   Essbase Studio 用, 105  
   Essbase 用, 100  
   FDMEE の場合, 113  
   Financial Close Management 用, 124  
   Financial Management について, 135  
   Performance Management Architect, 145  
   Performance Scorecard 用, 151  
   Planning 用, 165  
   Profitability and Cost Management 用, 176  
   Reporting and Analysis, 191  
   Shared Services 用, 205  
   配置メタデータ, 86

## わ行

割り当てられた役割、移行, 56

A-Z あ行 か行 さ行 た行 な行 は行 ま行 や行 ら行 わ行